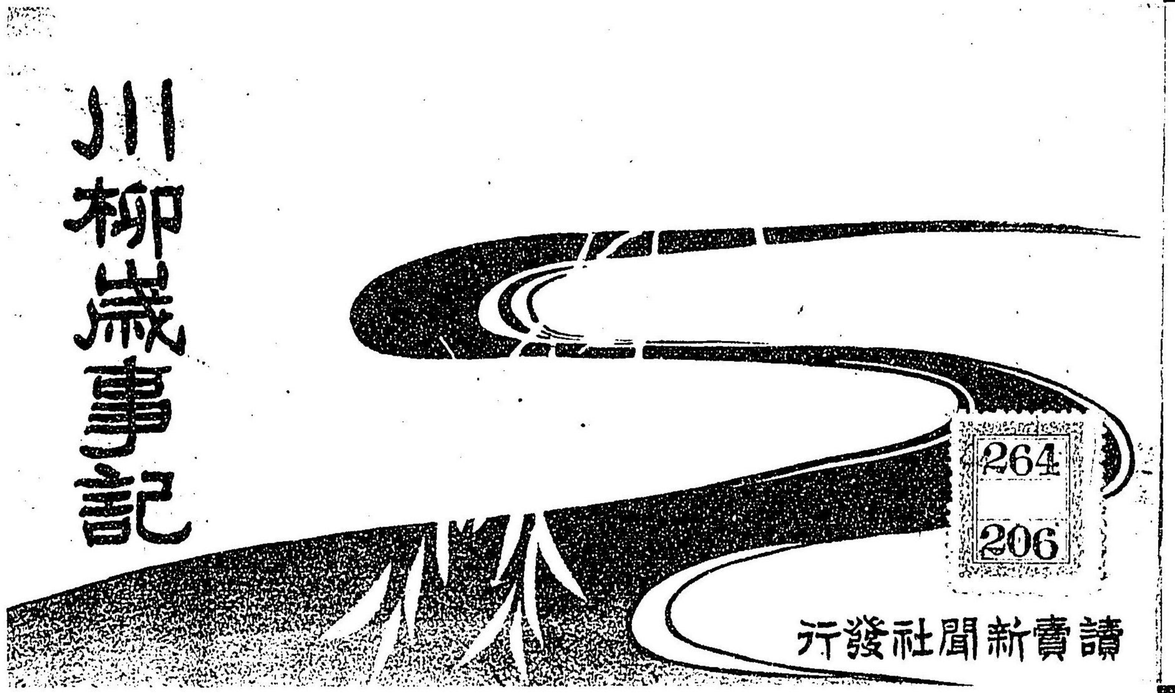
川柳歲事記



讀賣新聞社發行

特48
869

安藤幻怪坊著

川柳歳事記

讀賣新聞社發行

明治
43. 7. 11
内交

川柳歳事記

序

曲亭馬琴翁の俳諧歳時記は、天地人の三才に亘りて殆んど叙説せざることなし、此故に俳林に遊ぶの好士是を以て栞と爲す、初代川柳翁出てより茲に一百餘年に及び、爾來川柳點なる句風は全國に流行するに至れり、然りといへども古川柳の特色とする所は多く江戸に於ける人事の描寫に在り、故に今人より是等の古句を見れば恰も霧を隔てゝ燈光を望むの感なき能はず余深く之を慨し思を古句の研鑽に潜むること多年なり、茲に川柳歳事記を草して馬琴翁の偉蹟に倣ひて以て初學入門の栞と爲すといふ

明治四十三年六月

金港妙法山中弘誓院草堂
川柳社にて

幻怪坊

跋

川柳と云へば作句上何の造作も無い樣に思はれるが、他の一般の詩、殊に略ぼ詩形を同うして居る俳句に比較して甲乙のあるべき筈は無い、狂句を川柳と誤解して居るものは兎も角、少しく古川柳を研究して、川柳の何たるを味ふたものは其の作句の甚だ容易ならざる事を認めるであらう、詩としての川柳は、人情世態を叙するに最も適すると同時に、なか〳〵其堂に上り得べきものではない、故に眞の川柳を作らんと欲するものは先づ古川柳を研究して而して後の事である、然れども之を研究するの資料に乏しい事は我も人も共に遺憾とする所である、余が友安藤幻怪坊氏は大に此點

に注目し、曩に柳樽を飜刻して同好に頒ち、今又多年の苦心に成れる川柳歳事記を上梓する事となつた、氏が斯道の研究に忠實にして、併せて後進を指導するに熱心なる誠に敬服の外は無い、のみならず、此册子は斯道の先輩として一方に雄鎭たるの手腕を揮ひて編纂したもので、一度び之に依て研究を始めんか、初學の者と雖も欲する儘に古川柳の眞味を探り更に進んで新作を試みるに少なからざる便利を得て、其の斯道に貢献するの功は、至つて大なるものがあるであらう、喜びの餘り聊か蕪辭を述べて後序とする、

明治庚戌文月

而笑子識

例言

一本書は專ら初學者の爲に編みしものにして、自叙に述べし如く江戸時代の人事を紹介し、一面古句集として參考に供するを目的とせり

一本書採錄の古句は、前句附萬句合、柳樽(初篇より二十四篇迄)川柳大全、時代狂句選、滑稽類題發句集より拔採せり、故に天保頃の句の誤つて交れることあるべし

一本書は假名遣等は多く原書に依りて改めずと雖も句中「時鳥より此事とりやうり人」の如きは料理人と改めて讀易からしむるやう爲せり、此例甚だ多し

一本書は僅かに三年の短日月の間に編輯したるものにして遺漏尠からずと雖も之を增補するの氣力無く更に再版の時を俟つて完璧たらし

めんことを期す

一本書編輯に就ては社中諸氏の助言に聽けり且つ半魔氏は其珍藏の柳多留を始めとして多くの參考書を貸與せられて業を助けられたり、余の深く感謝する所なり

一本書出版に就ては、滑稽文學社主任窪田而笑子氏の多大の周旋と手紙雜誌主任桑田春風氏の高助とに依る、茲に謹んで謝意を表す

一本書記事中誤謬の箇所あれば的確なる證左を擧げて指摘せられたし其全文は川柳社發行「新川柳」に掲載して謝意を表し、更に再版の時に訂正すべし

編者識す

▲

川瀨ゆく白帆ながめて
柳かげ釣する子あり
歳とへば十まり七つ
事もなげ嚴げづりて
記しおく文字のかず〳〵
にくきその心じらひよ
題せんかわれにも許せ
すゞろなる歌の一ふし

○

草庵の木戸に一株の柳うゑて
風をまつべき夏は來にけり

手紙雜誌編輯局にて

庚戌初夏　辱知　春風生

川柳歳事記總目次

正月

元日 一　立春 二　新年 二
門松 二　雑煮 三　屠蘇 三
數の子 三　禮帳 四　手鞠 四
年男 四　初富士 五　歯朶 五
寶引 五　破魔弓 六　遣羽子 六
橙 七　若餅 八　霞 八
年禮附年玉 八　禮の供 一二　双六 一二
大黒舞 一三　飾り柿 一三　喰摘 一三
春風 一四　初卯 一四　惠方 一四
餅 一四　御降 一五　萬歳 一五
店卸 一八　紙鳶 一九　鳥追 一九
太神樂 二一　歌骨牌 二三　拂扇箱買 二四
初湯 二五　姫始 二五　寶船附初夢 二七
御福の湯 二八　初子の日 二八　松の内 二九
六日年越 三〇　七草 三一　猿曳 三三
寺の禮 三四　餘寒 三五　嫁の禮 三五
帳綴 三六　削掛 三六　猫の戀 三六
小豆粥祝ふ 三六　四季施 三七　褰日 三七
藪入 三八　鶴 四一　鶴の吸物 四一
愛比須講 四一　弘法大師參詣 四二
鷽替 四三　水仙 四三

二月

初午 四四　二日灸 四五　鰊 四七
冬奉公人歸る 四七　土筆 四七
惣 四八　蕗の薹 四九
若草 四九　山笑 四八
梅 四九　雪解 四九　春雪 五〇
白魚 五一　彼岸附六阿彌陀
歸雁 五三　蕨 五三　事始 五三
蝶 五四　蛙 五三　蕪 五三
豐島屋白酒 五五　涅槃會 五四　西行忌 五五
長閑 五七　春雨 五七　初雷 五五　田樂 五五
蕨 五八　雛市 五八　雛子 五七

三月

上巳附雛遊 六〇　春野 六五　汐干狩 六五
雛しまふ 六六　奉公人出代り 六六
桃花 六八　草餅 六八　野掛 六八
芽花 六九　櫻鯛 七〇　摘草 七一
蠶のう天氣 七一　麗 七二
花の宵 七二　御能拜見 七二　裝束市 七二
春の月 七三　暖 七三　春宵 七三
花の朝 七三　花の宴 七四　山椒 七四
花曇 七四　茗荷 七四　花の御札 七五
花の幕 七五　釣魚 七六　投網 七六

花 七六　花の山 七八　花見 七九
花の留主 八〇　花の雨 八〇　東叡山の櫻 八一
飛鳥山の櫻 八二　御殿山の櫻 八三　隅田川の櫻 八三
梅若塚大念佛 八六　吉原の櫻 八七
坊主持 八九　花見團子 八九　花の暮 八九
花戻り 九〇　花盜人 九〇　花の供 九〇
花の翌日 九〇　花散る 九一　櫻草 九一
開帳 九二　勸進相撲 九二　柳 九三
躑躅 九四　遲日 九五　棣棠 九五
鶉 九五

四月

更衣 九六　灌佛會 九六　初鰹 九八
卯の花 一〇四　杜若 一〇四　山梔子 一〇五
杜鵑 一〇五　比目魚 一〇八　牡丹 一〇八
蜘蛛 一〇八　馬蓼 一〇八　葉櫻 一〇九
蚤 一〇九　剖葦鳥 一〇九　筑摩祭 一〇九
蚊遣火 一一〇　蝙蝠 一一〇　子 一一一
蚊 一一一　鰯 一一一　蚊帳賣 一一二
蚊帳附枕蚊帳 一一二　金魚賣 一一三
藤 一一四　干河豚 一一四　筍 一一五
浴衣 一一五　行水 一一六　新茶 一一六
風鈴 一一六　蟻 一一六　籠附籠賣 一一七
蛇 一一七　毛蟲 一一七　稗蒔賣 一一八
虎耳草 一一八　蟾蜍 一一八　鵜飼 一一八

五月

端午 二二一　菖蒲賣 二二二　菖蒲葺 二二二
粽 二二三　柏餅 二二三　太刀賣 二二四
端午子供遊 二二四　夏羽織 二二五
菰刈 二二五　梅雨 二二六　雨蛙 二二六
茄子苗賣 二二六　蠅 二二六　田植 二二六
住吉御田植 二二七
心太 附心太賣 二二七
枇杷 二二八　鰹 二二八　柘榴の花 二二九
紙帳 附紙帳賣 二二九
團扇 附團扇賣 二二九
合羽 二三〇　扇 附地紙賣 二三一
なまり節 二三二　忍冬花 二三三　腹掛 二三四
曾我祭 二三四　石燈籠 二三四　胡瓜 二三五
日傘 二三五　納涼 二三五　涼臺 二三七
船遊山 二三七　煙花 二三一
四條磧納涼 二四二　青梅 二四二
蓋寢 附轉寢 二四二　蓋 二四三
水賣 二四四　笠 二四六　麥 二四七
樋竹賣 二四八　梅漬 二四八

六月

氷室御祝儀 二四九
駒込富士 二四九　富士詣 二四九
土用見舞 二五一　寢冷 二五二

鰐 二五二　鮪 二五二　鰡 二五三
振舞水 二五四　蟲干 二五四
六月芝居休み 二五六　鮪 二五六
夕すゞ 二五七　雲の峯 二五七　夏の月 二五七
南天 二五七　雷 二五七　電 二五七　夕立 二五八
暑い事 二五九　蟬 二六〇　皷子花 二六一
蓮花 二六一　夕顔 二六二　甜瓜 二六二
瓜 二六二　瓜畑 二六三　雨乞 二六三
祭前 二六四　山王權現祭禮 二六四
霍亂 二六六　嘉祥 二六七
石尊垢離取 二六七
相州大山參詣 二六八
鰹 二七〇　冬瓜 二七〇　夏越祓 二七〇

七月

羅漢供養 二七二　秋風 二七二　鑢蟲 二七二
牽牛花 二七三　施餓鬼 二七三　梨子 二七四
素麺 二七四　西瓜 二七五　桃 二七五
痢病 二七六　吉原燈籠 二七六　井戸替 二七八
梶の葉 二七八　七夕 二七八　茄子 二七九
高燈籠 二七九　四萬六千日 二八〇　草市 二八〇
酸漿 附酸漿賣 二八一　掛取 二八三
靈棚 二八三　棚經 二八四　盆踊 二八四
王子權現祭禮 二八五　朝日如來 二八六
冷 二八六　閻魔參 二八六　蟋蟀 二八七

稲妻 一八七　隱元豆 一八七　蓮の實飛ぶ 一八八
萩 一八八　二十六夜待 一八八　蘭 一九〇
蟲附蟲賣 一九〇　蜻蛉 一九一　漆掻 一九一
月 一九二　忍草 一九二　白無垢絵 一九二
七月晦日 一九三

八月

八朔 一九四　二百十日 一九六　二百十一日 一九六
九郎稲荷 一九六　二日 一九七　月見前 一九七
芋 一九八　茘枝 一九八　待宵 一九九
月の文 一九九　月見團子 二〇〇　芒 二〇〇
月の船 二〇〇　鯊 二〇一　月の鴉 二〇一
布瓜 二〇一　觀月 二〇二　飾 二〇四
月の朝歸り 二〇五　既望 二〇五　月見過 二〇五
八朔と觀月 二〇六　放生會 二〇六　彼岸 二〇七
摘菜 二〇七　蛇穴に入る 二〇八　唐黍 二〇八
葡萄 二〇八　案山子 二〇八　碑 二〇八
雁 二〇九　毛見 二〇九　鳴子 二〇九
菌 二一〇　柿 二一〇　老鴉瓜 二一一
白柿 二一二　南瓜 二一二　大根蒔 二一二
落鮎 二一三　蚊帳やめる 二一三　蛤 二一三

九月

朔日 二一五　木犀 二一五　重陽 二一五
神明祭 二一五　御難の餅 二一六　豆 二一七

蟹 二一七　十三夜 二一七　座敷牢 二一九
銚子行 二二〇　金屏風 二二一　柚味噌 二二二
神田明神祭禮 二二二　鹿 二二五　眞間の紅葉 二二八
蕎麦 二二二　紅葉狩 二二五　東海寺の紅葉 二二九
紅葉 附紅葉狩 二二九　目黑の紅葉 二三〇
高尾の紅葉 二二九
海晏寺の紅葉 二三〇
正燈寺の紅葉 二三一
目黑不動祭禮 二三一
九月蚊帳 二三五　豐年 二三五　蜜柑 二三六
佛堂薯 二三六　新酒 二三六　栗 二三七
新蕎麦 二三七　榾柱 二三八

十月

亥猪 二三九　爐開 二三九　神無月 二三九
初冬 二四〇　炬燵 二四〇　薩摩芋 二四一
十夜法會 二四二　冬田 二四三　炭團 二四三
蹴 二四三　法華宗御影供 二四四　銀杏 二四六
新田明神祭禮 二四四
海苔 二四六　初雪 二四六　夷講 二四七
東叡山開山忌 二四八
大根 附大根引 二四九　冬の船 二四九
淺漬 二四九　風呂吹大根 二四八
蕎麦掻 二五〇　足袋 二五〇　羽織 二五一
颪 二五二　紙衣 二五二　時雨 二五三

綿入 二五三　落葉 二五三　日向ぼっこ 二五三
頭巾 二五四　綿帽子 附綿帽子賣 二五五
綿摘 二五六　紙衾 二五六　火鉢 二五七
炭 二五七　股引 二五八　鹿 二五八
夜鹿蕎麥 二五八　勸進角力 二五九　狸汁 二六〇
莫大小 二六〇　冬木立 二六〇　虱 二六一
半纏 二六一

十一月

霜除 二六二　霜解 二六二　冬籠 二六二
水鳥 二六二　鴛鴦 二六二　葱 二六三
三芝居顔見世狂言 二六三　酉の日 二六四
輔祭 二六五　雪氣 二六五　冬奉公人 二六六
狐 二六七　嬰兒宮詣 二六八　雪 二六九
廊の雪 二七一　土堤の雪 二七一　雪の朝 二七二
雪 二七二　六の花 二七二　雪打 二七二
雪轉 二七三　雪達磨 二七三　看雪 二七三
狼 二七四　雪の鴛 二七四　枯野 二七五
報恩講 二七五　節季候 二七七　寒 二七七
寒い事 二七八　寒念佛 二七八　裸參り 二七九
河豚 二七九　寒聲 二八一　寒紅 二八一
干大根 二八一　千鳥 二八一　澤庵漬 二八二
蓮根 二八二　溫石 二八二

十二月

十二月 二八四　極月 二八四　師走 二八四
節分 二八四　冬の月 二八五　藥喰 二八五
鼈 二八六　事納 二八八
煤掃 附煤竹賣 二八九　鴨 二九二
自然薯 二九三　年の市 二九三　才藏市 二九七
太麻配り 二九七　月迫 二九八　暮の客 二九八
暮の文 二九八　歲暮賀 二九九　竈拂 三〇〇
餅搗 三〇一　衣配り 三〇二　配り餅 三〇二
牛蒡 三〇二　年忘 三〇三　海鼠 三〇四
飾り物賣 三〇四　室の梅 三〇四　松飾る 三〇五
鏡磨 三〇五　暮の嫁 三〇七　惠方棚釣る 三〇八
野老賣 三〇八　厄拂 三〇九
和布刈の神事 三〇九　大晦日 三一〇
掛乞 三一三　斷り 三一四　大歲 三一五
春の料理 三一五　屠蘇袋縫ふ 三一五　春を待つ 三一六
除夜 三一六　王子狐火 三一六

川柳歳事記いろは索引

い、ゐ之部

紙　一九
石燈籠　一三四
井戸替　一七五
猪　二三九
馬　一〇八
雷　一五七
隠元豆　一八七
銀杏　二四六
鰯稲　一二一
芋　一九八
妻　一八七

ろ之部

炉開　二三九

は之部

六月芝居休み　一五六
初富士　五
羽子　六
造扇箱買　二四
初午　四四
春雨　五七
春月　七三
春宴　七四
花幕　七五
花見　七九
花見囲子　八九
花戻り　九〇
花の翌日　九〇
櫻　一〇九
初雪　二四
春雪　二五
春湯　二五
春風　一四
寶引　五
梅雨　一二五
花散る　九一
花盗人　九〇
坊主持　八九
花の留守　八〇
春野　七六
春野原　七四
春墨　七三
花の雪　七二
花の月　七一
花の山　七八
花の雨　八〇
花の幕　八九
花の供養　九〇
花の鯉　九八
初朝　七三
初雷　七二
初子の日　二八
破魔弓　六
初卯　一四
蠅　一二六

服掛 一三四
蓮の實飛 一八八
八朔観月 二〇六
初冬 二四〇
裸参り 二七九
年縄 二六一

萩煙花 一四一
放生會 二〇六
蓮の花 一八八
初雪 二四六
春の料理根 二一五

蓮の華 一六一
八朔 一九四
蛤 二二三
報恩講 二七五
羽織 二一五
春を待つ 二一六

に之部

忍冬花 一三三
二百十一日 一九六

二十六夜待 一八八
新田明神祭礼 二四四

ほ之部

奉公人出代り 一〇八
牡丹 一〇八
酸漿附酸漿賣 一〇八
豐年 二三五
干大根 二八一

螢 六六
法華宗御彰供 一三

杜若 一〇五
子鳥 一一一
子盆踊 一八四
二四三

へ之部

蛇 二一七

布瓜 二〇一
蛇穴に入る 二〇八

と之部

屠蘇 三
豐島屋白酒 五五
心太附心太賣 三

投年男 四
網 七六
一三七

鳥追 一九
東叡山の櫻 八一
樋竹賣 一四八

土用見舞 一五一
鮪 一五一
蜻蛉 一九一
東海寺の紅葉 二三〇
東叡山開山忌 二四八
酉の日 二六四
年忘 三〇三

冬瓜 一七〇
土堤の雪 二七一
年の市 二九三
野老賣 三〇八
屠蘇袋縫 三一五

ち之部

銀杏重 三六
綴陽 三五
遲日 九五
千鳥 二八一
粽除夜 三一六

り之部

立春 二
痢病 一七六

ぬ之部

綿入 二五三

を、お之部

御扇附紙賣降 一五
御能拜見 七二
落葉石 二五三
落鮎 二一三
温 二八二
鷲 二六二
大晦日 三一〇
大猟狼 二七四
歳 三一五

わ之部

若餅 八
若草 四九
蕨 五八

王子權現祭禮　一八五
綿帽子附綿帽子賣　二五五
王子狐火　三一六
綿入　二五三
綿摘　二五六

か之部

門松　二
飾り柿　一三
開帳　九二
蚊　一一二
蚊帳附枕蚊帳　一一三
合羽　一三〇
嘉祥　一六七
雁　二〇八
南瓜　二一二
神田明神祭禮　二二二
海晏寺の紅葉　二三〇
神無月　二三九
枯野　二七五
寒聲　二八一
竈拂　三〇〇
掛乞　三一三
數の子　三
蛙　五三
蚊遣火　一一〇
蚊帳賣　一一二
笠　一四六
梶の葉　一七八
柿　二一〇
蚊帳　二一三
紙衣　二五一
寒　二七七
寒紅　二八一
飾り物賣　三〇四
霞　八
蠶　七一
蝙蝠　一一〇
柏餅　一二三
雷鳴　一五七
案山子　二〇八
老鴉瓜　二一一
盤　二一七
紙衾　二五六
寒念佛　二七八
鴨　二九二
鏡磨　三〇五

よ之部

餘寒　三五
剖葦鳥　一〇九
嫁の禮　三五
吉原の櫻　八七

た之部

橙　七
紙鳶　一九
新能　五二
端午　一二一
端午子供遊び　一二四
鮹　一五六
靈棚　一八三
蕃椒　二二四
鷹　二五八
大黒舞　一三
太神樂　二一
暖　七三
太刀賣　一二四
七夕　一七八
棚經　一八四
炭團　二四三
狸汁　二六〇
店卸　一八
寶船附初夢　二七
筍　一一五
田植　一三六
高燈籠　一七九
唐黍　二〇八
足袋　二五〇
太麻配り　二九七

れ之部

禮帳　四
冷　一八六
禮の供　二二
荔枝　一九八
蓮華　一六一
蓮根　二八二

そ之部

曾我祭　一三四
蕎麥搔　二五〇

つ之部

鶴　四一
燕　五三
釣魚　七六
梅雨　一二五
月の文　一九九
鶴の吸物　四一
茅花　六九
躑躅　九四
月　一九二
月見團子　二〇〇
土筆　四七
摘草　七一
筑摩祭　一〇九
月見前　一九七
月の船　二〇〇

月の見過ぎ　二〇一
朔日　二一五
月の忽　二〇五
佛掌　二一六
摘菜　二〇七
月の朝餉　二〇五
頭巾　二五四
柿　二一二

ね之部

年礼附年玉　八
葱　二六三
猫の恋　三六
寢冷　一五二

な之部

七草　三一
なより節　一三三
夏天　一五七
納羽織　一五
夏越の祓　一七〇
涼子　二〇九
茄子苗賣　二二六
南瓜　二一二
夏梨の子　一七四
茄子　一五七
海鼠　三一四

ら之部

羅漢供養　一七二
蘭　一九〇

む之部

六日年越　三〇
六の花　二七二
干し蟲　一五四
蟲附蟲賣　一九〇
室の梅　三〇四

う之部

鶯　五
歌骨牌　三
鶯　四三
梅　四八
麗　四九
巷　七二

の之部

長閑　五七
野の海苔　二四六
掛大念佛　六八
のう天氣　七二

く之部

元日　一
喰摘　一三
灌佛會　九六
雲の峰　一五七
蛇蟲　一七二
蜘蛛　一〇八
鍬進相撲　七二
鍬進角力　二〇二
草餅　六八
霍亂　一六六
栖子　一〇五
草市　一八〇
觀月　二〇二
九郎助稲荷　一七二
九月蚊帳　二三五
廓の雪　二七一
栗　二三七
藥喰　二八五
餅　三〇二
暮の文　二九八
暮の客　二九八
暮の嫁　三〇七

や之部

道羽子　六
藪入　三八
柳笑　四八
厄拂　三〇九
棣　九三
榮　九五
蜻蛉　一九一

ま之部

萬歳　一五
甜瓜　一六二
待宵の内　一九九
孤刈　二二五
兵間の紅葉　二二八
松飾る　三〇五
豆飾　二一七
榲桲　二三八

け之部

毛見　二〇九
毛蟲　二一七
月毛　二九八
追掛　三三六
猪　二三九
玄倒　三六

ふ之部

二日灸　四五
風鈴　二六
船遊の蕚　四八
冬奉公人歸る　一二四
藤の山　二三七
葡萄　二〇八
振舞水　一二四
冬の田　二四三
二日の船　一九七
冬木立　二六〇
冬奉公人　二六六
風呂吹大根　二四三
冬の祭　二四九
河豚籠　二六二
鞴　二四九

こ之部

御殿山の櫻　八三
駒込富士　一四九
御福の湯　二八
弘法大師參詣　四二
鯨始　五三
孤刈　一二五
更衣　九六

え、ゑ之部

閻魔參り　一八六
愛比詣講　四一
嬰兒宮詣　二六八
惠方棚釣る　二三〇四
惠方講　一四
夷講　二四七

て之部

蝶　五四
食　二五六
紙子行　二二〇
銚子　三四
寺の禮　四
手鞠　四
樂　五五
田

あ之部

蟻　一二六
蛙　一二六
雨乞　一六三
朝日如來　一八六
淺牛　一四九
牽牛花　一七二
暑い事　一五九
扇地紙賣　一二三
暖かい　七三
菖蒲草　一二三
菖蒲賣　一二三
飛鳥山の櫻　八二
風梅　一四二
青鷺　一二八
秋刀魚　一七二

さ之部

日　三七
山椒　七四
椒　七四
曳　三三
鯛　七〇
櫻　一二九
猿　三
柘榴の花　一二九
櫻草　九一
忌　五五
行　三
西　三
雜

山王權現祭禮　一六四
相州大山參詣　一七四
素麺　一七四
三芝居顔見世狂言　一七六
寒い事　二七八
才藏市　二九七
座敷牢　二一九
薩摩芋　二四一
廓の雪　二七一

き之部

雛　五七
胡瓜　一三五
既望　二〇五
金屏風　二一一
衣配り　三〇二
子　五七
金魚賣　二一三
鰐　一七〇
礒　二〇八
銀杏　二四六
行水　二一六
蟋蟀　一八七
菌　二一〇
狐　二六七

ゆ之部

雪解　四九
夕涼　一五七
柚の味噌　二二四
雪朝轉　二七二
雪達磨　二七二
雪掻　二六五
雪　二七二
雪　二六五
雪　二七二
雪看　二六九
雪打　二七二
雪　二七二
夕立　二一五
夕虎　二一八
夕貌　二六九
虎耳草　二一八

め之部

目黑の紅葉　二三〇
目黑不動祭禮　二三〇
和布刈の神事　三〇九

み之部

簑　二一
水市　七二
水賣　一四四
蜜柑　二三六
烏　二六二

し之部

新年　二
白魚　九一
汐干狩　六五
潮賣　二二
四條磧納涼　一八〇
黑萬石日　一九三
七月晦日　一九三
鹿　二二五
新酒　二三六
十夜法會　二四二
齒朶　五
上巳　附雛遊び　
春宵　七三
紙帳　附紙帳賣　
忍草　一九二
神明祭　二二五
正燈寺の紅葉　二三七
蓼　二三七
四季施　三七
新茶　一一八
土用見舞　一二九
白無垢縫　一九二
十三夜　二一七
初冬　二四〇

ひ之部

姫始　二五
雛市　五八
干河豚　一一四
日傘　二三五
氷室御祝儀　
彼岸　附六阿彌陀
雛しまふ　六六
蝌蚪　一一八
蜜蜂　附轉蜂　一四九
比目魚　五〇
枇杷　二二八
火鉢　二五七

も之部

餅木　一日
雁　二二五
桃花　六八
桃　一七三
股引　二二八

せ之部

蟬　一六〇
施餓鬼　二七三
歳暮賀　二九九
石尊垢離取　一六七
節季候　二七七
節分　二八四

す之部

双六　三
水仙　四三
住吉御田植　二二七
忍冬花　二三三
納涼　二三五
涼臺　二三七
芒　二〇〇
炭俵　二五七
煤掃附煤竹賣　二八九

川柳歳事記

安藤幻怪坊編

正月

元日

正月一日を元日とす、元日は歳の元、月の元、日の元なり、故に三元といひ又三始といふ、商家には戸を開かず、一日廢務なり、又俗間に家内を掃除せず

元日の町はまばらに夜が明ける
元日の塵はつまんで投げ出され
元日に關八州の毛を拾ひ
元日の夜は氣の知れぬ人通り
元日の生れ近所で知つて居る
元日は起きそうにして禮を受け
元日にいけしやあ〳〵と甦へり
元日に女のあるくひどい用
元日に泣くは七歳未滿なり
元日の小言生酔なればなり
元日に幇間一切れ喰つたまゝ
元日に御用はだるく畏まり
愚痴なやつ扱て元日のむづかしさ
元日の御用いゝなとほめられる

立春

節分より立春なれども並には早に初春の義として例句を挙ぐ

よい春だのとは大きい仲の町
掛取のとぼして來るで春でなし
据風呂に下女が居る内春になり
ぬりてんぼうを脱ぎ捨て下女も春
いゝ春に若い嫁御を引合せ
人並にいゝ春といふつらい事
いゝ春といへば親分うさあねえ
乞食共囀づる春となりにけり
松ケ枝の隣りへからむ町の春
門の春跡からも又跡からも
初春も觸れてあるくは三日なり
忝いにかゝつてる町の春
春の生酔ぞうり取りはさみ箱

新年（不及註）

すいめんの内にあらたな年になり

門松

【世諺問答】門の松立ることは昔よりあり來れる事なるべし、松は千年を契り竹は萬代を契るものなれば年の始に祝ひ用ゐるはよし、

立臼に芽の出たやうな松飾り
年禮の廻り道するいゝ飾り
門松に大勢立つて可笑がり
二代目は物狂はしき松をたて
松飾り大分たかると通れなり
松原の木の間〳〵に門徒宗
門松をうれしく潜る嫁丁度
はなれ馬門松一本引ッこぬき

雑煮

雑煮は、餅に大根芋、昆布打あはびいりこ椎等を加へて煮る故に雑煮と云ふ、各家其風を異にし薬喰と稱して薬を用ゐざるもあり一概には云ひ難し

もう幾つあがると雑煮きゝ合せ
五々二十五切れと信濃笑はれる
青醒めた顔に雑煮が別に出來
物もうといふは雑煮の出るのなり
花まぐろぞうにへかける村ぶげん
おも入れをわらつてぞうに二せん出し

屠蘇

屠蘇散を酒或は味醂に浸したるものを元日より三ケ日の間家中にて飲ひ、又は禮者にすゝむ、屠蘇に就て諸説あれど略す

薬まで春はめでたく飲んで差し

數の子

鯡の子なり、歳暮年始及び婚家以て規矩の者とす、多子の義を取るなり

數の子の療治に松葉ひんむしり
懸り人數の子などはころし喰ひ
たいがいにしろと數の子ひつたくり
數の子でむしやうに下戸はのめといふ

禮帳

年始に禮帳を支關に備へ置き賀客をして其名を記せしむ、今日の名刺箱の如し

あがるなと云はぬばかりの帳を出し
禮帳に德兵衛とこそ書かれたり
年始帳供に書かせる氣の毒さ
社祢の音ばかり聞く年始帳
酔つたのがつけがけをする年始帳
是はなんだと嫁に聞く年始帳
年始帳作左衛門と供が書き

手鞠

綿を丸めて上を五彩の糸を以てかゞりて板の間などにて突くなり骨董集に其起原詳ならざる由いへり

子にやる鞠をついて見る若い母
しらみ取るそばで裸で鞠をつき
一方は紺屋でふせぐ鞠かゞり
鞠唄をつけて御用はどうづかれ

年男

都て新年の行事を料理する者をいふ

社祢で手鍋を提げる年男
年男うまい話を淋しがり
ぶら下げて首尾よくしまう年男
待て〳〵と水引を解く年男
くさつたら寄るなと叱る年男
摺古木と豆に縁ある年男
こうか迄社祢で行とし男
年男女を見るとまどすなり

初富士

【東都歳事記】東都景物の最初たるべし、されば江戸の中央日本橋の邊りを以て佳境とするや又駿河臺御茶の水其餘高き所より眺望す、深川萬年橋の邊を古富士見ヶ岡と呼ぶよりいるとそ、富士見るによし

遥拜は何所でも出來る富士の山
人に恨みッこいもなく富士は見せ

齒朶

【和漢三才圖繪】葉は蕨及び狗背に似て薄し、面青く背白し故にうらじろといふ、四時枯れず以て元旦嘉蔬の物に飾る、【俳諧歳時記栞草】一説に云、齒はよはひ朶はえだ長延なるもの故、齡の延る義といふ

裏白はこゝをくゞれとうまれつき

寶引

【雜談鈔】餅の異名を福生菓といふ、故に餅を福といふ、古へ福引とて餅を二人して引合ふこと侍りき云々、又寶餅安永の頃江戸市中に辻寶引といふものあり、細き繩か幾筋

も持ち其中の一筋に橙か結びて、さゞい〳〵と辻に立つて呼び、一筋幾文と定めて賣り彼の橙を結びたるに引當てたる者へ景物を出すことにて大人小兒の區別なく爭ひて之を引きしが後綜府より禁止せられたりといふ（蜘蛛の糸卷參照）又家毎に鼠を作りて家人に引かしめ種々の物を所ちて與するを福引といふ

福引に摺古木とつて緣近し

松の内皆いかさまに引つかゝり

歌かるた下女寶引にしなといふ

さゞさいへ下女がお立と呼びに行き

寶引はどうか柳に鞠のやう

宵の内先づ寶引と申上げ

さゞさいは長やでいつちかせぐやつ

ほう引にまでかりおやを嫁たのみ

破魔弓（はまゆみ）

【世諺問答】蛍光が眼の瞳を抜いて木丁の玉とす、かの眼のふくりん三重有り故に弓射る的に三重を描きて中の瞳を除く、蛍光の眼を射破るの意にて破目弓といふべし轉じて破魔弓となりしものなり云々、初生の男子ある家に親族知己より贈る

破魔弓の禮は天窓でおしつける

破魔弓は一家の義理のせいくらべ

破魔弓を妾は腮で勘定し

逃足の鞠破魔弓で射止められ

遣羽子（やりはご）

【世諺問答】おさなきものゝ、胡鬼の子とてつき待るはいかなる事ぞや、答、おさなきものゝ蚊に食はれぬまじなひなり、秋の始蜻蛉といふ虫出きて蚊をくらふものなり、こきのこと云ふは木蓮子などをとんぼうがしらにしてはねつけたり、これを板にてあぐれば落つる時とんぼうがへりのやうなり、さて蚊をおそれしめんが爲なり

羽子板を捧げて女房禮を受け

姉の智惠庇の羽根に鞠つぶて

かりた子を又貸にして嫁は羽根

追羽子にまけて背中の數知れず

追ひかけて羽子の子貰ふ挾み箱

羽子板で下女いやつたく追つかける

とつてくんなと羽子板を胸へ當て

遣羽子を幇間田市へ突きなくし

お笑ひと羽子のこばり外へ知れ

顔の墨嫁落ちたかへ〳〵

なりふりにかまけ追羽子娘まけ

羽子板をあづけて帶をゞ直し

乳母の手へ渡ると羽根も二つ三つ

そのいやさ下女羽子板でたゝくまね

橙（だいだい）

【和漢三才圖繪】五月小白花を開く、凡そ八年を歴るもの實を結ぶ、霜後黄熟す、其瓣苦くして微し酸し食ふに堪えず、春に至て色濃く久きに耐たり、夏より後色を變じて青し、新舊辨ずべからず、故に俗呼で代々と名づく嗽はずと雖、以て嘉祝の果とするなり云々

橙は年神さまの痛氣所

若餅

三日の間に搗く餅をいふ

若餅へ一ト臼すける禮の供

霞

陽春の氣動きて濕氣上昇して煙の如きをいふ

不二山をかくすばかりが春の霞

初霞ほつといふ息立ち昇り

年禮附年玉

年禮、武家は元日より町人は二日より廻禮せり、年玉の品は多くは扇子箱に扇子を二本入れたるもの或は半切紙など用ゐしといふ、吉原遊女の年禮は廓内のみを廻りし由其儀裝束目を驚動せしものありといふ

下戸の禮四谷赤坂かうじ町

手の裏をかへして御慶申入れ

遣る所でないは禮者のかぶりなり

松過ぎの禮者はひどい丁面なり

年禮のかへる姿は粹になり

永日の時を期さぬは飲む禮者

まめでいゝなと親分の御慶なり

正月は隣りからでもしやちこばり

お手柄な事と禮者は鴨を食ひ

預けずに受取つて來る飲む禮者

矢を二本箱入にして申入れ

桐の木でしたがら〳〵を禮者呉れ

手も足も出してこは〴〵禮に來る

挾み箱から萬歳や鼠出る

飲む禮者朝の勘定大違ひ

年禮に來て泣言の谷渡り

中宿へ眞面目な顔で申入れ

一日の御慶炬燵へ取寄せる

町内は先づしらふにて申入れ

年玉で無けりや一番いふ扇子

鳴りこんで來るが割間の御慶なり

慾もせず禮から息子直ぐに行き

年玉をつるさつて出す挾み箱

年始では無いがと見舞ふ立のまゝ

あづけるの嫌ひな禮者づぶになり

本所に年始のこぶが一つ出來

年禮の一儀が濟むと金の事

扇は中にあるふりで御慶なり

引つばがれもしやうかとこは〴〵年始

扇子箱折ふし出ては積み直し

年玉そつくりとよふろ〳〵よろ歸る

年禮は二足あとで禮をいひ

生酔は御慶に節をつけていひ

年禮は食ふやりくりをして歩るき

年禮をずるけ過ぎたで松が取れ

炬燵から出そふにしては禮を受け

日の出より日の入までを下戸の禮
落冬の宿意ばら〳〵扇なり
やう〳〵と火宅を出て御慶なり
伊勢屋の年始扇とはそらことよ
貸があるそうで御慶をざつに受け
申入れますで上戸は相濟ますず
おあづけを聞かずに亭主そびきあげ
外科の年玉を早速下女用ひ
間の抜けた事上下で小松原
年禮を一軒ふやす俄雨
八兵工といふ若衆來る春の禮
なんにも持たない禮者ならいやだ
ひろ〳〵となつてのろりと叔父の禮
人間の皮をかぶつて禮に來る
一通り述べて年禮泣きはじめ
松の木へ禮をして行くのどやかさ
松蔭で玉をとん出す挾み箱
年禮の間抜は角を取つて來る
ばち〳〵の出來ぬを禮者持つて來る
仲の町たちはだかつて年始なり
門ト袖を捉えて暮のつらをむぎ
書出しの無地を年禮配るなり
年禮は受けて今のは誰だつた
下戸の禮時々網にかゝるなり
のどかなり風も靜かで申入れ

下戸の禮者に消炭をぶんまける
扇箱ならして見ては熨斗をつけ
暮のざま麻上下で話すなり
箱へ入れぬとあんまりな扇子なり
年禮に股引のいる縁を組み
門禮にしたのが叔父の不足なり
年禮は門違ひでもてれぬなり
下戸の禮片ッ端からたゝきつけ
草臥れて供の泣き出す安ス禮者
年禮はどれも給仕を一人つれ
門松にすがる禮者は機嫌過ぎ
舟宿のいらぬ年始に廻り事
門ト禮で濟ぬとてい主を引キ上ゲ
扇子箱だぞと頭巾を袖へ入れ
覆面と羽織を取ると禮者なり
松過の禮は餘計に口をきゝ
つねやると。あいそつかしな扇なり
二三げんよろ〳〵すると日が暮れる
どうぞこうぞするそうで年始に見へ
二つ三ついびきをかくと御慶おちかせ
是さわたくしだと御慶なり
上下を引ずり戻す中のよさ
禮者かとのぞけばおぞう一人來る
年禮でなけりやいひぶん有るあふぎ
ふにやいの上下申入れと來る

うつちやると思ひ禮者のつらをむぎ
申入れますとなんだかほうり込み
のむ禮者所々にて供をおこすなり
きりやうの有る人年禮に早く來る
借りがあるそうで御慶に念が入り
門禮はよこさぬやつをねめて行き

禮の供

別に注するにも足らざることなれど、武家町家とも奉公人あるものは、それな供に召連れ回禮すれども、無きものは慶庵等より頼禮中雇入れ相當の服裝を爲さしめて伴ひしなり、年禮の條參照すべし

いさゝかな道を爭ふ禮の供
あまりおしゐ下されなと禮の供
挾箱下駄でつりあふ禮の供
松ウ根によつてまどろむ禮の供
禮の供松葉で鎖こしらへる
飯焚を鴨にしたてる松の内
出來合の武士責切れる松の内
年禮の供夜ッぴてへねないやつ
松の供ふだいおんこのつきやなり
松がとれるとさむらいが百さがり

雙六

元日より賣來る、松の内の遊戯なり、其種類甚だ多し、專ら普通に行はれしは給双六の中の道中双六なりしなり

双六を禮者おどけて一つ振り
屠蘇機嫌子の愛相に旅へ立ち
風呂敗は双六賣の頬冠り

大黒舞

【俳諧歳時記栞草】江戸にて大黒舞といふは新吉原に限れり、これも非人の類にて、狂言物眞似をするなり、といへり、

大黒も恵方から來りや安く見え

飾り柿

串柿を鏡餅の上に置き又は別に神前に供す

二三間飛げたのあるかぎり柿

喰摘

【嘉多比佐志】初咨の祝物のくひつみと云は咨の始に食て藥となるべき物のみ取集めて客も主も物語しながらつまみとりてくひし故に喰摘とはいへるなり、今は食ぬことゝして生米を積れど昔は葩瓢と云て糯をいりて孚婁させたる也天明中比までは元日早朝より江戸中はぜうりあまた歩行しなつきんくに絶えて御丸の内のみあまたありしが夫も寛政頃よりやう〳〵すくなくなりて今は稀に賣歩行のみ、是喰積餐に置くべき料也其喰摘餐に小土器を添ゆくは食ふ人自らいりやきて食ふ爲なり云々、【俳諧歳時記栞草】食摘は今の重詰の事なり節物を調理して賀客に饗應するなり餐藥の事にはあらず云々

食摘が小癪に出來て一歩めき
食摘をあらすは勝負弱いやつ
食摘は白衣の人が來てあらき

食摘の俄をするは嫁の禮
食摘の大破に及ぶ嫁の禮
食摘にふしをいたゞく遲い禮
食いつみにめでたく地口云ひはじめ
歸る時食摘の出る大笑ひ
松過の禮者米斗カつッつける
てへ〳〵をすると喰摘すぐにとり

春風（註に及ばず）

春風は千代萬代と吹きはじめ

初卯

【東都歳事記】亀戸妙義詣、天滿宮の境内にあり、毎月卯の日を緣日とす、正月は初卯詣とて參詣群集す、諸人神符を受けて帶に挾みてかへる、餅或は土を以て團子とし五彩にいろどり大なる柳につけ齒玉と號け售ふ、又天保二卯年より卯杖卯槌を賣ぐといふ

大ぐしを頭へさして梅をほめ

恵方

其年の干支に依りて四方の間の吉兆を考へ是を恵方と稱す

卯の日まで恵方の方にあら世帶

餅

【本朝食鑑】本邦古へより餅を以て神明の供として、大圓塊に作りて鏡の形に擬す、故に餅を呼て鏡と稱す、これ八咫の鏡に擬する歟、正月朔旦必ず餅を以て諸神に供じ及び一家の長幼團欒して同じく餅鏡をすゝめて新歳を賀す云々、

かゝり人疱瘡をした餅をくひ
酒樽へ下戸は四角に穴をあけ
のし餅もよく〳〵見ればうら表
米櫃で藪入を待つ下ぞなへ
無いやつのくせにそなへをでつかくし
糸を卷くやうに花嫁餅を喰ひ
餅をやく匂ひに上戸いとまごひ
あわあれな音でかたもち隱居喰ひ
かゝり人おゝくびなりの餅をくひ

御降

元日に降る雨雪をいふ、朝降れば其日六度降るとぞ

もう六度降らうと下戸は精を出し
年禮の落ち思ひだす俄雨

萬歳

元日より三河萬歳來る、三河萬歳の起因は、一條院の御宇大江の定基三河守に任じ、其民に佛教傳來の因緣を敎へて舞はしめしに始まるといふ、大紋烏帽子を着し才蔵に鼓を打たせ家々を廻る

拙者此度と萬歳帳を出し
君臣和して笑はせる松の内
萬歳でものもふまくしかけていひ
大紋を脱ぐと千助萬右衛門
小鼓をぽき〳〵打つとみな笑ひ

門附に來るは萬歳すがれなり
座敷賛六二人來て笑はせる
萬歳びつくり一休に出つくはせ
三河から來つゝ馴れにし門へ來る
才藏は御油赤坂のたいこもち
才藏は大樹寺などの百旦那
萬歳がほしをさしたる夫婦中
萬歳はすつとの皮の足づかひ
萬歳は皆輕薄に節をつけ
かう申す才藏ぎりで嫁は逃げ
萬歳に乳母たましゐをばい取られ
萬歳を嫁は敬して遠ざける
手のひらへしたみ才藏下女へ差し
口に袖あてゝ萬歳覗かれる
萬歳は雜煮半ばの春の興
萬歳は刎ねられるだけ刎ねていひ
萬歳のかへり布子に掛烏帽子
萬歳はあの生酔に三度逢ひ
才藏が立つと容儀をくづすなり
才藏はすはつては口不調法
萬歳に草履を持つて畏まり
萬歳を子にほだされて呼びはじめ
三河から古風な酒落をいひに來る
大紋に萬歳つねの袴なり
さゝばたきとは才藏がいひ始め

萬歳は泣く子の顔をついに見ず
萬歳に借りのあるやうに嫁逃げる
正月は下がゝり迄皷なり
萬歳の烏帽子を落す悪い酒
萬歳は裝束だけの義理を述べ
萬歳は内造作をせずに行き
才藏はあまりはづんで泣きだされ
萬歳と才藏ばかり殘される
萬歳はシテよりワキがやかましい
才藏に皷渡すと出放題
萬歳を下女ありッたけ笑ふなり
萬歳に隣りの娘今年來ず
なかんづく才藏智恵の無い男
お透見のお臍才藏いたがらせ
九千歳ほど才藏でもつて居る
萬歳は座敷へ供を連れて來る
萬歳に嫁はおなかをもてあまし
舞ひ納めるとどつからかいつそ出る
萬歳の口程皷はたらかず
さあ飲みな才藏さんと遣手差し
才藏は呑みかねまじき面ッつき
門遣ひから幾春の御萬歳
才藏は村でもちつと口をきゝ
萬歳に糸をまき〳〵付て來る

萬歳の來た日勞咳大不出來
毎年の事萬歳をおかしがり
またぐらへ皷をあてゝふざけ出し
萬ざいは刀を二本さして來る
大敷をのせる今年の渡し船
みろぐから娘百萬年迄にげ
肩でうつ迄は花嫁きいて居る
小ついみを僕請取てふざけだし
着つつなれにし大もんではやすなり
笑ひつい時萬歳はわらはせる
萬歳の來る日も嫁にいひ送り
萬歳を氣の毒がるは古風なり
萬ざいがたつとぞうりのけんくわなり
三河から來てつがもないうそをつき
萬歳で笑ひ命をのべるなり
萬ざいににがやせゝらやあざはなし
皷より才藏口をたゝくなり
三河から暮のきげんを來て直し
大風の跡に萬歳かしこまり
才藏は草履けんくわの中を出る

店卸

商家にて去年中の金銀出入算用、又は賣買の利不利を改め見るをいふ

ふじ山もあるものにして店卸
一年に一度身代よなげて見
出入帳百韻程に夜をふかし

紙鳶（いか）

【統博物志】今紙鳶に糸を引て上るは小兒をして口を張りこれを仰ぎ見せしめて小兒の内熱を涵さんが爲なり、【俳諧歳時記栞草】本邦に於て亦小兒さかんに弄ぶ、小兒に於て益なきにあらず

凧の糸のびをしい〳〵賣てやり
春の一時を凧にて子は惜しみ
のどやかさ空に鯨の音がする
物もうの度に紙鳶から駈けて來る
明星に追ひおろされるいかのぼり
凧の糸かへとさしぬき五十やり
榊拾ひ目合ひを見ては凧を揚げ
物もふに凧をはしらへくゝりつけ
一文凧は駈けて居る内ばかり
なりつたけおつかけて見る切れた凧
凧の糸かへとからぬき五十遣り
凧の糸ぶん取に大ぼやも出る

鳥追

【雍州府志】乞丐の人、元日より十五日に至り、笠を卷白巾を以て面を覆ひ、手をたゝき祝詞をとなへ、門戸に依りて米錢を乞ふ、是を敵の與次郎と號す、又鳥追と稱す、もと民間田畑の鳥を追ひはらふ辭よりいづるものなり云々、

【俳諧歳時記栞草】に云、今東都にては俗に女太夫と唱ふるもの揚笠を着、三絃を彈き唄ひて錢を乞ふ、【謠曲鳥追船】かやうに候ふ者は、九州筑紫の國日暮殿の御内に、左近尉と申す者にて候ふ、扨も此日暮の里と申すは、前には大河流れ、末は湖水につゞけり、此湖より村鳥あがつて、浦向ひの田を食みくふ間、毎年鳥追船をかざり、田づらの鳥を追はせ候ふ、（中略）晩稻の小田も刈りしほに、色づく秋の村鳥を、苧生の浦舟漕ぎ連れて、思ひ〳〵の囃子物、あれ〳〵見よや　よその舟にも、打つ鼓、空に鳴子の村雀、追ふ聲を立て添へ、扨いつも大鼓はとう〳〵と、風の打つや夕波の、花若よ悲しくとも、追へや追へや水鳥（下略）農家の行事が何故乞丐の弄びとなつたかといふに、彼の鬼追鳥を撰ふといふことに結び合せしものなるべし、七草の項參照すべし

世間構はず鳥追の稽古なり
鳥追を横に引かせて申入れ
鳥追を扇子の先きでよけて出る
鳥追の叱られて行く店おろし
鳥追につらをみだして申入れ
鳥追は仰向いてから彈き初め
鳥追は笠をちよッちよと撥で上げ
鳥追のすがゞきで行く町はづれ
鳥追ば皆ちう引のたちすがた
うつむいたやうに鳥追かぶるなり
鳥追も嫁追も來るうらゝかさ
明店の前で鳥追乳を呑ませ
鳥追に出る頃は早疵もいえ

太神樂

元日より六日まで毎日來る【東都歳事記】に云、事跡合考に云、江戸太神樂といふものは、元來伊勢外宮の地に御獅子とて一所に祝ひおく、男獅子女獅子兒獅子の獅子頭あり、是を正月十日彼土人祭禮を爲す、其時三頭の獅子を舞すなり、此種類として獅子を舞し歩行を太神樂といふ、同族江戸に下向して徘徊す是伊勢派の太神樂なり、又尾張熱田の地にも右獅子頭の一種ありて是も獅子を舞し歩行を太神樂といふ、一族江戸に下向して徘徊す是を熱田派といふ、依て江戸太神樂は右二派なり其外の事條間多しとあり、又元祿二年編輯のむかし〳〵物語といへる草紙に云、七八十年以前（寛文より永應の頃）は太神宮御祓太神樂とて毎日々々江中徘徊しあるくあり樣先づ儀式正しくして直先に鳥帽子高き面をかぶり直垂を着白袴を着御幣を持立其次に十四五歳許の男子うつくしく作り瑞珞をかぶせ長絹を着白袴を着中啓の扇を持右の手には鈴を持、又三番目には麻上下を着したる男箱を持、四番目には布衣の裝束着たる男、次に四ツ足付たる長持ふたをあなのけに置、其上へ御幣を立獅子の頭を直し中に大太鼓一萬度の御祓賣ン中に立、島長持は四人か六人にて持、みな烏帽子を着白丁を着す、はやし方も左右に付、笛小太鼓つゞみどびやうし打合せたる時右の瑞珞かぶりたる舞子神樂を舞ひだん〳〵に拍子もつまり鼓にしん〳〵として感にたゆるばかりなり、其内の興に人の笑ふ爲、だうけ大太鼓をうち烏帽子をすぢかいにかぶり撥を投げ是を大きなるだうけとする見物人興に入り笑ふなり云々、今は次第に變じて古のさまを失へり

つゝがなく茶碗をもどす太神樂
たつた一字の事で安い神樂

太神樂しまふと獅子をしめころし
太神樂縞の財布へ撥を入れ
神樂獅子首をねじるといとまごひ
太神樂たばさんだのが上手なり
神樂獅子もぐさのやうな衿ッつき
太神樂あれは下手だとだますなり
太神樂おどけて守をばくり喰ひ
太神樂鼻の下まではたらかせ
太神樂小賣に來るは二三人
太神樂赤い姿に見蓋くされ
太神樂ぐるりはみんな油虫
神神樂ばかりを入れて門を〆
太神樂舞はせるそぼへ柊さす
丸一をやめけんやくで角兵衛じゝ
太神樂どんとうつてはひよいと取り
世なみよくはやらせたがる太神樂

歌骨牌（うたかるた）

天正年中、外國船長崎入津の際傳來せし骨牌より思ひつゝて新に發明せしものにて骨牌札に和歌の上下の句を各別に記し上の句の札を讀みて下の句の札を取りて勝負を決す正月の遊戯なり、昔時は種々の歌骨牌ありしも小倉百首尤も普通に行れたり、歌留多を弄ぶに種々の方あり、撥取り、分取り、攻取り、お手附、役、坊主めくり、等にて專ら婦人小兒の遊戯なりしなり

嫁の手が百たび出るとしまひなり
歌がるた下女またぐらへ取りためる
歌がるた下女が坐ればあらしふく
歌がるたにも美くしい意地があり
歌がるた下女引ッ掻きに罷出る
歌がるた馳走に出して氣の毒さ
歌がるた乳母のおいどを度々詮議
歌がるた扨ておそろしく取る女
歌がるたよろ〳〵ものゝけいどなり
歌がるた手を負はぬのは嫁ばかり
歌がるた嫁いもじへも寄せつけず
歌がるた嵐のやうに撒きたてる
振袖をうごかすたびに歌が減り
歌がるた例の通りに嫁が勝ち
歌がるた女の中へ負けに出る
歌がるた仲間へ息子まぎれこみ
歌がるたお局くされ同士なり
歌がるた見物をする耻かしさ
歌がるた人といふ字に手が五つ
歌がるたやらう壁の上でなし
歌がるた乳母は握つて叩きつけ
歌がるた嫁とばいあふわやなやつ
むべ山の中へ嵐の年始客
歌がるた嫁糸をつけ引ぐが如し
嫁の出るまではまだるい歌賀留多
御延引古歌を並べておたのしみ

百人へ脚袢を脱いで並ばせる
秋の田へ白い手の出るお慰み
四箱あつめたはけちな歌賀留多
振袖で度々上の句をくづし
曉の枕に足らぬかるた箱
歌がるた手ひどく乳母はいぢめられ
かるたの絵我敗島の道ならで
歌がるた無筆なやつは箱のやう
百人一首迄がさがみは戀歌なり
うたがるたなどに事よせなめたがり
歌がるたごせは無筆とどちくるひ
歌がるた氣色とらぬともつととれ
歌がるた嫁こまや程つんでおき
しりまくりくらとはあらい歌がるた
ちぎれた歌を花嫁はくッつける
歌がるた大先生と嫁をほめ

拂扇子箱買

【わすれのこり】早咨の寶物、我が幼年の頃は、一夜明れば小はだの鮪寶り、玉子寶、白酒羊羹切山椒、竹割甘露糖など朔も切らず寶來りしが、今は稀なり、二日にもなれば拂扇箱買多く來りし、【近世風俗志】拂扇箱買、新正江戸の市民年始禮に行く者必ず扇箱及び紙納扇を年玉と號し知音の毎戸に配之、これを買求めて又年玉用に賣る也、中旬以後のものは來年を待て賣之、蓋買に巡之二者是を密ること

を得ず、專ら扇店に買密也因曰箱は多くは空箱にて竹串を綯れ音あるのみ故に字てがら〳〵の扇箱といふ又扇納たるもあり、多くは二柄納也袋には一柄入二柄入ともにあり

はらひ扇子箱見たをし始めなり
扇箱買風呂敷と百で出來
あふぎ箱かひ刻こぶたゝ貰ひ

初湯（注に及ばず）

湯屋の臺ひねつた錢でうめるなり

姫始

【傍廂前篇】年毎の正月の始めにひめはじめといふ事、假名暦にあるを、いかなる事とも定かに記したる書もなければ、大方は男女交通の始めとは思ふめれど、親子兄弟の中にては、つゝましさにさともえいはぬは、好色婬奔の心を恥づればなるべし、さる故に、小ざかしき人は、糒糠始めなりといへり、和名抄に糒糠比女とあるは、枕草紙に御衣糒糠とあるにて、衣につくる糊なり、今もひめのりといへる物なり、是賓胥記、海人藻芥などに誤りて、食物と思へり、よしや當の假にしても、毎日三度づゝくへば、何ぞ其始をいふべき、こはいひ、かたかゆ、しるかゆ、の始もなし、酒の飲み始もなし、又飛馬始なりといへるは、別に馬乘初のあるに、心つかざるよりいひ出たるなり、傳暗抄に、ひめとは駒の異名のよしいへることあれど誤なり、飛翔蓋などの字の鳥のうへにいへるなり、獸には馳走駈などの字が當相なり、又傳暗抄に、すべて女の所作をいふとあるは、姫の字に泥みたるなり、故師伊勢貞丈大人の云く、初巳のひめはじめは、諸説まち〳〵なれど、皆、とるに足らず、むかしより世俗のいひ來れる、男女交合の始なり、是子孫

増長の大本にて、人間第一の大禮の根元なりといはれしは、比類なき卓論なり。そも〳〵伊非諸、伊非册の二大神、はじめて男女交通し給ひしは、私の御慾事にあらず、高天原にて、天の御中主の神、高皇産靈神、神皇産靈神、三大神の敕を承り給ひて、おのごろ島に八尋殿をたて、天の御柱をたて〻禮儀嚴重に取り行ひ給ひしは、國々、神々、人々、山海草木など生みなし給はん爲の、重き大禮にて、輕々しき戯れの慾事にあらず、是を始めにて、素盞嗚の大神の、奇稲田姫の命を娶り給ひ、彦穂々出見の命の豐玉姫の命を娶り給ひしなど、御史を見て知るべきなり、今の世にても中宮女御などの入内の式は、御記委しくあり、其外高貴の御方々の、御婚姻の式の結構美麗なる事、言語に述べがたし、下の下なるきみにても、婚姻は一代一度の大禮なれば、身の根々に堪ひて、媒妁の人を以て取り結び、親族一類かたらひ合せ、定さりたろうへにて、双方の主君へ願ひぶみ奉り、御ゆるし蒙りて、吉日をえらび、親子兄弟、一族家門、皆禮服を着て祭禮し、酒宴歡樂して萬歳を謠ふは、子孫繁榮の基をおこす、男女交通の行ひ始の祝事なり、其後主君の仰付蒙りて、御前に酒肴を献じて、禮服にて、婚姻の御禮申上るは、交通始すみたる由の御禮なり、斯く表にあらはしながら、その行は、人の前にてすべき事にあらず、大祖二神の交通は、くみどにおこし給へり、くみどは、陰所なり、おこしは、初發なり、然る故に、新婦を娶るは、新室を造る故に、新婦を新造といへり、よしや一室造らずとも、新婦を新造といへるは、古今通稱なり、されば ひめはじめは、密事始の略稱なれば、娼樓にも、姫にも、飛鳥にもかゝはる事はあらず云々、俳諧歳時記には年山紀聞、海人藻芥を引きたれど略す

面倒なするにしておけ姫始

寶船、初夢

【俳諧歳時記栞草】大晦日より元日に至るの夢を初夢と稱す、されど今俗二日の夜寶船を敷くなり云々、寶船は七珍萬寶を積み七福神を畫き軸に蓬を描く、上に廻文の和歌「ながき夜のとをのねむりのみなめさめなみのりふねのをとのよきかな」を書く、蓬は夢を食ふ由にて凶夢を食はしむる意に取りて畫くといふ、元日より賣り來る、江戸にては書店鱗形屋より摺り出せしといふ、初夢に富士を見れば吉事ありといふ

繪に書た船も今夜は人を載せ
不二の夢まかりちがふと二子なり
息子初夢に七人一座なり
富士を夢みて番頭に直るなり
着船の日から町人禮に出る
寶船さかさに讀んで下女感じ
寶船さかさにしても同じ歌
四十二の灘を乘り拔く寶船
寶船ほうろくのいる神もあり
寶船逃げて來たよなおん姿
初夢を二日にするは得手勝手
數萬艘鱗形屋は暮に摺り
富士の夢三千五百九十一
紙屑の溜り始めは寶船
一年へ手がつくと船賣つて來る

心よさ眼があくと富士どつか行き
ふじの夢一歩おどれは下卑たやつ
呉服屋も二人乗つてるたからぶね
子心に早く寢たがる寶船
二日の夜みな正直の頭なり
二日の夜頭は神の御本陣
富士の夢下女摺鉢をぶつこはし
不二山もめでたく見れば眼はいらず
唐土に無い夢を見て神酒を上げ
たから船並木の中をよんで行

御福の湯

三日上野護國院大黒祭り、大黒天の尊前へ備ふる所の餅を湯に浸して參詣の諸人に與ふ、これを大黒の湯、又は御福の湯といふ之を飲ば福智を得るといへり【東都歳事記】此邊に昔いろは茶屋あり

初春の山はおねばを飲みに行き
年玉の茶碗をむいで護國院
いろは茶屋大黒の湯が藥鑵で來
ふたつてゝおねばをとつてくんなゝり

初子の日

岳に登りて四方を望み、除陽の靜氣を得、煩惱を除くといふ、此日小松を引きて諸人千代を契る

初子の日かぎざきをする御遊なり

松の内

注連の内ともいふ、正月十五日までなり、江戸にては七日に門戸の飾を除く近來の風俗なり、七日已後を松過ぎといふ、此間諸人遊戯に日を送る

松の内我女房にもちよつと惚れ
松の内五文で仕切る親仁あり
飯はよいものと氣のつく松の内
こぢつけの武士の出る松の内
松の内花嫁二十四そくかり
他のものは入れまいぞやと松の内
こわそふに四わりをふせる松の内
松の内もゝだちで來るぼていふり
七草も濟まぬと夫婦引分ける
錢のある顔をして居る松の内
白石で先ンをして居る松の内
坊が親椀でふせる松の内
松の内夜蕎麥素人賣りもする
松の内皆いためつけ〳〵
松の内外樣をつれる御小身
嫁見世へ丸ッきり出る松の内
松の内すつと通じて叱られる
松の内下女は閉門くらふなり
禮服の生醉も來る松の内
商人のよき衣着たり松の内

寢せ付けて亭主とかはる松の内
松の内ちよつと來やれと母の聲
松の内廊上下の袖だゝみ
松の内下女べんべらの綿が落
ずつと來てずつと出て行く松の内
松の内摘草に出るせちがらさ
三聲づゝいゝ聲で呼ぶ松の内
松の内下女ぬつたとは〳〵
松の内笑ふ門トへは乳母來る
松の内しるもしらぬものぞくなり
素人の生酔松の内ばかり
松の内内儀毎晩のしをつけ

六日年越

【東都歳事記】其晩年越を祝ふ、今夕門松を取納む、なづな賣來る、七草の條參照すべし

たゝ取つた商人が來りや松が取れ
松取ると又冴えかへる去年のかけ
なづなからところ〴〵に小松原
七ッ起キしてぐい〳〵と大屋ぬき
門松を拔くより早き芽がはえる
門松を取ると出て見る玄關番
まな板をたゝくと常の門ドに成
松かざり大屋根こぎにして廻り
おかざりにつゝまれて行くいなか馬
門松を取ると生酔目立つなり
朝寢ぼう六日に松を取はじめ
松過のけんくわはくれの相手なり

七草

【近世風俗志】正月七日、今朝三都共に七種の粥を食す七草の歌に曰、芹、なづな、ごげう、はこべら、ほとけのざ、すゞな、すゞしろ、是で七草、以上を七草といふなり、然れども今世民間には二種を加ふのみ、三都共に六日に因民小農等市中に出て之を賣る、京阪にては賣聞曰、吉慶のなづな祝て一貫が買ておくれと云、一貫は一錢を云戯言なり、江戸にてはなづななづなと呼行のみ、三都共に六日買之、同夜と七日曉と再度之をはやす、はやすといふは俎になづなを置き其傍に薪庖丁火箸摩小木杓子銅杓子菜箸等七具を添へ歳徳神の方に向ひ先庖丁を取て俎板を拍囃すて曰、唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬさきになづな七種」はやしてほとゝと云「江戸にて唐土云々渡らぬさきに七種なづな」と云、殘六具を次第に取り之此語をくり返し唱へはやす、京阪は此齊に蕪菜を加へ粥に煮る、蓋し齊を俗に加へ煮て餘る齊を茶碗に納れ水にひたして男女之に爪をひたし爪をきるを七草爪と云、今日專ら爪の斬初をなす也京阪にては此行をきかず、或書曰、七草は七づゝ七度合て四十九叩くを本とす云々、此日七草を食へば萬病なしといへり、唐土の鳥云々とはやすは鬼車鳥といへる惡鳥を攘ふの意なりと諸書に見ゆ

七草を娘は一つ打つて逃げ
お飾りはわしにくれさい薺賣
三文がなづなを買つて叱られる
七軒で七文が賣るなづな賣
磨小木で何の鳥だと二度たゝき
七草は乳母が朝起き始めなり
まだ鶴が下りて居ますとなづな賣
七草を寢床で笑ふつらにくさ
うぬが爲め春の野に出る薺賣
もみくちやの唐土の鳥は下女が打ち
物忘れ始めは粥に毛をはやし
七草を田の中で聞く首尾になり
七草の杓子は舌が廻りかね
七草をたゝくところへ暮の人
なづな賣鉦を叩かぬばかりなり
なづな賣此上値切るところなし
七草に遣手も惜い爪を取り
俎板を帶ひろどけで叩くなり
仰山なのはなづなの料理なり
お飾りを隣へぬけるなづな賣
薺うり村でも至極かせぐやつ
薺でも賣レがいけんの聞はじめ
能おてら方にあふ日となづなうり
此頃の雪でときばる薺賣
門ド出に坊主にあふがなづなうり
せど門トをすとん〳〵と廣くする
ひだるいぞせちをいそげと爪を取
たゝ取つた商人が來りや松が取れ
大松と小松のさかいたゝくなり
しよぼくない若衆なづなを賣つて來る
大口に八文が賣るなづなかご

猿曳（さるひき）

【近世風俗志】猿廻しともいふ、江戸は彈左衛門の部下なり、中略、江戸は猿曳甚だ多く毎日數十人來り乞ふことあり、京阪は甚だ稀なり、三都共に其扮古手巾をかむり弊衣を着し二尺許の竹を携ふ、大名等に召るゝ者は羽織袴を着す云々、猿を廻す時三味線を彈き拍子を取る、もと廐の祓より起れりといふ

門口で背負（しよふ）投（なげ）をする猿廻し
隣から提げて來るさる廻し
猿廻しつかんで出ると杖を出し
猿廻し貰ふと後ろ見せて行き
背中からひよいと飛ばせる猿廻し
何卒狆をお次へと猿廻し
なりッたけ調子をあげる猿廻し
猿廻し一人（や）で來るは靜かなり
猿廻しつかんで出ると肩を出し
猿廻し匙のやうなる撥で彈き
猿廻し投げると杖で掻き寄せる

猿廻し鯨か竹か一本差し

猿廻しるたいの知れぬ三味を彈き

猿廻し子はやッかんで跡を追ひ

ぶちぼうで隣へ運ぶ猿廻し

寺の禮

四日或は松過ぎより檀家信徒の家を廻る、年玉は納豆・祈禱札等其寺に依りて相違あり

伴僧の度々手を入れる合羽籠

餘慶申入れますと白衣なり

合羽籠開けて納豆一つ出し

納豆を取り德にする獨り者

伴僧は松を拔いてる人に聞き

小さな納豆百兵衛殿へ遣り

春工面よしと禪寺札を張り

立春のかた〳〵讀めぬ門の札

四日から年玉ぐるみ丸くなり

爪を取りかけて和尚の禮をうけ

餘寒（不及註）

ひどい借り春めきながら冴えかへり

嫁の禮

女子の回禮は男子より後れがちなり、三月節句までを正月なりとて時機を見て年賀に趨くことあり

嫁の禮ころは睦月の末つ方

あらかじめ母にいはせる嫁の禮

嫁の禮お春短くなつて來る

小松原薫りみちくる嫁の禮

門松も首たけになる嫁の禮

帶付て出るはは〳〵しよつた嫁の禮

嫁の禮殘り少なき春になり

何とでもおつしやいと年禮あがり

永日が濟むと跡からお春永が

嫁の禮男の見るは貌ばかり

入相をぼん〳〵つくに嫁の禮

嫁の禮模樣ほどなる門の松

嫁の禮落すと地主ぶるといひ

門松のすつこむ時分嫁の禮

嫁の禮歌居を越すのやかましさ

嫁の禮夜食をあづけ〳〵來る

門松の裾分ケをして嫁の禮

村の嫁お禮に出るとぬくゝなり

年禮もつい花嫁はおくれざき

年玉をお先につかふ嫁の禮

持參金ひよつくら〳〵と禮に出る

嫁の禮かしわめん鳥つれて出る

かいとりに月をかくして嫁の禮

さいの神すぎ禮に出る村の嫁

嫁の禮鰹四歩一いたゞかせ

正月も明かるくなると嫁の禮

帳綴

正日四日市中諸商人、年中の物價出納を記するところの冊を綴補す、これを帳綴といひ各々之を祝す

なにもかも大福帳と書かれたり
吉日に大福帳は書かぬなり

削掛

【俳諧歳時記栞草】或書に初子の日小松を引て、是を百寮にけづり、やごとなき御殿には東方にかけらるゝなり、これを削り花とも年木ともいへり、此遺意なるべしと記せり、今は十四日の夕べ、貴賤共家毎に、柳の枝をいろ〳〵にけづりかけて門にさすなり

正月も最う半分にけづりかけ
裏口は出來損ひのけづりかけ
削り掛ほどは殘して立かへり
削り花たつた一夜をたてだされ
伸びの手でつかんで放す削掛
紅筆をかしてにげたる削掛
削掛子をさし上げてもぎらせる
削り懸ぼんてうちんのかごでうり

猫の戀

【俳諧歳時記栞草】雜談抄に云、此者陰獸なり、然れば氣に犯されて交合を好む、是を猫の戀といふ

猫の戀ぶたれた時が別れなり

小豆粥祝ふ

【東都歳事記】十五日、今朝貴賤小豆粥を祝ふ、【近世風俗志】今日粥を食すること始は宇多天皇寛平二年正月十五日獻二七種粥一白穀大豆赤小豆粟栗稗柿小角豆也先レ是進獻不レ定至レ是勅自今毎歳供焉云々、古は今日も七種粥を食せしなり、今あづきがゆも上の七種の一にて古の遺風なり、蓋今俗は七種七草和訓同き故混レ之

正月を片身おろせば赤小豆粥
門前の市を納めるあづきがゆ

四季施

主家より、奉公人に衣服を與ふるをいふ、番頭手代丁稚下女等それ〴〵に極りたる慣例家々にあるべし

頂いて四季施の不足舌を出し
松坂を越えた今年のしきせもの
伊勢縞の内は閻魔を尊とがり
元服の仕着せ松坂こえたなり

賽日

【東都歳事記】正月十六日、七月十六日を閻魔の賽日といふ、此日東叡山文殊樓、増上寺山門、淺草寺山門を開て諸人樓上に登ることをゆるす、眺望絶佳なり

賽日の連れは大方湯屋で出來
文殊の智惠で帆柱がよく見える
たま〳〵は吉祥閣で帆を見せる
賽日に御用きん〳〵もので出る
齋日に帆を見た野郎うなされる

齋日の御用大赦に行はれ
山門へるゝ年をして上がるなり
齋日に切を見て來てしかられる
齋日に髮結ヒひくてあまたなり
正月のるんま芝居におされたり
一年に二度高き家にのぼるなり

薮入（やぶいり）

【近世風俗志】養父入、走百病とも藪入とも書す。三都共奉公人春秋二季其主人より暇を給ひて父母の家に歸す、父母の家他國なる者は請人の家に行、請人の家を宿と云、故に今江戸にては宿下り又は出番とも云、京阪は今も藪入といふ、京阪市間丁稚は春秋各一日の暇を給ふ、日を定めず元服後は不レ許レ之、婢は幼長ともに春秋各三日二夜の暇を許す、元服の手代或は藪入を許さず、故に一日芝居見物に遣る其の費主人より供す、江戸にては丁稚を小僧〻云、正月十六日七月十六日を專とす、或は他日許レ之もあり、是亦一日のみ、元服後も一日の暇を給ふを總て出番と云、手代は父母及び請人の家に行こと式のみにて專ら青樓妓院に遊ぶことを風習とす、市中婢は更に一日の暇をも許さず京阪とは甚だ異也、武家奉仕の婦女は一日或は三日七日を給ふ、七日七夜を給ふを眞の宿さがりといふ、奴婢等に祝儀錢等を與へ傍輩に土産等の費多きを以て略レ之て三日等の暇を願ふ者多し云々、

薮入はよい人間になつて來る
薮入の土産でわかるまゝの親
下で見せますとはひんな宿下り
供が内見るが薮入くろうなり

宿下へ叔母の慾なし邪魔をいれ
宿下が濟むと年寄ばかり來る
薮入がかへると酒の施主がなし
薮入の綿着る時の手の多き
薮入の供へは母が飲んで差し
薮入の出掛けに物をかくされる
薮入を生マ物識にしてかへし
薮入がかへるとちゃいばゝあなり
薮入の羽織着て居るすまぬ事
無造作なものは丁稚の宿下り
薮入が來て母親は遣手めき
薮入の内母おやは盆で喰ひ
薮入の二日は顔を餘處におき
おさらばを宵にしておく宿下り
薮入に母はおめしの水を引き
薮入の妹はつきについて居る
でかいがと薮入の供茶をしたみ
薮入の後氣の知れた人が來ず
薮入をしかるを聞けば灸の事
あそこへは嫌と薮入氣の高さ
薮入が來て二三日菜が出來
大風を吹かせに娘宿へ來る
ちうくうな事ばかりいふ宿下り
薮入のしまひの指は木挽町
薮入のなんにすねたか六阿彌陀

薮入はくされをぬいて願ふなり
薮入によく似た男口を取り
宿下りすきまかぞへが入浸り
目の上に薮入を見るにぎやかさ
うづらでもよいと薮入よわく出る
よく〳〵な事か宿下叱かられる
雲日の養父入飛脚ほどあるき
薮入がかへると母は膳で喰ひ
すぼまつて馬から下りる宿下り
薮入に旅立つ程ないとまごひ
薮入へ毎晩蕎麥の施主がつき
宿下り供の飲む内文を書き
薮入の注進に來る樽拾ひ
宿下に母はどつとと焚付ける
薮入がかへると母は馬鹿のやう
薮入に息子芝居の見逃げされ
糸の無い三味線の出る宿下り
宿下り三ンをむすんで一つひき
おふくろのしようのはけちな宿下り
おきやあがれ宿下り宿をきたながり
一丁の血をうごかした宿下り
薮入が來て鶴翼に床をとり
宿下り兄を二階へぼいあげる
薮入べこゝぞと息子三味を彈き
薮入はたつた三日が口につき
薮入にうすく一トきれ振廻れ
物思ひ薮入已後の事と見え
箸をとらしやうを薮入うるさがり
宿下り日のべを願ふ死にはぐれ
薮入にはしよれ〳〵とせなあいひ
白粉を村中探がす宿下り
齋日にたちあがつたは羽織なり

鶴（不及註）

倒鶴は袴着て居る人へ行き

鶴の吸物

或書に云、禁中には十七日雛樂始の日鶴の料理を群臣に賜ひし由、幕府の時は將軍より諸侯旗下に分賜せしといふ

何卒一ト切れと鶴の無心なり
千年の上汁を吸ふ一家中
若死の鶴社祢でれうられる

惠比壽講

【東都歳事記】二十日、商家にて惠比須大黒の二神を祭り、鯛の鮮きを捧げて是を祭り萬倍の利益貨殖を祈る終夜親戚知己を迎へて宴飲す、又蛭子の像前に於て盃盤器物に至る迄價を千両或は萬両などと定め手を拍つて假に商賣の學びを爲す、十月二十日も亦同じ

夷講旦那のこはく無い日なり
五節句の外に愛比須が苦勞させ
逆桐の開帳をする惠比須講

夷講十日過したおもしろさ
夷講四五日骨をしやぶらせる
萬人を醉はせてかへす夷講
てう〳〵に九合入りでる夷講
夷講飯酣におよぶなり
ゑびす講ふじのぶらつく程醉はせ
夷講あつかましくも傘を持ち
夷講信濃はめしの二日醉ヒ

弘法大師參詣

川崎大師河原平間寺は弘法大師四十二歳の御時の御自作の像を安置す、世に厄除大師と稱して厄歳に當れる男女參詣して除厄を願ふ、江戸より參詣多く、同所萬年屋は是等の男女の中食又は宿泊するもの多く繁榮を極めしといふ、今は絶えて無し

二十五と四十二で込む渡し舟
役人がぞろ〳〵這入る萬年屋
あなたもか私も三と萬年屋
初夢を大師のつれに判じさせ
うろ覺え十五年跡來たお寺
十五年目にて内儀は萬年屋
長髮ッで大師へ參るむづかしさ
わたし船四十そこらと二十四五
十五年目でかきがらへ手を合せ
厄年シに東海道をちつと見る
品川で厄をよけてるふといやつ
やくよけへ行振袖は賣殘り

鷽かえ

【東都歳事記】二十四日二十五日亀戸天滿宮にて鷽かえの神事あり、木を以て鳥の形を作り諸人之を懷中にして取替ゆるの神事なり、惡事を轉じて善事にかゆるの謂なりとぞ、筑紫太宰府の舊例にならふて文政三年より此事を始むる

大宰府はもつとはやると鷽ばなし
鷽かえは廓にありたき神事なり

水仙

【和漢三才圖繪】本綱、水仙卑濕の地は宜し、水を缺くべからず故に名づく、其根蒜及び薤に似て長く外に赤き皮あり、之を裹む、冬月葉を生ず蒜及び薤に同たり春の始め莖を抽んで蕊頭の如く、莖頭花を開く皺葉、大き簪頭の如く狀酒盃の如し五尖上へに黄なる心を承く宛然蕊蘂あり、其花瑩潤、其香清幽、肥壤に栽れば其花茂盛し瘦地には花無し、五月の始め根を收め童尿を以て浸すこと一宿し晒乾火暖の處に懸く、若し宿を移さゞれば根更に旺す、其根藥と爲る云々、

水仙を一ト手いくらと直をつける

二月

初午

【東都歳事記】江戸中稲荷祭前日より賑はへり、江府は都て稲荷勧請の社多しく武家は屋舗毎に鎮守の社あり、市中には一町に三五社勧請せざることなし、寺社の境内に安ずる所は神樂を奏し幣帛を捧げ、市中にも提灯行燈をともし五彩の幟等建て列れ神前には供物燈火を捧げ修驗祠官加請て法樂す、又男見祠前に集り終夜鼓吹す、【俳諧歳時記】武江に於ても此日王子、妻恋、三圓、眞崎等の社を始めとし武家市中とも鎮守の稲荷を祭り灯燭をかゝげ鼓吹して舞ふ、近くては雲間の霹靂の如く遠くては蒼海の波濤に似たり、江戸の賑ひ耳目を驚かすに堪えたり、

いつしよたい買つて來たよと初の午
初午はすみつこばかり騒がしい
初午は男かむろに世話が燒け
午祭り隣りも同じ拍子なり
翁神ゆえに豆腐を好き給ふ
狐の子出來て二月が初幟
不拍子が神慮に叶ふ午祭り
正の字は幟に書くも筆始め
正一位塀の上まで顔を出し
江戸見坂千社一目に午祭
初午は他人の中の見せ初め
初午に爪をあげるはすねたやつ
ひめのりで出る初午のいそがしさ

だゝ子にゐだるをつける初の午
初午は暦で見出す祭りなり

二日灸

【記事】二月二日男女おの〳〵點灸す、これを二日やいとと云ふ云々、灸に關する句を都て此項に收む、四花の灸といへるは勞咳の點なり

皮切りは女に見せる顔でなし
お前まあ蚤問の灸を忘れてか
豆いりを喰ひ〳〵あとの數を聞き
一つ身を後ろで合すやかましさ
ちりげとすじかひばかりを妹すえ
下女が灸ゆでそら豆を二合買ひ
よ火を据えやれとおんべい母かつぎ
灸を無になされますかと衿りを折り
あくたいに臍をかゝへる灸見舞
初手三灸は振袖に似ぬけちな顔
灸すえる禿の顔を見にたかり
約束を遣手まで出て一火すえ
よもぎふの巻を見い〳〵四花をすえ
灸のあと撫でゝ冥土の物語り
大の艾を下さいとまゝ子來る
あい御ろうじませあたゝをすえた
切艾ほぐした売は獅子の衿

ふんぎつた事もしえゝず灸を据えもつとりきみなと三升をすえてやり灸の脊中を野馬臺のやうに拭きせうかちの灸はときんの所へ据え正燈寺きりでかへつて灸を据え百灸を流して高が四文なり見世へ出る年までちりげ据えてやりはたばりの無い氣と灸をすえてやり股の灸あつくないのは哀れなり乳母の灸傍に泣人がついて居る身上りも二月二日はおのが爲め皮切りが濟むと淨瑠璃本を出しお内儀に灸をたのめば笑つて居ごせの灸あとで一段のぞむぞへ四火をすえ一火〳〵にあついかや白狀の日から娘の四火をやめ笑ひ止ム迄灸點を待て居るくじ取で遣手が灸をすえて遣り二三人見物のあるごせの灸もくねんとして肩の灸かきこわしこしの灸入る程明ケて能クかくす二つ三つ灸をおとしてさとられる非會所へ灸が濟んだと呼に來る切り艾大は大方うれのこり四所が火だに居ねむるむごい事しやうばんにしなのもさんりすへて立安いてうぶく足跡へきうをすえ目をさましでつちもぐさをはらひのけ振袖を着あきて四火のさたになりいきせいひつぱ　ふくろもぐさを下さい四火といふ沙汰を聞もしわたしやアね豆をかんだり顏をしかめたり四火すえるそばへ妹は抱いて來る又灸か久しいものと嫁はよみ

鰐に似て平たく小骨の多きものなり、初午には供物として稲荷に捧ぐ

このしろは初午ぎりの臺に乘り番つゞらしよつてこのしろさげて來るこのしろの鏡にうつるにぎやかさこのしろは肩でもふける肴なり

冬奉公人歸る

【東都歳事記】二日、信濃越後より寒年來り仕へし奉公人主家の暇を得て國へ歸る

北を見捨てはたごやへさわぎこみ豆いりをかみ〳〵信濃いとまごひ

土筆

【和漢三才圖繪】春月土より出でゝ狀筆の頭の如し

つくし拔きおれとは惡い叱りやう

辨當の盞へ土筆で書いて見る
つくし賣り姉はでんがく焼いて居る
つくしうり小判を出せばにげるなり

鶯

【和漢三才圖絵】鳴ときは尾を搖かす、冬月唧々と云ふが如し、人の音聲うつに似たり、立春に至て始て囀り、季春に止る、其聲清暢圓滑なり、飛啼する時は急にして長し、法華經といふが如し、或はこけふしと云ふが如く、月日星と云ふが如し、【江戸歳事記】立春の十五六日目より新音を發す、神田社地、小石川鶯谷、谷中の鶯谷、根岸の里、里諺に關東の鶯は囀り詘りあれども此邊の鶯は京のたれにて一入聲うるはしき山吉へよりいへり

鶯の初音に北の窓をあけ
鶯の歌は春の序古今の序
鳥影も鶯ならば歌の友
鶯にたゆむ院主の經陀羅尼
鶯を逃がして屋根の谷渡り
鶯を半月ばかり息子飼ひ
定家の門に鶯啼いてゐる
桃の木にとまる鶯下卑るなり
鶯とれん木が出るとおでんなり
鶯をかわいそうにと母ゐがい
鶯をつぶしのやうに拜見し

山笑

【臥遊錄】春山淡冶にして笑ふが如し、夏山は蒼翠にして滴るが如し、秋山は明淨にして粧ふが如し、冬山は慘澹として眠るか如し、

笑ふ山殘りの雪も白齒ほど

蕗の薹

【本朝食鑑】冬十二月宿根花を開く、正二月最盛なり、初め地を出る時小蕊の如し、花開きて重々として蕚を爲す、俗に蕗の蕚と號す、相重る貌をいふ云々

ふき味噌を子に嘗めさせて叱られる
蕗の薹一つで喰ひ飽きたといひ

若草

春草の初生をいふ

一寸の草にも五分の春の色

雪解

陽春の氣に遇ひて雪の消ゆるをいふ

富士山がおつぱだ脱ぐと九十川
退屈の中を流るゝ富士の雪

春雪

春になりて降る雪をいふ

春の雪其夜積つて其夜消え
小言いふ内になくなる春の雪
いゝものといふとなくなる春の雪

梅

【俳諧歳時記栞草】潛確類書に云、梅四德を具す、初生の蕋は元たり、開花は亨たり、子を結ぶは利たり、成熟する

は良たり、梅に四貴あり、稀なるを貴びて繁きを貴ばず、老たるを貴びて嫩きを貴ばず、痩せたるを貴びて肥えたるを貴ばず、苔を貴びて開きたるを貴ばず云々、梅の名所なる梨ぐれば武蔵國杉田、寺島村梅屋敷龜戸臥龍梅等江戸附近に於ける著名なるものなり、梅の種類殆んど三百餘種に上るといふ、太宰府の飛梅の如きは歴史の部に屬すれば茲には省く、

梅が香は座禪の鼻の邪魔になり
梅花を折つて肥たごへ挿して來る
まだ干葉をかけたまゝある村の梅
風の來るたびに隣りの梅を賞め
梅屋敷龍眼肉を干てあり
いつみやの梅もうそだとやかましき
梅やしきから天ぢくへおし廻し
うぬからすめと梅の木へぼうを出し
かわくといへば梅屋敷もちつとだ
梅の木が大きな森に二三本
臥龍梅見て妙計をたくむなり
梅の投げ入れ白無垢で生けて置き
梅見とは新板かはりました嘘

彼岸附六阿彌陀詣

春分の初日より三日に當る日を初日とす、七日の間諸寺院佛事を爲し説法等を爲す、此間參詣多し、俗家にても佛に供奉し個に魂す、六阿彌陀は六體ともに行基菩薩の作なり、下谷廣小路常樂院、田端興樂寺、四ヶ原無量寺、上總島村四福寺、下沼田延命院、龜戸常光寺に安置す

彼岸中嫁の笑ひの本音が出で
彼岸には一日足りぬ佛なり
中日に藏から琴を取寄せる
五阿彌陀にして貰ひたき尻ッつき
六番目嫁の噂のいひじまひ
六阿彌陀みんな廻るは鬼婆ア
五番目は一か六かへ廻すなり
こゞとの親玉つれだつて六阿彌陀
六阿彌陀土藏造りがしまひなり
六阿彌陀此世の道でうんじやうし
五番目は同じ作でも江戸產れ
手おいかけながら小遣イくだせんし
ふせがねをくさりでつなぐ六阿彌陀
六ッに出て六ッに歸るを六阿彌陀

白魚

【和漢三才圖繪】白魚、江海の交に生ず、立春の始に出づ、人之を賞す、二三月腹に子あり味稍々劣れり、生ける時青色を帶び、水を離るれば白く、煮れば益潔白なり云々【牛日閑話】淺草川の白魚は覺永の末胤をまかせしなり【柳亭記】白魚を一ト樽浦といふは二十一筋なりしが故なり二十一は裳の目の數なり、川柳點の前句に【伽島女房は二十筋かぞへ】女は著きが故に一筋少くかぞへたる人情をいひしなり、此句安永の頃の吟なれば當時迄は二十一筋なりし證とすべし今はおしなべて二十筋となりて樽浦の義聞えず、友人美成云「四十二の物あらそひといふたれ〳〵も知る册子

あり四十二は双六の賽の目の數にて双六は勝負を爭ふ物なるが故によりて數なさだめ此趣向をまうけたりと或人の圖畫にありと」されば古く物の數に賽目を用ひし事のありしなるべし

白魚の眼は楊貴妃の手のほくろ
白魚は王子で喰はぬ内の事
箸と盆持つて奇麗な魚を取り
篝火のもとへ源氏の魚が寄り
白魚も子に迷ふ頃角田川
白魚を可愛ゆいとゝと子に見せる
女客白うをなども聞て出し

薪能

或は芝の能といふ、【記事】七日より南都興福寺南大門薪の能始る、元是興福寺夜中の法會の問、寺僧の奴僕眷衆むに堪えずして門前に於て火を焚き、其光につきてたま〳〵俳優を爲し、長夜の戲れとする者あり、其後金春、觀世、寶生、金剛四座の樂兩座東武にあり、南都休暇の兩座之を勤む、今七日二座交々勤之、八日も亦如此、九日に至れば、初日の一座衆徒に告げて、若宮の前に於て饗を施す、其日次座能を勤む、七日の間雨ふる時は十四日に臨時に之を勤む

薪の御能飛火野の近所なり
鹿のふんよけて地謠かしこまり
灰だらけになつて奈良の能を見る
なまくらを差して薪の能を見る
大一座木辻は能のかへりなり

事始

十二月事納の條參照せよ(八日)

氣をつけてざるを出させる新世帶
笊で目をつくは八日のゆしまなり

歸雁

【淮南子】燕は春分にして來り、雁は春分にして去る。

燕に國の便りを雁は聞き
月に來て花には漏れてかへるなり
かりがねをつばめで歸すのどやかさ
翠柱ほど霞の中をかへる雁
花嫁の禮を見捨てゝ雁は行き
蛙(註に及ばず)

飛ぶ蛙鏡の池をくもらせる
かいじやくし數萬の蛙鳴いてゐる
赤蛙ごせはかすかに味を知り
河骨のうごくを見れば蛙なり
一つ宛かへるをしまふ水の音
むごらしくもゝ立をとる赤がへる
きやつといふ娘の跡を蛙とび
一人子に草をわかつて赤がへる

燕

【和漢三才圖繪】燕は玄表白頭赤黃の領なり、春來り秋去る雁鳧と表裏たり、其飛翔すること甚だ速く、直に醉り仰ぎ

亦能く飛ぶ、他鳥の能はざる所、故に鷹鷂敢て敵せず

うるしかきかすつて燕通るなり
燕は梵字のやうに飛んで來る

蝶

其種類甚だ多し

蝶々の近付でない袖もなし
すべらかし尻のあたりで蝶が舞ひ
菜の花にあれ見や主の紋が飛ぶ

涅槃會

【華嚴經】涅槃は乃ち清淨不死不生の地、一切の修行者の依歸する所なり云々、如來御年七十九にして二月十五日鶴林に於て大衆に教示し給ひ了つて頭北面西右脇臥にして入滅し給ふ、其日を紀念して各宗共に涅槃會を修す、涅槃像に五十二類、天道人道、地の三十六禽、江河の鱗魚、天地の間に生を受けたるもの皆慈顔の有樣を描く、猫のみ其中に漏れたり

念佛の上手を釋迦は聞て寢る
おびたゞし猫が悔みに來ぬばかり
けだものと並ぶと仁王哀れなり
蟲けらと一座に仁王泣いて居る

御臨終　二月に蟲の聲をきゝ
祝ひ日に疵のついたる涅槃像
子供の眼には面白い涅槃像
涅槃會もかまはず猫は妻を戀ひ
廻向院ばかり涅槃に猫が見え
十五日天竺の醫者匙を投げ
おしやかさま立のまんまでせんげ也

西行忌

【俳諧歳時記栞草】十五日、西行法師は左金吾藤原康清の次男、俗名は佐藤、鳥羽院の上北面、鎌大寺家の被官たり、弓馬歌道の達人なり、保延三年薙髮して大寶坊圓位と號す、（隆源傳）西行曰、和歌は禪定の修行なり、吾れ和歌によつて佛法をえたりと、常に佛涅槃の日、花の下にて死んことを願ふ、歌に、「なかはくは花の下にて春死んそのきさらぎの望月のころ」果して建久九年二月十五日卒す云々

きさらぎのその望月に西へ行き

豐島屋の白酒

【東都歳事記】當月中旬より江府の酒肆白酒を造りて商ふ、中にも鎌倉町豐島屋の酒店には二十日頃纔か一朝に商ふ、遠近より來むるもの夥しく未明より戸外市を爲せり

二月二十日はづさぬやうに江戸へ出る

初雷

【紀事】凡一春の中始て聲を發す、是を初雷といふ

初ものゝ中でかみなり嫌なもの
いゝ工面初かみなりに蚊帳をつり

田樂

【江戸歳時記】眞崎でんがく、眞崎稲荷の茶屋にてやく此所第一の名産なり、ことわりなるかなよし原のとうふを以てでんがくとなす、甲子屋といへるもの過ぎし寶暦の始より是をうるとかや云々、豆腐を串にさして燒き山椒味噌を塗

るなり【後はむかし物語】眞崎稲荷はやり出で田樂茶屋の出來たるは我二十二三歳（寶暦六七）の頃なるべし、鳳岡先生の會日に其話を初て聞けり、江戸町の名主は先生の門人にて其男が別て甲子屋と申す茶屋の田樂よしと申也など先生に語りしを聞けり、其後大に繁榮し宵樓の婦人をいざなひて遊ぶ人も多かりき、向島の秋葉は今信仰うすくなりて淋しけれど茶屋の賑ひは替らず、眞崎は神威と共に茶屋もおとろへたり眞崎は手前の角若竹や（後釋すりや）甲子屋川口屋玉屋いれ屋仙石屋きりや（道を隔て）八田屋などいづれも繁昌なりき

田樂を面白く喰ふ座頭の坊
隅田の景田樂串であいさつし
田樂の口は遠くであいて行
田樂の二タ口めにはこきあげる
田樂で歸るが本の信者なり
でんがくのとちうから止むおもしろさ
田樂を持つて馬かたしかりに出
ふところはでんがく切りのしたくなり
行ふかと田樂串で齒をせゝり
口ばたのみそをふき〳〵堀へさし
眞崎で黑かもいつちたんと喰ひ
田樂は田でたのしむのよみがあり
でんがくをちよび〳〵はこぶ女船
眞崎のむれ田樂の字に當り
田樂を喰ふ内まゆ毛かぞへられ
眞崎でげにもそうよが二三人
川一つ越すと田樂石のやう
でんがくをしかつた旦那おとすなり
でんがくの方へいろめき渡るなり
田樂をしわせておいてのみこませ
でんがくでのむ内とんだちゑが出る
うぐひすとれん木が出るとおでんなり
切つ手を見せて田樂を喰ィに行き
ふところは田樂きりと土手でいひ
田樂は昔は目で見今はくひ
甲子屋是から先が傳授事
相談が出來て田樂せつくなり
田樂の足手まとひは女中づれ
まだお早いと甲子や知つたふり

長閑

春日の悠々として閑なるをいふ三月のゝ天氣の條を參照すべし

鹽引の切殘されて長閑なり

春雨

【新選川柳集】柳眼煎レ波春蒼綠、桃顏流レ汗宿紅紅、春雨を膏雨といふ

はたし狀廻狀で出す春の雨

雉子

【和漢三才圖繪】雄は頂に並びたる角毛あり、頭頸胸腹墨色にして光あり、頰眼紅に嘴青くして尖り、背闌彩斑色

なり腰に長き綠毛あり、尾長くして文彩あり翅短くして背黑斑あり、鷹掌鶴に似て勁し、雌は黃赤黑斑にして文暗く尾短かし云々

今鳴いた雉子賣りに來る塔の澤

蕨

【時珍】二三月芽を生ず、拳曲として狀小兒の拳の如し、春の初に生ずるを早蕨といふ

にぎり屁のやうに早蕨草をわけ

春寒し山の蕨もふところ手

早蕨もまだ光陰のにぎりつめ

雛市

【東都歳事記】二月二十五日より三月二日まで雛人形同調度の市立つ、街上に假屋を補理ひ雛人形諸器物に至る迄金玉を鏤め造りて商ふ、是を求むる人蜂花大路に滿てり、中にも十軒店を繁華の第一とす、內裏雛は寛政の頃江戸の人形師原舟月と云者一般の製を工夫し名づけて古今ひゝなといふ、是より已來世に行はれて大かた此製作にならへり、十軒店本町、尾張町、人形町、淺草茅町、池の端仲町、牛込神樂坂上、麴町三丁目、芝神明前等に市立つ、元祿の惣鹿子に中橋の雛市を記せり、今はなし云々

大どらだ〳〵と雛を擔ぎ込み

階子降りきると二階で雛をまけ

萬屋へ主上を始めたてまつり

雛の賣上を女房は二枚とり

箱入の市は一月先きに立ち

なんぼべえしますとけちな紙ひゝな

內裏雛直きにまけたで氣苦勞さ

雛店で生酔一歩つけあげる

ふだん着て掘出しに行く大內裏

雛店で花見にゆかぬ筈にする

逆鱗のやうな內裏は賣れ殘り

買つけぬなどと內裏を二朱につけ

雛に菰苛き合はせずの尾張町

內儀が一歩たした雛安い筈

雛の椀小馬鹿にならぬ高いもの

酔つたやつ二朱づゝ雛をつけあげる

何宗か知らず和尙が雛を買ひ

初の雛旦那お大儀なさつたの

雛の膳米屋の隣り扱て困り

ほしい顏せまいぞと雛店へつれ

雛店で買てゝ和尙目立つなり

草庵の一町つゞく雛の市

石町の四つには雛の見世も引き

ひなのくどきにやばんとうもこまつてる

けちな雛いつけん店で買て來る

石町へ內裏をうつす賑かさ

三月

上巳雛遊び

【紀事】今日を俗に節句と稱す、年中五節句の一員なり、上は猶始といふが如し、三月初の巳の日を上巳とす、三月辰、巳を述を除日とす、以て不祥を除くなり、【東都歳事記】三月三日上巳御祝儀諸侯御登城、其時佳節を祝す、艾餅、桃花酒、白酒、炒豆等を時食とす、女子雛遊び、二月の末より屋中に段を構へて飾るなり、當歳の女子ある家には初の節句とてわけて祝ふ云々、雛に紙製土製の別あり大内裏雛、町雛、奴雛、伊勢雛等種々あり、柳亭翁の【足薪翁記】に考證ありて次の如く云へり、因に云、明和安永の頃迄は雛賣といふものあり、乗物、行器、雛の道具京雛やに人形だとよびきたりしは今の老人は能知るところなり、天明の頃より絶えし歟予がものごころおぼえしよりは此商人を見ず云々、尚世事異説、芹梧園筆、鶴庭雑考、傍廂松の落葉、遺孤紙料、後松日記、近世風俗志等に考證あり

紙雛は柳の葉程窓をあけ
眞ッ白な酒桃園の院へ上げ
雛の時遠い所のものを見る
雛の酒みんな飲まれて泣いて居る
嫁の雛かざらぬうちに人だかり
雛の酒茶碗でのんで叱られる
悪人が隣りにあるで早い雛
行廻りかん廻り飲む雛の酒
白酒をきれいに飲んだ鼻のさき

おちやッぴい節句の禮に早く來る
土みかど樣を姉へも飾るなり
煎豆に花とは雛へ馳走なり
雛祭りこれからこうは姉さんの
かしましく階下に並ぶ雛の客
雛棚のひよどり越を鼠來る
質屋からみもすそ河の流れ雛
天顔のうるはしからぬ母の雛
袖形へ載せてお針へ雛の菓子
こんざつさ雛に夜食がそつて來る
眞ン中に本店からの内裏雛
雛の箱まだ文も見ずあけたがり
うるさくてどうもならぬと雛を出し
おちやッぴい節句の禮に二三度來
嫁娘南北朝の雛をたて
雛の昇殿許さぬでだゞをいひ
惜しそうに隅からはさむ雛の重
かけ込んで雛をせッつく八ッ下り
内氣には似ず内裏をば小いさがり
村の嫁今戸のでくで雛祭り
雛棚へ艾を置くは姉の智恵
紙雛を隣りの搗屋搗き倒し
紙雛はころぶ時にも二人連れ
龍顔殊にうるはしき初ひゝな
内裏造營押入を明渡し

腰帶を雛の幕とは嫁の作
雛祭り旦那どこぞへ行きなさい
紙雛に角力取らせる男の子
居成かと背中を叩く雛の客
褒められて呉れた名をいふ雛の主
振袖を押さへて雛を直すなり
雛の酒下戸を隔てぬ澄み濁り
雛の箱ころんだ所で明けて見る
雛棚の志賀をかくすも山櫻
小笠原流で供へる雛の餅
雛抱いて寄めて居るのが雛の主
初節句その如月に餅を搗き
雛の膳客は左りや握り箸
紙雛も母のは腰が曲がるなり
せんまいも切れて煮〻たやうになり
金魚を片身上げておくけちな雛
未だ年ア若いな雛様に梅
内裏造營四分板を小わりなり
餘寒去りかね雛棚に梅椿
嫁禮の衣裳かたづけ雛を出し
土みかど様べい立てる田舍雛
天上の交りをする太郎左衞門
手ごみにはさせぬと母は雛を分け
目ぼしい雛を節句の日叔母持參
袖凧のやうな雛様叔父が呉れ

逆鱗がつて兄弟で雛をわけ
いとけない主上が娘氣に入らず
雛寒く桃のやう〳〵たるを上げ
重箱へそりを打たせる雛の餅
母親のやうに遣手が雛の世話
雛分けに母手を出して叱られる
意地の汚なさ白酒でよふろよろ
清濁を分けてもてなす雛の酒
ほめたる白酒で嫁赤くなり
隔心に坐つてござる嫁の雛
雛祭り見世から袴垂が來る
雛の壇五條あたりは眞ッ裸
ひなの棚いちると間か當るにより
よふろよろするは階下を遠ざける
窓へ出て雛の便りを待つて居る
ひな祭床の下から馳走する
白酒の德利階下の下へ入れ
紙雛が抱かつて居たで嫁は逃げ
雛を賞めるとのろッこい酒が出る
妹だけ雛までせいが低いなり
蛤の湯で雛様をふいたやう
蛤で上げるが娘氣に入らず
雛の菓子五臟六腑のやうに詰め
水引で蛤を釣るひなまつり
白酒に酔て公家衆の供をわり

雛箱へ娘道からついて來る

あら世帶わけの付く迄雛がなし

だいり雛つとにして行乳母がせな

どういふ氣だかと赤子に雛を見せ

雛さまへ野郎來て居る猫の番

何事のやうに兄弟ひなをわけ

にこついた内儀の跡へ雛をしよひ

初の雛伯母御やつきとされたなり

雛の有る内はおふくろ氣が殘り

龍顏ことに美はしき初の雛

嫁と嫁はなすを聞けば雛の事

雛の座敷から男は押し出され

豆がらで豆をたき〳〵雛分ける

初の雛亭主さわいで叱られる

やかましいおれが雛だと母はいひ

嘸おしかろふと圍のひなをほめ

禮に着て來たのを菱の餅へかけ

おがむから出しなさるなと母のひな

おそはつた通りに雛をねだるなり

いり豆に花がきんりへちそうなり

紙ひなへ棒を通してぼろを下げ

ひなのめしおらがへも來ていたゞきな

けちな雛そばやの膳ですぐに上

初節句もろふたんびに立ち直し

見てが多いで三月が嫁くろふ

ひなをつかませぬで今朝ッからのだゞ

節句前箱でとりこむ女の子

中納言くらいを呉れるけちな伯父

春野

春の野の靑々として草綠りなる中に菫蒲英公五形花などの摸樣を織り出せるを見れば心も伸ぶるやうなり

たんぽゝの草ばかりあるこがね原

汐干狩

【東都歳事記】當月より四月に至る、其内三月三日を節とす、南風烈しければ汐干かれゝなり、凡そ潮汐の去來は國所に依りて大に逆へり又四季にて遲速あり、月の大小によりても一定し難し、芝浦、高輪、品川沖、佃島沖、深川洲崎、中川の沖等、早旦より船に乘じて遙かの沖に至る、卯の刻過より引始めて午の半刻には海底陸地と變ず、こゝにおりたちて蠣蛤を拾ひ砂中のひらめをふみ引殘りたる淺汐に小魚を得て宴を催ふせり

三階に居るを汐干に母案じ

汐干狩たゝき放しの供が出る

海底に足跡のあるよい天氣

汐干には内の苦勞も忘れ貝

鷹の餌をのがれて汐干に拾はれる

草履取汐干の供が名殘なり

三月はいとなまめいた漁師出る

汐干狩安房や上總を遙かに見る

汐干狩流石見て居る女形

蛤に化けて汐干に拾はれる

落ちたるはけして拾はぬ汐干狩

人魚を買て來て汐干不首尾なり

品川のひかたがむ子うんのつき

能いしかけ汐干が土手とかはるなり

大海で土ほじりするうらゝかさ

雛しまふ

【東都歳事記】四日、雛に胡惣の餡を供へて其日の内にしまふ、【俳諧歳事記栞草】時珍が曰、八月種を下す、葵惣に似て根は蒜に似たり、其味ひ韮の如くにして臭からず

あさづきの餡進せて猿轡

内裏雛離宮へしまふ御不勝手

四日には夫婦別ある内裏雛

あさづきをもやしてなりと喰たがり

奉公人出換り

【東都歳事記】四日五日傳婢荷主を辭して新主に仕ふ、江戸奉公人出代りの事、以前は二月二日なりしが明暦三年酉正月十八日の大火に依りて其年三月五日に出代りすべき由公より御沙汰あり、夫れより改りて三月五日になれりとぞ

下がる乳母亭主にこ〳〵櫃をしよひ

出代りに日和のよいも耻のやう

白酒に酔ふてゝ下女はさせ納め

雛のべゝ縫ふと針妙いとまごひ

出代りに勘定高いやつ殘り

あらづぼい下女雛皿が割り納め

曇つても先づ出代りの義理が濟み

山の手の目見えは井戸を覗いて見

雛をしまふと人間の直をつける

倹約で一つ眼の下女を置き

御隱居をあまくちに見て飯につき

御指南をうけましたらと飯につき

出代りの涙にしてはこぼし過ぎ

出代りの乳母は寢顔にいとまごひ

つかひたてましたと下女へ暇乞

重年をさせなさるかと水を向け

雛の椀下女の叱られ納めなり

人主を三文出して買にやり

縮緬もとは肝煎の出放題

出て行をわすれる程に下女は酔ひ

五日より五日までなり下女が色

目見えだと見えて小袖で給仕なり

男の出代りおつちよつてつゝと出る

もぎどうな出代り馬でうつ走り

法の聲請狀迄に行屆き

請狀が濟むと買たいものばかり

乳母の名は請狀の時讀むばかり

寺請が入用かして御參詣

かみさまは草の餅迄やき通し

三月は大津繪も來て飯につき

桃花

數十種類あり、緋桃、緋桃、碧桃、金銀桃、源平桃、江戸桃、早桃、冬桃、一歳桃、毛桃、姫桃、西王母、油桃、日月桃　三千世界等在來種の主なるものなり

桃の花下女が迎ひの馬につけ
薪ほど乳母の里から桃の花
遊ばせる牛を蹈まへて桃を折り

草餅

【三代實錄】田野に草あり、俗に母子草と名づく、二月始めて生ず、草葉白く脆し、三月三日婦女之を採りて蒸し搗きて糕とす、傳へて歳事となす云々、上巳の條參照すべし

草餅の使ひは直ぐにいとまごひ
氣の知れぬ下女草餅を燒いて出し
草餅を燒いて宿へも進せろよ
草餅の使公家衆にとめられる

野掛

野遊の事なり、黄塵萬丈の都門を出でゝ一日を自然の清境に樂しむ愉快想ふべきなり

眞ッ黑な煙管を借りる野掛道
野掛道親仁の豐後初に聞き
森背に野掛の通るにぎやかさ
手拭を引張りあつて野掛道
あいつらは何うしたといふ野掛道
煙草の火つきほして行く野掛道
江戸入りだなど、野掛は火をはたき
野掛道生酔蝶になぶられる
羽衣のクセは野掛にうつてつけ
野掛道頭へ扇くゝしつけ
ありきりの音ぼねを出す野掛道
ふう〳〵をやめて野掛へ火をはさみ
是も一興と野掛はたれるなり
ほうつては扇を拾ふ野掛道
手を分けて酒屋尋ぬる野掛道
野掛道和尚以ての外ふざけ
煙草をばうんと詰込み下戸野掛
此村になんと酒屋はござらぬか
扨ついに來ない所と野掛道
かけぬけて芝に寢て見る野掛道
氣づまりをねこそげはたく野掛道

茅花

【本草】白茅、葉茅の如し故に之を茅といふ、白花を開く云々、小兒は此白花を食ひ又はつばなまきとて之を以て遊戯を爲す、市外附近の村童之を取りて江戸に來りて賣歩行く、つばな賣といふ

番太郎香物鉢へ茅花入れ
おれがなも買つてと茅花賣は泣き
窓へ手を出して茅花の錢を取り
つばな賣りよく〳〵見れば女の子

茅花賣生酔に二把たゞ取られ
それかみやと一枚賣ふつばな賣り
一人のを買ふと茅花の穂を揃へ
生酔が來るよと逃げるつばなうり
聲色で茅花を値切る野掛道
あらひ鯉喰つて茅花の値をねぎり
買はないと通さぬといふつばな賣
つばなうり跡へつけさと奥家老
江戸へあいばんかと茅花賣にひ
つばなうりさやちりめんへこてり付
むさい盆つばなのせとく王子道
御鷲からわんといはれるつばなうり

櫻　鯛

春三月さくらの花ひらきて漁人多く之を取る、故に櫻鯛といふ云々、鯛の名所多けれども就中讃岐國大槌小槌の附近にて獲るものを最良と爲す、俗へいふ、大槌小槌の島は黄金より成る、瀬戸海の鯛皆此所に集り黄金の氣に觸る、此故に鰓の色紅殊に濃く黄金の色を帶び、他海の魚の及ばざる所なり

味噌うしほ八重に吸はせる櫻鯛
下戸が箸取ると嵐のさくら鯛
花の散るやうに鱗ひく櫻鯛
下卑た事鯛は切り出がないといふ
百しても鯛は奢りの内へ入れ
鯛を背めさせて肴屋寄りつかず
くたびれが出ると生ゞ鯛腰をのし
百姓の生れがはりが鯛になり
おどり子はおいらも鯛をつゝもうや
此鯛は七ッ時分とおして見る
鯛りやうるあたり入相程に散り
生鯛はつられたなりで臺へ乘り
くろがねのはしをならして鯛をきる
生鯛は糸を喰ひ切るやうに見へ
耕作の道具迄持つ魚なり
めぐり合て潮を鯛と貝ぢやくし

摘　草

雜菜磯菜など摘みて遊ぶことなり

摘草も商賣人は蜜柑籠
摘草の遣手は笊を持つて出る
摘草を捨てゝ逃げ出す腐れ縄
摘草の入れ物にする下女が袖
摘草を遣手は船へ呼び集め
ソリャア草だこんなのが嫁菜
陣笠で摘草に出る淺黄裏
のどかさは武げい見ながら草をつみ
つみ草もざるをもつたは近所なり
なぐさみにせぬつみ草は蜜柑籠

蠶（註に及ばず）

なぐさみの蠶は遣棚を這ひ

氣のすんだ所へ蠶につけこまれ
のう天氣

春の日のゆつたりと長く閑かなるをいふ長閑の義にて俗語なり

閑雲といふ雲の出るのう天氣
麗

【俳諧歳時記】美麗、華麗、妍麗など續く、皆春色の百花咲亂れ鳥歌山川までいろめきて春をかざるなり

麗かさ頻りに錢が欲しくなり
舟端で風をつぶすうらゝかさ
麗かさ榮華の夢を賣りに來る

花の宵

翌日花見といふ前夜なり

紙雛の幽靈花の宵に出來
花の宵紙を丸めて祈るなり
あすの花下女すそまくに夜をふかし

御能拜見

三月四日江戸朱引内八百八町の家主、一町に一人づゝを大城に召して御能拜見を許さる、御能の中入の前後に半數即ち四百四町の一人づゝ四百四人に分ちて入場せしむ

御中入四百四町は新手なり
深淵へ飛ぶと拜見ばあらばら

蓑市

【東都歳事記】十九日、淺艸觀音門前に立つ、近郷より蓑を多く持出でゝ此所にて商ふ、隔年祭禮行はざる年は十八日に市立つ

みの市に出て里扶持を持て行き
蓑市ばかりは江戸をあてにせず
蓑を着て新造二階中あるき
みの市は其角このかた出來るなり

春の月（註に及ばず）

櫻漏る月にぼうだら目をさまし
さくら漏る月にやうやく醉がさめ

暖

陽氣山野を罩めて温暖の季節となるをいふ、ぬくい、ぬくいなど同義なり

扨今日は單羽織で大當り
春の宵

【蘇東坡之詩】春宵一刻値千金、花有二清香一月有レ陰

春の宵女房が疵をづけはじめ
一文も無くつて春の宵を賞め

花の朝

花見の朝の有樣を何彼と味めり

今日はいゝなと毛氈でぶつて貸し
立づくり居づくりをする花の朝
花の朝狆もつれてと御意なされ

横着と日頃を叱る花の朝

わたしのが来だ出やすよと花の朝

花の朝寶永山を下女つくり

女中から夜の明けかゝる花の朝

あかしからおこしての來る花の朝

花の朝いやあと下女もほめられる

たれとなく起きよ〳〵と花の朝

花の宴

花を見て酒宴することをいふ

五百生さきは兎もあれ花の宴

山椒

椒樹の新芽を摘みて食用に供す

たつた三日にてころりと山椒味噌

花曇

【陸放翁天彭牡丹記】半晴半陰謂ニ之花曇一發花天同之

花曇り嫁今日にしよう明日にしよう

花曇り二人一本宛にしよひ

顔をしてぐる〳〵卷けば花曇り

お花見の濟む内空らへ手をあてる

御ンの字になつたと花見支度する

野蒜

【時珍】山原平地皆之れあり、野人これを食ふ、白花を開き實を結ぶ

草を分け根を掘つて居る野蒜取り

琴箱へのびるを入れて叱られる

疲倦きたと奴野蒜を掘つて居る

まくぐしの先へのびるをくゝしつけ

花の制札

酔狂に乘じて櫻花を折りて歸るものあり故に制札をたてゝ之を禁ず

折るべからずが見へぬかと下戸とらへ（一本しかり）

いましめておかぬと櫻幹ばかり

木の間から木の間へ同じ事を書き

花の幕

紫の幕さては小袖幕など花間に打渡して花を賞し酒宴す、紫に定紋うつたる幕は諸大名などの重方姫君などなるべし　小袖幕は町家の婦人の花見なるべし

花の幕しぼるとはちと氣にかゝる

大詰は生酔の出る花の幕

紫の外へ花降り琴きこえ

花の山幕のふくらむたびに散り

いつちよく咲いた所へ幕をうち

内々で茶碗のくゞる花の幕

まくの内花をあざむく顔計り

どの幕へ行と藝子をつけて行

幕の留主下女毛氈へ足を出し

紫の幕人の氣をうばふなり

むらさきの幕でゆかりの花見なり
定紋であたりをかこふ能イ花見

釣魚

春の彼岸頃より釣魚稍々盛んなり、河海の邊に糸を垂れ或は小舟を備ふて沖釣を試むるあり、其魚に依りて釣と餌を異にするは皆人の知る所なり

味噌を搗くやうに釣舟河岸をつき
焼飯を頬張りながらゑさをさし
たそがれの渡し釣師が二三人
釣竿を出すはやかたの淋しさう
水を睨めつけて蚯蚓をつまみきり
岡釣りは足で蹈まへて吸付ける
釣竿のちよつ〳〵と見える腹の中
すしや程ゑさ箱のある下手のつり

投網

釣魚と同じく此頃より河海に舟を泛べて網を以て魚を捉ふ

下手なやつ川中で蚊帳たゝむやう

花

茲には櫻花をいふ、都て各題に綴入しがたきものを此項中に收む

やかましさかた〳〵の子が花を持ち
斯う云ふ注文だと花の蔭へより
買ッて來た櫻と親仁ト者なり
酔ふた叔父さんが呉れたと花の枝
櫻の下にて扨いかゞし給ふ
ばかりではいやだと櫻連れがなし
かうぼくへ櫻を植ゑておもしろし
久しぶり櫻の下で嫁彈じ
生酔と下戸と櫻をねじり合ひ
なんと斯うしやうはと花の蔭へ寄り
わつちをもつれなと花にけちをつけ
入聟をさくらの中でむごく捨て
入聟のつらさ花なら花ッきり
よく咲いた所で局が戸をあける
眞つ盛り花の外には猩々緋
梅に鶯櫻に生酔なり
櫻花兄は苔の方を取り
ねこのめし入れ添て遣る花さかり
花の枝もつて風雅な倒れ者
渡し場の意趣だとすびく花の節
ふきがらは櫻の中でいぶりだし
おもいれを寢たと櫻をふつふるい
入聟をあはれと思へ山ざくら
花に坪皿とはさすが下部なり
さくらをばどれも御てんの跡へうゑ
女房のひが目にあらぬさくらなり
しだれざくらへ飛びつくと納所おい
花を見捨てるとうたひて聟歸り
二度とはつれぬとさくらへ下戸くゝし

女房はさくらであなを見付出し
ぶきよふなへッついを塗る初ざくら
櫻へもやらぬと女房でかしだて
花でつき合て設たとそ引出し
禁酒じやとぬかしながらの山櫻

花の山

花ある山をいふ、江戸にては上野、飛鳥山等を指すこと勿論なれど單に花の山といひて其地名に關係なきものを茲に收めたり

生へぬきの幕串もある花の山
花の山とう〳〵下戸は突出され
又六ぼうや來やれはけちな花の山
花の山下戸を酔はせてもちにつき
花の山入相を待つとんだ事
下戸どもはさがりおらうと花の山
花の山拔いた〳〵が嵐なり
花の山いつそころせの三下り
おれは〳〵とばかり鉾花の山
ほころびを覗いてあるく花の山
つゝみへもちらほらあたる花の山
花の山幕のふくれるたびに散り
引張ると隣の出來る花の山
花の山足よわづれがせッぴ出來
是むちう作左と起す花の山
花の山どせ松の木の方へ向き
花の山未だおぞうが氣はしれず
のまぬやつ一日拜む花の山
花の山むかしはとらのすみかなり
花の山石に出家が二三人

花見

櫻花の頃、向島、飛鳥山、日暮里、御殿山など花の名所に一族知己打連れて游賞す

むつかしい文を花見のさきで見る
くせのある酒で花見をはぶかれる
櫻見に夫は二丁あとから出
女房の智惠は花見に子をつける
一ト御殿ばかり故郷へ花見なり
一人見る花にくびれた酒をのみ
こわ色はむほん勝負の花見なり
人同じからず花見の仲間われ
乳貰ひはがつかりとして花見かへ
何かしら有るとはけちな花見なり
めしをたきこんで花見に女房出る
爪音のするは古風な花見なり
大木の花見はものがいらぬなり
じれつたい文が花見の先へ來る
上戸をつれて氣遣ひな花を見る
すり鉢で一ぱいのんで花を見る

花見さと下女輕石で手をあらひ

花の留守

花見の留主中の出來事いろ〳〵あるべし

いやもふ今朝はらんちきと花の留守
花の留守泥棒猫でらんをやり
おいくぢはないと局は花の留主
襷はづして姿見へ花の留主
花の留主やうたら雛へ手を伸し
居候花の留主居が喜見城
ぬけがらの幾つか出來る花の留主
花の留主此態はへと片付る
花の留主悠然として風を見
花の留主五ッ半打ち四ッを打ち
お花見の留主愛嬌のない女
花盛り一日男世帶なり
花の留主智つゝしんで相勤め

花の雨

花時降る雨をいふ、毎年此季節雨多し

毛氈を敷くとほろ〳〵落ちて來る
百姓の茶屋になる日は降りたがり
花の雨寢ずに塗つたを口惜しがり
今年の花見に濡れやうといらぬ世話
花の雨座頭つッかけものにされ
花の雨琴しんまくにおへぬなり
空を睨め〳〵辨當を内で喰ひ
引窓をしめて辨當を内で喰ひ
花の雨後は後生の沙汰になり
傘の大束を出す花の雨
骨ばかりさしてよろける花戻り
氣の毒さ櫻の下で雨舍り
琴箱へぼちり〳〵と生憎さ
あらう事花をやつたら傘をかし
奥中へ一鹽あてる花の雨
角田川乞食になるは律儀者
花の雨下女色揚をむごい事
ものはそうだん傘と花とかへ

東叡山の櫻

【東都歳事記】當山の櫻はその昔、靈命によりて吉野の苗を植ゑさせられし所とぞ、盛りの頃は實殷雅俗こゝに集り花下に遊宴して夕照の斜なるを惜む、ことに此地は都下を離るゝこと遠からず、春秋の眺めも外ならぬ風情多し云々、秋色櫻は山内清水堂のうしろ井の端にあり、當山は人皇百九代後水尾天皇寛永年中、比叡山延暦寺をうつされ江城の鬼門を守るために天海僧正靈號慈眼大師の草創なり

花の山鬼の門とは思はれず
瑠璃殿の大見世になる花の頃
年號が櫻の上にによつと出る
櫻より娘あぶない年に咏み
生醉が來ぬと名のない櫻也

井戸端の櫻でお秋名が面し
花見から盡飯に來る下谷筋
ひぢり坂律儀に花を提げて來る
御苦勞な事上下で花の山
足輕の仁王にかはる花の山
まつ黑にさくらの口をぬるなり
花の山やぐらの跡へ塔をたて
蔦を引ぬいた跡へ櫻を植るなり

飛鳥山の櫻

【東都歳事記】當所の櫻は元文の頃植ゑさせらるゝ所とぞ、この地は遙かに豐島足立の野徳を見渡し風景尋常ならず毎春遊觀多し、【武江披砂】飛鳥山の碑自然石ゆゑ高低ありて字形平かならず鳴島道筑の書なり一字宛切りて石にはりしとなん、深川三井親和まだ九歳なりし時道筑のもとにありて手傳てこれをはりしによりて字形正しく出來せしと鳴島氏物語りしを春日部道保かたる云々、【本町文醉】見レ花飛鳥頭、打レ暮自悠々、樹下提重開、谷邊土器投、通人連レ妓戲、俠者拂レ櫂興、醉臥芝原上、夢看蝶々遊、

飛鳥山何んと讀んだか拜むなり
此花を折るなだらうと石碑見る
飛鳥山淺黄の頭巾安い酒落
お茶瓶が欲しいと下卑る飛鳥山
飛鳥山座頭おどけて一つ投げ
飛鳥山落つれば元の土となり
飛鳥山毛蟲になつて見限ぎられ
飛鳥山毛の無いものを投げちらし
なんだ石碑かと一つも讀めぬなり
飛鳥山素人投げても〳〵
りはくだと見へて石碑をよんで居る

御殿山の櫻

【一枚摺花暦】御殿山は東海寺につゞく海邊ゆゑ鹽嶽飛鳥よりすこし早し、海上房總二州の山々霞なゝめに引て絶景の地出船入船ちる花に添ふてたゞはるかなり

泡盛で酒もりをする御殿山
盃臺に櫻ちりしく御殿山
御殿山三味の隣りはふせる音
子の尻を端折つて放す御殿山
御殿山むなしく歸へる所でなし
花よりは心のちるは御殿山
狼へ犬のついてる御殿山

隅田川の花

【東都歳事記】隅田川堤、木母寺邊、此わたりの勝景は諸國に聞えていちじるき名どころなれば先哲の詩歌數ふるに遑あらず、記するも又事あたらしければものせず、抑此地は四時變化ありて景趣一ならず、さるが中にも彌生の頃は長堤櫻花ひまなくてゑそ目には一匹の練絹引くかとあやまたる、都下の貴賤日毎にこゝに群遊し樹下に宴を設け歌舞して飯るを忘るゝは實に泰平の餘澤にして是なん江都遊賞の第一とぞいふべかりける云々、こゝより吉原に遊ぶもの多かりしとぞ

渡し守今はさくらの物語り

今以て氣狂ひの來る角田川
翌る日はいざこざ問はん都鳥
角田川舟ないはせぞ引ッ立てろ
おいてゝへ行くよ〳〵と角田川
泣き出すは放してやれと角田川
女房から先きへかどわす角田川
年よりは皆白髭でまくつもり
なんといゝ角田川かと土手でいひ
三圍の渡しに本多二三人
舟一人向ふの土手をかへるなり
ともかくも先づ渡しには乘り給へ
じねんじやうけちな花見をあてに燒き
角田川品によつたら遲いとこ
みなおれが惡だはるゝと角田川
花の枝持つが男の物狂ひ
あんおんにかへしはせぬと角田川
めんだうなひつたてろへと角田川
角田川わが思ふ子はむかふなり
氣は有やなしやとず引く角田川
角田川つれがわるいとかどわかし
花に背をむけて圓子を食つて居る
角田川口ッばたきだ逃すなよ
角田川婆婆已來だといふ所
歸りには人買になる隅田川
なんにせい向ふへ越せと隅田川
角田川までにあれこれやつとまき
けちな音を出すなとそびく角田川
歸りやるかきついやつだと角田川
角田川今でも母に苦をかける
角田川どらの傳授をうける所
一度いつたらいゝはなと角田川
引ずつて來るをにこ〳〵渡し守
角田川二十二三の子をたづぬ
今以て行かもどろか角田川
御目出たうござると誘ふ角田川
女房がよめば手紙もつの田川
常の日は渡し守さへありやなし
すみだ川一つ着て出て大あたり
角田川二度とはうれぬ名所なり
氣ちがひのそれからたえぬ角田川
角田川情がこわいと捨てられる
牛の御前でのろついて息子行き
角田川かへりははしごのぼるなり
いゝ年で然らばといふすみだ川
内の事アぐつと流せとすみだ川
酒もりのいざこざとはん都鳥
角田川所の人はかもめなり
深川へ漕げとは飛んだ角田川
一ッ着てもうよからうと角田川

梅若塚大念佛

【東都歳事記】十五日、今日は梅若丸忌日によりて大念佛修行すと云へり、柳樹の本梅若山王の社開扉あり、この頃姿花天とて大かた曇り又は雨ふる事あり、この日雨ふるを梅若の涙雨といひならはせり、歌鍋の惣蔵子に云、愛詣群集して彼しるしの柳梅若丸の塚もあはれを催す風情なく賑へり「梅若は十六日でぬる人もなく寂然として鳥の聲波の音のみといひしは寛延の昔にして今は夫にまさり四時繁昌の地となりて殊更花の頃は貴賤雅俗となく日毎に此地に遊賞し賞葉にいたりても尚往來たえやらず云々、【事蹟合考】木母寺の本堂は殿有公御建立なり、木母寺の額は木阿彌一族京都鷹ヶ峰太虛庵の開基光悦が筆なり、この寺は湯殿山行人派なり、伊勢物語に業平朝臣関東流浪の文章に隅田川の渡りにいたり其旅歌ありしとの趣向をとりて隅田川といふ詞を作りたり、是彼の物語の歌に

名にしおはゞいざこと問はん都鳥
わが思ふ人はありやなしやと

といふ結句のありやなしやといふによりて子をうしなひたる母の狂人と作りかけたり、この詞も延享の今にいたりては四百年に及ぶ事ゆゑ日本國中にうたひつたへて遂に遠境に及びたるなり、この隅田川といふもまことの角田川にあらざるにいづれの頃よりか土人彼の詞によりて梅若死骸を納めたるしるしとて柳の木を植置たるもの末代にいたりて終に一の古跡となりたり、御作事方の町棟梁の藤口九兵衛といふもの呼名被下置筑後と號す、その家督か備中といふそれを今世二代ばかり過るなり、その筑後無双の坪曲尺者彫物の手きゝなり、この者十三歳の牛若丸を木にて彫作したり、その頃かの殿有公寺院御建立なし下され候時の木母寺の住僧筑後父と念頃にてときに招れてその父の許に來り、その牛若丸の木像を見てしきりに無盟して筑後の父子に請ふて云く、さて〳〵これは能く出來いたし候我等寺の梅若丸の像にせんといふ、然らば携へかへられよとて彼の僧にあたへたるもの今に至りて彼の寺の本像たり云々、角田川の櫻の條參照すべし

一年と渡しかけあふ十五日
あまい酢で梅若を又母はくひ
吉田小僧の命日に息子行き
梅若は向ひも柳橋へ呼び
梅若の地代は宵に定らず
二タ檜の酒屋も見へる十五日
よし原を大念佛ですゝめこみ
梅若の戻りに聞イたみけん疵
梅若へ行のはうそでよしにする
見れば見渡すで梅若やめになり
ぶちころされた命日に息子ゆき
十五日梅若の方かきくもり
おとゝひの梅若今朝のつかみ合ひ
梅柳山はざつとして渡るなり
氣のはれた佛事三月十五日
當意即妙は木母寺の山號
梅若は二月の末に京をたち

吉原の櫻

【東都歳事記】當月中吉原仲之町往還へ櫻を植る寄竹にて

垣を結ひ黄昏よりボンボリに燈燭を點ずるが故花に映にて一入うるはし櫻をうゝるとは寛延二己巳の春より始りし由堺浦惣庇子に云へり、【吉原大全】花を植る事昔はなかりしが寛保元年思ひ付て植初たり、唐土にては傾城町を花街或は花柳苑など稱して花と柳は植ることなり、さすれば此里に花を植る事古實にかなひてよし、大門口より水戸尻まで背竹を以て棚子を作り桃櫻朝霞に色をまじへ春風に薫りて衣にうつる風情實にや群玉瑤臺の仙境もいかでか是にまさるべき云々、【半日閑話】寛延辛未二月寶暦と改元あり、此春より吉原へ櫻を植る、古今ためしなき賑ひなり云々、

一國は入相からの櫻なり
賑やかさ昨日迄無い花が咲き
幕よりも籠の花がおもしろい
面白さ箱提灯で花見なり
柳だのの櫻だのとて出られやす
櫻迄損料で咲く仲の町
人の散る時分に人の出る櫻
仲の町さくらに人をつなぐ所
待つ顔へ櫻をり〳〵散りかゝり
中の町こきまぜるのは柳ごし
櫻迄つき出しに出る中の町
花迄も盛りがすむと置かぬ所
來べき宵なり櫻から毛蟲下り
つらい事花莚の上へで四ッをきゝ
つくねんと花ゐんの上に三時ざし
花の外には松葉屋へ行になり

きしこくのとをりへさくら植るなり
すまぬ事花莚ンの上て四ッをきゝ
小木の花見いたつておもしろい
女房の鬼門にあたる櫻咲く
夜櫻は役の行者の知らぬ道
夜櫻はとしよりの見るものでなし
柳とはいふもの實はさくらなり
藏王權現を置きたい中の町

坊主持

野掛又は花見などに行きて荷物あるときにすることなり、向ふより坊主の來るに逢へば荷物を次の人に渡し、又行きて逢へば他の者に荷物を渡すなり

花なれば社稷人の坊主持
塗樽を下戸不承知な坊主持

花見團子

花見の頃、花見團子とて掛茶屋にて賣るなり

そろばんをひかへたやうな團子茶屋
遠乘の供はだんごを持つてかけ
花に背をむけてだんごを喰て居る

花の暮（不及註）

大きなだゝつ子引ッ張る花のくれ
花のくれやれどけいこうこけいこう
一ト口に五六人うる花の暮

花のくれ身について皆こうまいれ

花戻り

花見の歸りをいふ、途中の出來事、歸宅後の有樣などあるべし

尋常のはいぼくをいふ花戻り
ほねばかりさしてよろける花戻り
花の枝にこり〳〵と振り捻げ
櫻さんおゝい〳〵と鴉の者
櫻花しらふでかつぐ物でなし
戯談に談義など聞く花戻り
かしましい跡から花を一トからげ

花盗人（不及註）

俳人はていよく花に手を伸し
よもふとて花を盗むもあぶなもの
花どろぼふ蝶は無言でおつかける
奴ふみ臺でさくらへ手が届き

花の供

花見の供なり

花の供あまり急いで叱られる

花の翌日

花見の翌日の事なり、花見より吉原に遊びて歸り叱言を頂戴するもあらん、夫婦喧嘩するもあらん、疲勞して氣拔けの如くなるもあらん

お花見のあしたさしての話なし
言葉戰ひ事終り花でぶち
花が見てそしてとおやぢむつかしさ
居續の言譯花の外はなし
花を見に出たあくる日に仲人する
とまつたがあたら櫻のとがになり
花なら花さあそびならあそびとさ
花のあす下戸にしたゝか意見され

花散る

【俳諧歳事記栞草】飛花、落花、（天水抄）花のおつる體は、山里深山人倫も絶て見る人も稀なる所花おつるとしてさびしき體よし、一ちるとしてはひか事なり、散は禁中寺都名所又よしある所の庭、花ちるはざわめきたる體を感とするなり、又おつるとしてはひが事なり

落花するそばに奴の高鼾
だいなしに散るはと奴起される

櫻草

【和漢三才圖繪】山谷の中に生ず、即九輪草の一類異種なり、葉の形相似て微少、邊りに鋸齒なし甚だ光澤ならずして葉心白し、三四月莖を抽んでゝ花を生ず、單への淡紫或は白花、櫻の花の如く最麗美なり、故に名づく云々、江戸近郊のもの甚だ美名あり

ひからびてすつぽりぬける櫻草
松葉屋はつい〳〵に買ふ櫻草
あいそうに牽頭は二つさくら草

さくら草春の錦の小ぎれなり
入相の相手にたらぬさくら草

開帳

【東都歳事記】此頃より夏に至つて諸州の寺院緇佛巍神井に什寶等を東都に出し寺院の境内に於て開帳あり、日數は六十日を限りとす、本所回向院は都下に近くして諸方より參詣の便りよきが故當所の開帳はわきて繁昌せり、其間金銀米穀の山をなし種々の造り物幟挑灯等奉納ありて遠近より群集す、諸中と號するもの到着又發足の日送り迎ふる事夥し、凡そ當地の開帳は城州嵯峨清涼寺釋迦如來、信州善光寺の彌陀如來、總州成田の不動尊等を第一とす、何れも年限定り有り下略云云

諸國の靈像死人の上へ出し
歸りには釋迦と錢とのせい競べ
上下と衣の話すぶはんせう

勧進相撲

【東都歳事記】春冬二度なり、官に乞ひ晴天十日が間寺社の境内に於て興行す、夏は京、秋は大阪にて興行す都合四季に一度づゝ年に四度なり、本所回向院を第一の場所とす、其餘茅場町藥師、深川八まん宮、芝愛宕社地等なり、見物の貴賤未明より幅輳し番昌毛氣に堪し難し、又花角力と名つけて稽古の爲め臨時に興行する時には婦女子にも見物せしむ、江戸勧進相撲の始りは寛永元子年明石志賀之助といへる者寄角力と號け四谷鹽町に於て晴天六日に興行す、其後故ありて三十七年中絶せしが寛文元丑年中、年寄官に乞て再び興行しけるが夫より相續で今に年々興行しける由古今相撲大全に見ゆ、興行以前より江戸中番附を商ひ又興行の前日毎に太鼓を廻す、【本町文醉】角力近來兩國邊、一人二百五十錢、行司木邑庄之助、關取谷風小野川、贔負連中投ニ羽織一、棧敷上下掛ニ毛氣一、引分勝負明年事、早速京都大阪傳、【牛日閑話】深川角力、三月二十八日（安永七年）深川八幡社内にて角力興行、晴天十日、今迄は晴天八日なりしに十日と定るは是を始とす

勝負附ねつから女房ほんにせず
羽織着ぬ人へ關取禮をいひ
角力場に氣のない男頬杖し
御不興を角力がなだめ〳〵來る
あつさりとしたは相撲の棧敷なり
足ばかり洗つてしまふ關相撲
ちいつさな羽織を貰ふ勝角力
角力とり一つところをふんで居る
本所の寺もふさがる大當り
芝居より高い棧敷は繩からげ
庄之助數萬の人をいひふせる
やつといふ團扇の下に仁王立チ

柳

敗榾あり、楊は枝硬くして揚起す故に楊といひ、柳は枝弱くして垂流す故に柳といふ

五日目に柳の動くおだやかさ
今日限の家根屋柳を解いて行き
花よりも柳のわびはもつれたり

つみが無いそうで柳に見るなり

柳うりどこだと聞ば角田川

柳とはいふもの實は櫻なり

ふきかゝるやね屋柳をむすび上ゲ

こんな腰ありと出口にうえて置き

やめてから出口の柳蛇の如し

躑躅

【千金翼方】羊この花をくらへば躑躅して死す故にしか云

【奴風】染井の植木屋伊兵衛がもとに、享保の頃、有德院殿より拜領せしといふ、躑躅の大きなるが三本あり、面向無三唐松といふ木なり、其後聲迫て見れば、其木もいづち行きけんみえず、伊兵衛は地錦抄つくりしものなりしが、其子孫をとろへて、植木もすくなし、花屋十軒の内、小左衛門八五郎などが植木よろしかりしが、是また久しく見ざれば、いかゞや、(伊兵衛の園中に、有德公より拜領の根樹一本あり今猶存す、拜領の年月享保十二年九月なり) 地錦抄の外に長生花林抄といふあり、つゞしの事ばかり書さしものなり、淺草御藏前のさうし見世にて半本を見しことありき云々、尙足薪翁百話の中に躑躅の種類流行等委細に記しあり就て參照せられたし

躑躅見は蔦の細道こえて來る

遲日

春の日長く暮れなんとして暮れざるをいふ

日の長さ蕊ほつと息をつき

虛空をつかみ反りかへり長い日だ

畑から洗足ほどの日をあまし

日の長さやつと寂滅爲樂なり

棣棠

【東都歳事記】大森蒲田山本園中、寺島村百花園、木下川藥師境內、平井聖天宮奥山、其外名所多し、高田山吹の里はいにしへの名所なり、大田道灌の故事あり世人知る所故略す

ゆく水の形りに山吹咲いてゐる

鶉

【和漢三才圖繪】本綱、鶉大さ鷄雛の如く、頭細して尾無し毛に斑點あり甚だ肥たり、雄は足高く雌の足卑し、其性寒を畏る、田野に在り夜は群飛し晝は草に臥す、人能く聲を以て呼で之を取る、苦て鬪搏せしむ、其性醇にして橫草を越えず淺草に氣伏す常居なくして常匹あり地に隨て安す、其行くや小草に過へば旋つて之を避く亦醇なりといふべし、蝦蟆爪を得て鶉と爲る又南海に黃魚あり九月變じ鶉と爲る而も盡く然らず、蓋し始め化成して終に卵を以て生す、故に四時常にあり、鶉は始め田鼠化し終に復鼠と爲る故に夏にあり冬になし、中略、按するに處々の原野に多くこれ有り、甲州信州下野最も多し、畿內の產又勝れたり、黃赤に白斑の彪あり、珍らしき彪の如きに人甚だ之を賞で其聲知地快といふが如し、數品あり、嘩々快を上品とす、毎に早且日午夕暮に鳴く、凡そ春二三月始めて鳴く、世傳に至つて聲止む、六月又更に聲を發し中秋に至つて聲止む、人是を養ふ、其雌は足卑く嘻らず、呼んで阿以布といふ

化したての鶉鷹より猫に怖ぢ

四月

更衣

【東都歳事記】朔日、今日より五月四日迄貴賤袷衣を着す、今日より九月八日まで足袋をはかず、庶人単羽織を着す

衣がえ下女は小袖でくるしそう

灌佛會

【東都歳事記】八日、諸宗寺院勤行あり、本堂中又は境内に花の堂を儲け、銅像の釋迦佛を安じ、巻脂の諸人小柄杓を以て香水を佛頂に灌ぎ来る、在家にも新茶を煮て佛に供し、卯の花を捧げ又戸外に卯の花を挿なり、今日佛に供する所の餅を號していたゞき又花くそといふ、年中行事大成に花供御の饌にやといへり、京師には涅槃會の團子を指てしか云ふとぞ、【俳諧歳時記】凡そ諸寺院灌佛會を修す、諸品の花を以て小堂を飾る、是を花御堂といふ、其内に小き釋迦の像を安置し、甘草等の香水を灌ぐ是を甘茶といふ、【千代田城大奥】灌佛會とて今日牛込宗日寺の釋迦大奥へ出仕す、法の花普く匂ふ釋迦牟尼佛も流石に朝叢の禮を欠く能はず、「出仕」の二字當時權勢の程も想ひ遣られて不思議にも又可笑し、扨て御盞所はしんこにて御手づから製したる蓮の花瓣樣の餅及び目録を供ふ、午の刻まかり出づ、【近世風俗志】灌佛會三都とも諸所の佛寺にて花御堂を作り誕生佛に甘茶を灌ぐことなり、又三都とも今日の甘茶を墨にすり、「千早振卯月八日は吉日よ神さけ蟲をせいばいぞする」と云歌を書て廚に張置は瘧蟲を除くと云ひつたへ専ら之を行ふことなり、其歌甚だ拙きこと云に足らずと雖も古くより行れ然も諸國に弘りし事可笑の一つなり、又三都とも今日べん〳〵草と云ふを採り五七聖を糸を以て束ね逆に行燈に釣りて虫除の呪とす、是亦其據を知らずと雖も古くより仕來ることなり云々、今を去ること二千九百三十餘年前、四月八日花笑ひ鳥歌ふの時、迦毘羅衛城中藍毘尼園裡無憂樹の花盛りなる下に、摩竭陀國王淨飯を父とし摩耶夫人を母として聖者人界に降り給へり、傳へ云、其時大地震動して光明天日を貫き枯木花咲き、枯骨肉を生じ天鼓自然に鳴り天花自然に雨ふる、八大龍王は香水を以て聖者を洗淨す、其時聖者刹後七歩し右手天を指し左手地を指し天上天下唯我獨尊と獅子吼し給へり、灌佛會は之に因りて起れり

行水の始めは四月八日なり

初釋迦といひたき時分御誕生

おかもちへお釋迦を入れて持ちあるき

蟲よけをよみよく張るは無筆なり

お釋迦さま生れおちから茶人なり

お釋迦樣うまれおちると味噌をあげ

お釋迦樣うまれおちると茶漬にし

四月八日は行水の始めなり

誕生の指は鰹とほとゝぎす

天はよし地へむだ指の京の釋迦

一ヶ度づゝ茶にはされると釋迦はいひ

僧は聞キ俗にはくへと釋迦おしへ

きさらぎは殺て卯月には立ッて居る

屋根のある岡持へ釋迦いれて來る

御誕生嫁をにらめる眼をあらひ

初鰹（はつがつを）

【東都歳事記】東都此魚を賞する他邦に勝れ相州より送る所味ひ美なり。鄙賤の者も高價を出して是を求む皆夏の頃より鮮魚を選て街に商ふ、其鰹高くいさぎよし。【春夏帖】初鰹の贄、わが朝にてはかつをと呼び、もろこしにては松魚といふ、東齊寶鑑北狄西戎、四維八紘天地けん好がつれ〳〵草に、大根おろしのおろしかけ、先をからしにかゝれても、延喜式には供御となり、萬葉集には水の江の浦島か子が、かつをつり鯛つりかれて、七日はおろか七十五日も生のぶる、三千本のほつものを、だれか一本かはさらめやも、かまくらの海よりいでしはつかつをみなむさしのゝはらにこそいれ、【假名世說】江戸にて松魚をめづる事、北條五代記に見ゆ、天文六年の夏、小田原浦近く、釣舟多くうかびたるを、此由氏綱聞し召し、小舟に召され、海士のしわさを御見物、珍事の御遊、靈鷲に勢じ給ふ所に、鰹一つ御船へ飛び入りたり、氏綱喜悅に思し召し、勝負にかつをと御視綱なゝめならず、此時酒肴に用ひらる、然るに同じき七月上旬、上杉五郎朝定武州へ發向のよし、告げ來る、同十五日の夜軍に、氏綱打勝ちて、武州を治め給ひぬ、略諸侍戰場の門出の酒肴には鰹を專ら用ひ侍りぬとあり、【蜘蛛の糸卷】天明の頃我家の長臣渡邊松右衛門、石町の楽宮林治左衛門が許に至り、初鰹の振舞に逢ひし時、林が手代に價を尋ねければ、今日は安し、一本二兩二分なりと云ひしとて、立歸りて我が父へ語りたるを、我等傍にありて聞し事ありき、我父鰹を好まれし故、出入の魚屋常に持ち來りしが、初鰹は高價なりしか、秋の古背に至りては、肥大なるも價二百孔に過ぎず、今は初鰹も二兩三兩を爲さず、古背も二百孔の物なし、いかなる故やらん云々、松魚を又烏帽子魚といふ、【俳諧歳時記栞草】豆相の海邊、鰹、先づ寄らんとする時に、一物流れ來る、大さ二尺ばかり、形烏帽子に似て、左右に紐の如きものあり、その色瑠璃紺にして光澤あり、是を鰹の烏帽子といふ、漁者此物の漂流するを期として、海上に櫓を構へ、鰹の寄るを見る、是を鰹見といふ、兩三日過て、果して大に鰹を得るとぞ、烏帽子魚と名づくることこゝにより云々、古人の鰹魚を賞する文章尋ぬ甚だ多し

初かつを買人の方にひれがあり

女房にいふなと下女に鰹の直

ほとゝぎす見に出た留主で猫がひき

女房釋迦詣りの留守に刺身なり

江戸だねになると伊勢屋で初松魚

刺身喰ひながら十二字考へる

一日と二日かつほの直ではなし

初鰹一本さばける髪結床

はづかしさ醫者に鰹の直がしれる

伊勢屋から鰹を呼ぶやいなや雨

初かつをからすり鉢をするごとし

通り町あきたか鰹よこにきれ

伊勢屋さんまで高いよと鰹賣り

はやり醫の前で二タ聲初松魚

まなはしは持てゝ鰹あつく切り

初松魚呼べと叫べどかぶりふる

たて引キで女房かつをに手ゝつけず

初かつを早うわせたと買はぬやつ

初松魚そうじやさかいと直をつけず

きよ水にしあんして居る初かつを
五ツ文字の内はかつをも喰ひにくひ
初かつを女房あたまも食ふ氣なり
十六本すると犬迄食ひあきる
金持と見くびつて行くはつかつを
鰹より女房をほめて鼻をかみ
初鰹そろばんの無い内で買ひ
初鰹搗屋呼びつぐばかりなり
百すると大道中があたまなり
始には歯のたちかねるかたい魚
どたばたを見れば鰹と猫と下女
數ならぬ身ではくへない初松魚
大伊勢屋古背を二本百につけ
運鰹短かき足で伊勢屋買ひ
初鰹煮てくふ氣から錢も出來
聞たかと問はれて喰つたかと答へ
藍縞の魚給より直が高し
片身こそ今はあだなれやす鰹
十兩はしまひ見せやれ初かつを
いほが逆ひやすと鰹ふりむかず
かゝり人覺悟して喰ふ初かつを
横町はまだふみも見ず鰹賣り
初かつを十軒呼んで一本賣れ
なんぼじやときけば鰹の直は出來す
初鰹御用手を出し叱られる

初鰹かと佛正は無我で聞き
初かつを辻番いらぬのぞきごと
初の字が五百鰹が五百なり
初かつをつらをしかめて呼んで來る
冷飯はあるかと下戸の初松魚
初鰹客も臺所のぞくなり
初かつを一ト月息子しかられる
魚店にかりに居にけり初松魚
檢校のかつを三だん切れでなし
安松魚とく心づくでなやむなり
初松魚女房に小一年いはれ
鰹賣り隣へ片身聞にゆき
初松魚女房日なしへいつゝける
例年のことにたまげる初かつを
尾かしらの無いが伊勢屋の初鰹
沙彌などの食ふものでなし初鰹
さかな賣りまちかね山のほとゝぎす
初鰹家内殘らず見たばかり
神奈川の文は鰹の片便り
初鰹ふんごみの衆天怨わり
初鰹藥のやうにもりさばき
ゑり人で鰹をれうる長局
出格子で鰹買ふ日は旦那が來
鰹の直居風呂でするおもしろさ

初鰹是も左の耳できゝ
初鰹旦那ははねがもげてから
はつかつを一トロのめと下女へさし
初鰹内儀、こは〳〵百につけ
初鰹めしのさいにはあちきなし
初鰹ばゞあぐらゐはおつこちる
初かつをあつかましくも百につけ
初かつを裏て喰ふ氣では直がならず
時鳥より此事と料理人
かみ様じや出來ぬと逃る初鰹
はつかつを〳〵とてまだくはず
葬禮を見て初鰹値が出來る
片身裏るのを女房へ恩にかけ
初鰹ぶつかけにする座頭の坊
初がつを座頭に一つなぐられる
御てい主の留主で鰹を手負にし
鰹うり名で呼れるはあたらしい
初がつをふといやつだと猫を追ひ
そうおしてたまるものかと鰹うり
小やろうの使かつをは半くされ
大ばすに切て松魚を安くする
初鰹かついだまゝで見せて居る
其直では袷が新らしく出來る
座頭の坊山ほとゞぎす初鰹
おちぶれるものは鰹のねだんなり

しけかして鰹を二本半分くれ
あま茶な錢じやあいかぬ初鰹
かまくらの方から光るものがとび
かつを呼ぶ隣りはかりで金をかけ
はじめには歯のたちかねるかたいうを
春のすへ錢へからしをつけて喰ィ
初鰹はしを放せとしかられる
涙片手にすりこ木でこづくなり
ひり〳〵からいが伊勢屋の鰹なり
初鰹かつかちめいて江戸へ出
ほつ旬にもならぬかつをを伊勢屋かひ
甘茶では喰へぬ鰹のはしりなり
初かつを女房の磨で呼びたらず
おいらならもふかを着ると初鰹
初鰹小半丁からげびた事
直がでけんじやとまねて行〻鰹賣
そんなのも今來ませうと鰹賣
あまい酢でくはれぬやつはは鰹
魚店にこうまんらしい初かつを
初かつを玄關をふまぬざんねんさ
意地づくで女房鰹をなめもせず
惣どうこふきかけて呼ぶ初かつを
なんだをぬぐいよくきいた〳〵
芥子味噌ほめて氣の毒御娘子

下直とやいはん春屋へ刺身なり

卯の花

【和漢三才圖繪】按に楊櫨數種あり、空木、箱根卯木唐空木、三ツ葉卯木、ともに山中に有り、人籬樹に植るものは山空木なり、皆中空なる故に空虛木と名づく、高さ丈ばかり、皮白く肌深青、空にして其葉圓く長し、四月小白花を開く、簇を爲す、愛すべし、俗に云卯花之れなり、四月八日には此花を賓來りしといふ

卯の花が咲くと櫻は闇に成る

卯木賣鰹のそばで式文とり

杜若

【和漢三才圖繪】燕子花、其葉白菖に似て大なり、色淡く、其花實ともに白菖に似て肥大なり、紫色を正とす、近ごろ淺紅なるもの白色なるものを出す、みな變種なり、五月を盛とす、又四時に花を開くものあり、參州八橋の產名を得たり

かきつばた今盜まれた水の色

杜若盜めば蚤も蚊にくはれ

根こぎとはつたない盜み杜若

手で折るとぶちのめされる杜若

かきつばた盜んだ娘嫁になり

かきつはたどこか思ひの外はまり

杜若二ッ鎌ほどは水を切り

御持佛へころしてたてるかきつばた

かきつばたたらい一つそうくつがへり

杜若折角やればりんをうち

かきつばた四字と六字の上に置き

山梔子

酉草科に屬する常綠の灌木にして、暖國に自生するものあれども、多くは庭園に培養す、夏の中六出の白花を開き後實を結ぶ、長楕圓にして縱に稜角あり、熟する時は深黃色となる、花は食用に供し、實は食用品の染料と爲す、くちなしと名づくるに依りて物言はぬ色とて和歌などに多く咏まれあり

口なしの下へ和尙の埋め金

杜鵑

【和漢三才圖繪】杜鵑の形は雀鷂に類して、色灰黑腹白し、鷹の鳥あり、翅も羽も白き斑あり、口中赤く、頭に小冠毛有り、脚掌蒼色、其前の指二つ、連膜あり、後の趾二つ諸鳥に異なり、季春鳴聲、ほそんかけたかと云か如し、夏に至つて尤も多し、初秋に至つて聲やむ、冬月は深山に蟄す、【半日閑話】豫州松山の邊にてホトトギスの事をコツテ鳥と云、歌草紙などにクツテ鳥とよめるは是なるべし、【南留別志】ほとゝぎすを、郭公といふ事は、郭亡といふことのあるゆゑに、望帝の故事にまぎれたるなるべし、眞の郭公は暮春の比より、かつこうとなく鳥あるなり、【東都歲事記】大かた立夏を過てより啼初る、都て江戸の邊は此鳥多しといへどもとりわけ西の方は樹林繁きが故にこの鳥多く又啼事早し、小石川白山の邊、瞿に當地の時鳥はこのわたりより啼初ると云ふ故に初音の里の名あり、高田雜司ヶ谷、四谷邊、駿河臺、御茶の水、神田社、谷中、增上寺の社、隅田川の邊、根岸ノ里、根津ノ邊

光陰の一幕過ぎてほとゝぎす
人宿で未だ聞て居るほとゝぎす
よしきりに地をうたはせて時鳥
當年の茶を煮る上をほとゝぎす
ほとゝぎすもふ冷飯もすへる頃
吉原を三うねり程にほとゝぎす
ほとゝぎすきゝんしたとは年増なり
入かへに行ながら聞くほとゝぎす
時鳥ゆだんをするとなきたらす
時鳥下女ゐねむつたのが知れる
時鳥花嫁ものをいひはじめ
手のひらをなめてる上を時鳥
時鳥さしてもさゝんでもの雨
葉ざくらの四五間上を一首よみ
時鳥花無き里となつて泣き
鉢巻できくのはけちな時鳥
つんぼうの鰹はくへど是非もなし
越後屋の上で一ト聲ほとゝぎす
時鳥四ッ手にやかましいといひ
すり小木をそばでおさへる時鳥
江戸中を數取に鳴くほとゝぎす
時鳥土手でと口がついすべり
一ト聲を京江戸で聞く時鳥
手のひらで琴をおさへる時鳥

暮しよくなつたは安いほとゝぎす
晴雨とも昼夜げんきなほとゝぎす
時鳥あくる日からはへしに啼き
時鳥下女は小袖でくるしそう
針仕事手のかるく成ほとゝぎす
時鳥きかぬといへば耻のやう
鐵砲の間へ一ト聲ほとゝぎす
篙に出て谷汲のほとゝぎす
青空のたしない時分ほとゝぎす
下の句は月へゆづッてほとゝぎす
時鳥もう寺々でうむしたく
てんがいを笛でつッぱるほとゝぎす
ほとゝぎす土用時分はふるせなり
一ト聲で五丁をなぐるほとゝぎす
繪そらごとゝはいはれない杜鵑
ほとゝぎす饅このかたのやからより
中の丁あかるくなるとほとゝぎす
ほとゝぎす左樣ならばとないたやう
道の記の口元トで啼くほとゝぎす
一ト聲でわれも〳〵と貌を出し
時鳥月をかすつてないて行キ
名代に背中合せてほとゝぎす
つんぼうに悲は勝れたりほとゝぎす
つんぼうは只有明の月ばかり
夜伽同士初音の論で寢たが知れ

御産婦を證人にするほとゝぎす

比目魚

形狀蝶に似て種類多し、其長大なるものは二尺に餘れり、調理は刺身を主とし、實或は又炙りて食す

下タ比目魚お乳母はふてゝ喰はぬなり

蛤に比目魚女房はふとくしん

牡丹

【事物紀原】隋煬帝の世に始て牡丹を傳ふ、唐人も亦木芍藥と云ふ、開元の時、宮中及び民間競て尚之、【東都歳事記】立夏より二三日目頃、紅は早く白は遲し、深川永代寺、谷中天王寺中善明院、其他所々、【花暦】四ヶ原牡丹屋太右衛門園中、花檀紅白の花ふさをあらそひ誠に花の王なるを感ず、尤も實物なればみだりに入れず勝手より案内を乞て見物すべし、【白氏文集】牡丹芳、花開花落二十日、一城之人皆如狂、

春へ十日夏へ十日の花壇なり

ぼたん一本をふたありの子になかれ

蜘蛛

種類多し、節足動物中の一類なり、體中より絲を出して樹間軒端等に網を張り飛蟲を捕獲して食餌とす

きやうこつなお子だと遣手蜘蛛を捨て

馬蠅

【大和本草】凡そ物の大なるもの馬を以て名くといふ、日本にては相似ていやしきものを犬と云、犬蠅、犬山椒、犬黄楊、などいふ、いぬ蠅は葉に點あり

犬蠅のこゝろよく這ふ無常門

葉櫻

花の枝を辭して新綠の滴るが如きを賞す、三月の條參照すべし

葉櫻へさそふはつねの人でなし

葉ざくらは呑む一式のやから出る

葉ざくらに餌打の來るおとなしさ

葉ざくらや毛だらけのものぶらさがり

蚤

【和漢三才圖繪】赤色、肥えたる身、小き首、六足にして能く跳る、夏日人家の濕熱より生ず、おのづから牝牡あり

禪宗はざせんがすむと蚤を取り

のみを取るまなこは外に有と見え

そら寢入へんな所を蚤がくひ

飛んで來る蚤を見て居る病上り

剖葦鳥

【和漢三才圖繪】蘆虎、蘆原雀、蘆剖、蘆鷺、按に狀、倭の鷺に似て大さ雀の如し、青灰色の斑あり、長き尾あり、田澤蘆葦の中に在て、好んで葦中の蟲を食ふ、其鳴聲喧く亮なり云々

よしきりは伊勢も難波も同じ聲

筑摩祭

【俳諧歳時記栞草】近江國坂田郡筑摩の庄筑摩社、祭祀は

四月朔日、或は初の午の日、「神社啓蒙」、祭所御食津神、文德實錄曰、仁壽二年三月甲戌、近江國筑摩神に從五位下を授く、按に、筑摩の庄は大膳職の御厨の地なり、故に當職祭所の神を以て、此地に祠るか、蓋この神は稻食ん擊るに依て、男女婚を爲すときは、祭禮に必ず釜鍋を戴て神に奉す、不幸にして少壯の間に婦となるときは、やむことをえずして、改て嫁し、再び嫁する者は、二枚を用ひ、三たび嫁するものは三枚を用ひて、神幸の後に供するなり、中世蜜平の花嫁にならひて、里婦笑嬉を鬻ぎて數枚を重ね、艷態の爲の故なり、固に廬詣すべきなり

お祭がいやさに美濃へ嫁入する
すりこ木をさすべき管をなべかぶり
女にごうをはたかせる神事なり
祭禮にまことあらはす鍋一つ

蚊遣火

木の根或は葉などを燒きて其煙にて蚊を追ひやるなり

むごらしくごせ蚊いぶしの先に居る
ひきがたり中やすみして蚊をいぶし
蚊やり火の馳走ありがた涙なり
蚊いぶしを自慢しながら外へにげ

蝙蝠

【時珍】齊人呼て仙鼠とす、形鼠に似て灰黑色、薄き肉翅あり、四足及び尾に連合す一つの如し、夏出て冬蟄す、日に伏し夜に飛んで、蚊蚋を食ひ自ら生育す

蝙蝠の店を追はれる橋普請
蝙蝠に山椒くはせるいゝ時分

子子

【和漢三才圖會】俗に云棒ふり蟲、溝泥の中溫熱相感して小蟲を生ず、長さ二三分、灰黑色、微し蝌蚪の形に似て、常に一曲一直して棒を振る狀の如し

棒振も天上すれば人を呑み
たれるので子子取りはわきへ行き

蚊

【時珍】木の葉及び烟灰の中に生じ、子を水中に産み、子子蟲となる、仍て變じて蚊となる

一ト網にうたれた禿蚊にくはれ
蚊の中に坊主禿のあはれなり
蚊のくつた迄を恨みの數に入れ
いつそ蚊のくふもこらへる彈語り
踊り子は一トばちぬいて蚊をはらひ
じつとして居なとひたいの蚊をころし
蚊にくわれたのもうらみの數の内
よばつても來ぬはづ禿蚊のゐじき
蚊の中に新ぞういきがたえて居る
生酔は藝を仕舞ふと蚊かたかり
箒で蚊を追ひ〳〵見世にあふれて居
もらはれた夜は兩方へ蚊がはいり
蚊にくはれおきつしらなみちく生め
おいらんに叱られやすと蚊にくはれ

鰯

コヲシの轉訛せしものといふ、其質脆弱なる魚にして脂肪多し、おむら又はおほそともいふ、上總安房等殊に多く產す、小さきをひしこといふ

お内儀の手をおんのける鰯賣
氣の迷ひさといわしを取替える
生々鰯見切りに賣つて水をまき
ごまめでも濟むと鰯を安くつけ
添乳して棚にいわしがござります
ひしこの値つるさつてする繩すだれ

蚊帳賣

【東都歳事記】此月より蚊帳賣出る、【江戸塵拾】賣永の末大阪にて天滿喜美太夫といふ者甚美聲にてせつきやうの名人なりしが、いさゝかの事有て生玉の茶屋にて口論し相手に疵をおはせ其場を立退、江戸にしるべを尋ねて下り、これより駿河町の裏店に住んで、世を忍ぶ身なれば仕なれし說經もかたれず、ふかく名をつゝみくらしぬ、一年ごふくやの蚊屋といふふしを案じ出し、生得の美聲をはりあげて呼ければ隣人是が聲にうかれて此年蚊屋大きに賣れければ、是より蚊屋賣の呼聲はじまれり

蚊屋賣はめりやす程なふしをつけ
蚊屋賣は呼びだす前に肩をかへ
蚊帳賣の聲の能いのを女房呼び

蚊帳附枕蚊帳

蚊帳を用ひて蚊を防ぐことは古へよりのことなり、後松日記、梅窓筆記、柳亭筆記等に委し繁をいとひて茲に記さず、枕蚊帳は專ら小兒の用に供す

女房は蚊屋をかぎりの殺生し
はだかにて起きるが蚊屋の釣初め
蚊帳釣つた夜はめづらしく子が遊び
生酔は立ッて丶蚊屋へはいるなり
新造を蚊帳の裾からたづねだし
てぶつてう蚊屋に乳房が二つ三つ
起きぬかと蚊屋の環にて顏を撫で
暑い晩表二階の蚊帳が見え
金平の夢を見て居る枕蚊帳
なじまぬも道理秀が蚊帳を釣り
しんかんとねたはを合す枕蚊帳
うし馬をよけてひづんだ蚊帳をつり
しやの蚊やは三人と寢るものでなし
ふろしきをかぶつたあした蚊やを出し
枕がや二はり三針乳母はじめ
となりの女房枕蚊帳とりに來る

金魚賣

【東都歳事記】當月より金魚ひこひ蓼魚等街を賣あるく、金魚にわきらんちう三ツ尾さらさ敗品あり所々金魚屋數種を育す、【近世風俗志】錦魚賣、錦魚は紅色の小魚池中及び盤中に畜て觀物とす三都とも夏月專ら之を賣る、又金魚に異種あり形小尾大にして大腹のものあり常に尾を上に首を下に游ぐ京阪之を鬪虫と云、らんちうと訓す腹大にして形鞠に似たる故に名とす、又まるつ子と云は江人訛也又大腹に非ずして尾大のものを三都ともに朔鮮と云、又常慳丸つ子

朝鮮とゝもに各必ず尾は三尖なり二尖の者は鯉に類す、故に緋鯉と云ふ緋鯉金魚二種ともに紅あり白あり紅白を交るあり黒斑もあり、丸つ子朝鮮等貴賤の者は三五両に至る、又此買京阪は必ず各白木綿の手甲脚絆甲掛を用ふ江戸は定掛なし、又京阪は金魚桶上に柳令利一ヶを置く是皆旅人に扮する故なり、而かも三都とも各番之を制する元店あり云々

金魚賣は船又は參魚などを共に賣りあるきしたり證句多し

金魚賣これか〳〵とおつかける
めだかうりうがひ茶椀を一つもち
らんちうと號しかへるッ子をあづけ

藤

【花暦】立夏十五日めほど、東叡山山王社前、龜戸天神わたり二十間間の棚あり、同十八日め、坂本四光寺園中、鈴ヶ森八幡社内、御鳥住吉社前、逆井村百姓嘉右衛門園中、藤は日限一概には論じがたし其年々のあたりふあたりありて至つて遲早あり

藤かつら松一生のほねがらみ
小便でつくだの藤を見てかへり
遠藤は龜戸近藤つく田なり
藤を見がてら三神を拜むなり
藤を折つたのでりやうしにとつかまり
藤の咲く時分は花の山でなし
藤を見ながらにわづかな渡海なり

干河豚

【和漢三才圖會】名古屋鎮なり、背黄赤にして白點あり、鰭甚なく腹白し、味美ならず、たゞ皮をはぎて之を乾し、皮鎮々名づく、夏月鎮として是を食ふ

卯の花の雪に干河豚の直が上り

筍

【時珍】筍、俗に筍に作るは非なり、竹筍と筍と同性滑利、多く食へば人を滑せしむ、凡そ竹筍は淡竹を上とし苦竹之に次ぐ

竹の子は盗まれてから番がつき
珍客へ自慢の鮫を輪切りにし
竹の子もまだ和かで齒につかず
竹の子は一本拔いて先づ逃げる
竹の子をぼんと盗むはつみがなし
大喝一聲竹の子をすてゝ逃げ
竹うりは子をうる時はふしをつけ
湯くわん場のきわなはみんな竹に成り
ゆるい黒木へ竹の子をさして來る

浴衣

木綿に摸樣を染めたるものにて入浴後着するものなれど今は夏月常に之を着用す、摸樣等時々の流行あり

しやがんでゝ嫁はゆかたを引かける
ゆかたではいやだと娘降ると出す
くらやみの浴衣後妻ぞつとする
食傷の醫者は浴衣に羽織なり
通りもの小袖の下へ浴衣を着

行水（不及註）

人をみなめくらにごせの行水し
行水のわく内うらで二ばん取り
つみらしくごせの行水のぞくなり
ゆかたくりやよと言捨て嫁しやがみ
行水の戸板へ日濟はたるなり
行水へ瓜のにほひをどぶりうめ
我尻はいはず盥をちいさがり

新茶

【紀事】此月茶を製し了て諸方の人壺を携へ、新茶を領給し、然る後に壺を山岩清冷の地に寄せて、盛暑土用の暑温を避く、洛外愛宕山宜とす、凡そ茶を製するに前後の次第あり、故に摘茶の時、焙爐の時、揉茶の時といふ云々、新茶とは古茶に對しての稱なり、新茶賣來りしとぞ

四里四方見て來たやうな新茶賣

風鈴

銅鐵類にて鑄造し軒端に釣りて風吹けば鳴るやうにしたるものなり

風鈴のせわしないのを乳母と知り
風鈴のたんざくよめる暑い事

蟻

【家庭百科事彙】昆虫類の中、蜂と同樣のものにして、身體各部の構造は略々蜂に同じ、雌雄及び中性の別ありて、中性は生遲翅を有せざれども、雌雄は生殖時に至りて二對の翅を生ず、卵生にして幼虫、蛹、成虫の三期を經過す、土中に巣を營み、動物質を食とし、かれて穀粒種子等の如き植物質をも食ぶ、蟻は蜂の如く往々同族相集りて一の社會を組織す、その社會は共和政治ともいふべきものにて、雌雄中の三性各々天分に應じて職務を分擔し、よく協同一致して甘味の食を見付れば必ず仲間に告げ知らせ巧に之を運搬して巣中に納め病氣の時若しくは怪我したる時はよく親切に相助け扶養至らざる所無きに似たり云々、下略

蟻一つ娘ざかりをはだかにし

籠附籠賣

籠種々あり、【近世風俗志】籠賣、初夏以來三都ともに竹籠、蓮簀等を賣る、其拍定なし故に一夫を圍す　圍あり略す）又江戸には初夏以來蓮戸を賣る、各々必ず鍋を携へて敷居に合せ賣る云々

うら口へ嫁の願ひは鬼すだれ
くゝり出る座頭すだれにつき當り
一軒で呼べばすだれがみなうごき
玉だれの内に太夫はまつぱだか
くだすだれ一トつかみ持ち立つて居る
思案する肩に一すじ繩すだれ

蛇

蛇種類甚だ多し都て卵生なり

撿校は手引が有るで蛇におち
田舍醫者蛇を出したで名が高し

毛蟲

【俳諧歳時記薬草】陳藏器曰、毛虫繭を作る、形蠶の如し、故に雀蠶と名づく、好んで果樹の上にあり、大小ともに蠶の如し、身而背上五色の斑毛あり、毒あつてよく人を刺す、老んと欲るもの口中より白汁を吐く、凝聚して硬く正に雀の卵の如し、其虫蠶を以て繭とし、中にありて蛹を成す、蠶の繭あるが如し、夏月羽化して出て蛾となる、子を蠶の間に放つ、蠶子の如し

きやつといふ禿は蚩の毛蟲なり

稈蒔賣

【近世風俗志】ひるまきは初夏の頃賣之、是又瓦盆に稈稙をまき芽を出して四五分なる物に田家人畜の製物を附く

ふり賣の田地に一羽鷺が下り

虎耳草

【和漢三才圖絵】按に虎耳草は葉地に布て生ず、其花白く淡紅を帶て微々秋海棠の態に似たり、子を結ぶ、其葉を採て羹燒にし油に和して小兒頭瘡に傅くれば其し云々、鮑貝の如きものに植て檐端に懸けて觀賞す

取りに來ぬ鐙へ植る雪のした
ひつかりと烏影のさす雪のした

蝦蟇

湯生にして蛙の倍大なり、翫物として古來より傳說多し

ひきがへる掛物を見る姿なり
ひきがへる薩摩土瓶の肌もあり
ひきがへるのたり〳〵と罷出で

鵜飼

【家庭百科事彙】又鳥川ともいふ、鵜を放ちて鮎を捕へしむる漁業なり、古くより行はれ、神武天皇の御代既に餐鵜部の稱ありき、今日その最も盛んなるは、美濃國長良川の鵜飼とす、左に其實況を叙述すべし、鮎の成長するを待ちて初夏（陰暦四月中旬）の頃にはじめ鮎の衰ふるに至り季秋（九月上旬）に終る、夜毎に月を厭ひ、暗を待ちて船を浮ぶ、宵暗の頃は、日の暮れぬ程に上流に登り居て倒下すなり、其鵜飼の數、長良人は七艘、小瀬人は五艘の船をならべ、船一つに鵜匠一人、中鵜使一人篝工二人乘り、船の舳先に篝火（鐵の籠にて松明を灯す）をともし鵜を十六羽（此内十二羽を鵜匠一人にて使ひ、四羽を中鵜飼のものつかふなり）各々其頭を繩にて繫ぎ、繩のもとを一つに寄せ、て鵜匠の手に持ち、水中に放ち入る、此繩を手繩といふ、この鵜匠互に篝を揚げて勢をそふれば、鵜は鮎を逐ふて おのがむき〳〵水底に潜入り、縱横に行違ふまゝに、蜘の巣の如く亂るゝ手繩を繰さばき、片手には、鵜の呑たる鮎を吐かせ（鮎の大なるを三四尾呑たる時、引上げて一時に之を吐かしむ、初夏の頃鮎の小なる時分は七八尾をも喉に持たせて吐かすなり）また水に追入る篝の松を焚きそへなどして少しのすきまもなく立働く、其樣頗る壯快なり、又時によりては巻狩といふ事を爲す、こは數多の船を一つに並べ、川の瀨みをとり廻し、或は登り或は下り、火花を散らしてわれ劣らじと棹を打叩けば、蚩よりも明るき水底に鮎は怖れて度を失ひ、前後左右に逃まどふを、百餘の鵜は互に先を爭そひて追つめ追つめ、呑んでは浮び吐いては沈み、頻りに捕りてやまざるは、例へば戰場軍敗れて北るを追ひ、走るを討ちて縱横散亂するさまも似たり、觀る人與に入りて、時の移るを覺えず、鵜匠の家には鳥屋を構へて常に鵜を養ひ置き、冬春の間鵜、鮎、鯰などを食はしめ、又一ヶ月に兩三度づゝ、河流に放ち養ひて、隨意に魚を捕

らしむ、これを餌飼といふ、鵜は北海及び南海の海濱、又は島嶼に繁殖するものなるを、捕へ來りてこれを馴育し使用するなり

鵜のつらは凡慮の外の所へ出し

五月

端午

【東都歳事記】家々軒端に菖蒲、蓬をふく菖蒲酒を飲み又角黍柏餅を製す、小兒菖蒲打の戯を爲す、武家は更なり町家に至る迄、七歳以下の男子ある家には戸外に幟をたて冑人形を飾る、又座飾幟と號して屋内へ飾るは近世の簡易なり、紙にて鯉の形をつくり竹の先につけて幟と共に立つること是も近世のならはしなり、出世の魚と云へる諺より男兒を祝するの意なるべし、東都の風俗なりといへり、初生の男兒ある家には初の節句とてわけて祝ふ、尚四月二十五日より今月四日迄冑人形菖蒲太刀幟の市立つ、場所は三月の雛市に同じく往還に小屋を構へ甲冑上り冑幟旗挿物馬印菖蒲刀槍長刀弓箭鐵砲偽月刀其外和漢の兵器、鐘馗傳武勇士の人形等を售ふ、夜に至れば燈燭にかゞやきてうるはしく買人雲夜にたえず、再刻の江戸惣鹿子に云、新鹽町昔は此町にて冑人形細工人多く鹽町人形とて其製粗なり、價の賤を以て田舍人のもてはやしける今はこの名をだに知る人稀なり、此節より菖蒲刀賣歩行くとぞ此市は四月の條下に載すべきなれど便宜上此項に收むことゝせり

初幟追々に來る諸軍勢

初節句魚木に登るけしきあり

初幟源平兩家出てさわぎ

旗色のいゝのは初の節句なり

さりとては又と幟をひつこませ

惣領だけに牛若や綱が寄り

偽月刀をかるくとつかひもの

次男へはへろ〳〵武者に嫁斗をつけ
太平の武者は五月に見るばかり
鯉をねらつて斬るやうに鐘馗見え
十人が九人しやうきか金太郎
五月のは八十二斤内儀もち
ほねとかわ斗かぶとへそへて遣り
嫁手がらからのおとゝを軒へ出て
魚ふちにおどる十日の人だかり
能ィ星の下へ幟をたてさせる
榊拾ひ鑓をかついで使者に來る

菖蒲賣

江戸近郷の農民水田又は池沼等に菖蒲を作りおきて端午の節に之を刈取りて市中を賣歩行く

菖蒲賣り取立てといふ足で來る
江戸へ出て泥足を乾す菖蒲賣
泥足の乾る頃菖蒲賣りしまひ
槍賣はみちんさといふ菖蒲賣
傘あやめ持て御住寺申ます

菖蒲葺

【和漢三才圖繪】菖蒲家の檐に葺くものなり、或は仲の日、菖蒲に浴し、或は石菖の根を以て酒に漬し、これを飲めば邪氣を辟ふ

笠かぶる程でもなしと菖蒲葺
これぎりの菖蒲さげゆく離れ藏
はごの子の干物を拾ふ菖蒲葺
菖蒲葺目に立つ草を抜いて下り
隣へも梯子の禮にあやめふき
菖蒲葺人にだかれる年でなし

粽

【庖丁書錄】五月五日粽を食ふ事也、むかし高辛氏の惡子五月五日に舟にのりて海をわたりし時暴風俄に吹て浪にしづみけるが水神と成て常に人を惱す、ある人五色の糸を以てちまきをして海中になげ入しかば五色の蛟龍となる、それよりして海神人を惱さずこぎ行舟もさいなんに逢はずと申傳へたり、又は屈原が汨羅にしづみ魚腹に葬りしを祭りし時の供物なりとも申にや、又は粽は惡鬼にかたどりたればは是をれぢきりて食ふは鬼を降伏する義なりと安部晴明が說に有となん申傳へたり、唐の代に端午の粽其品おほし角粽雜粽菱粽角黍百紫粽九子粽有り、粽を角の如くにし又雜の如くにし又菱の如くにし又竹の筒の如くにし又はかりのおもりの如くにし或は五色の糸を繩になふてじゆずの如くにつなぐも有或はだんごの如くして九つつらぬるも有いづれもまこもの葉をもつてつゝむ也是を角粽とも角黍とも云ふ也むかし屈原が姉これを作りて屈原を弔ひけるなり月令廣義に見えたり、屈原が姉の名を女嬃と申也

五人扶持粽に添へて遣り始め
山伏の内のちまきは凄く見え

柏餅

【近世風俗志】江戸にては初年より柏餅を賀る（京坂には初年粽二年より柏餅）三都共其製は米の粉をねりて圓形扁

平となし二つ折となし間に砂糖入赤豆餡を挾み柏葉大なるは一枚を二つ折にして之を包む小なるは二枚を以て包み蒸す、江戸にては砂糖入味噌をも餡にかへ交るなり赤豆餡には柏葉表を出し味噌には裏を出して標とす

柏餅妹の乳母は手つたはず
かみ様をいくらも寄せる柏餅
大小で配つてあるくかしは餅
おつとり刀で柏餅をくんな
柏餅あまくこしらへ内でくひ
山椒味噌いづれあやめの柏餅
辻番へ守が指圖のかしは餅
太刀をくわらりと投捨て柏餅

太刀賣

【骨董集】むかし〳〵物語「六七十年以前までは五月の初、ときん、すゞかけ、ほら、菖蒲刀をうりてありく、それを子供求て、五月四日に、子供しやうぶにて鉢巻し、ときんをかぶり、たすきをかけ、菖蒲刀をさし、ほらを吹ありく云々」とあり、今はすたれたる事なればめづらし云々

見せずともよいに太刀賣りひらり拔き
奥様を菖蒲刀で切り離け

瑞午子供遊び

【骨董集】今より凡そ百二三十年前、延寶、天和、貞享、元祿の比は、五月五日男兒紙にて造る頭巾袈裟を着、山伏の體に出立て遊びし事ありき

辨慶の使かさごで飲んでゐる

菖蒲太刀乳母どつこいと受とめる
槍提げて向ふからしやうぶ〳〵

夏羽織

【俳諧歳時記栞草】單或は羅紗近來の俗服なり、柳莽園雜、骨董集、近世風俗志に考證あり、就て見らるべし

絽の羽織螢が着るとしまひなり
夕立に五ッ所紋をみなくはれ
絽の羽織着て出る所へ日濟貸
來年は螢籠だと親仁着る
脈をみるそばに四角な絽の羽織

菰刈

【蘇頌】水中に生ず葉は蒲菜の如し、刈て馬に秣ふ甚だ肥ゆ、春の末白芽を生ず筍の如し即菰菜なり、八月花を開く菜の如し、子を結ぶ菜に合して粥として食ふ

菅笠の内へ帶解く眞菰刈り

梅雨（つゆ）

五月の頃降る雨をいふ梅黄み落ちんとする時降る故に梅雨といふ、さみだれともいふはさつき雨ふるの略なり

年々に餘の儀にあらず降りつゞく
三味線も風聲の出る梅雨の内
しめし籠のけて太鼓をあぶるなり
五月雨に下女あつくなる火打箱
飲過ぎた疊の酔は梅雨に出る
井戸繩の縱上をする五月雨

雨蛙

【和漢三才圖絵】背青くして腹白し、大なるものも寸半に過ぎず、雨ふらんとする時鳴く故に雨蛙といふ

梅一つ落ちて鳴止む雨蛙

茄子苗賣

【近世風俗志】季春の頃、瓜茄子芋とうもろこし等諸苗を春七八ケに納れ搗ひうる商曰……瓦鉢等に植て賣レ之、

茄子苗なきだしそうな日和なり

降りそうな日に茄子苗〳〵

蠅

【本草】夏出て冬蟄す、暖を喜び寒を憎む、其蛆を胎みて蛆を生ず灰中に入て蛻化して蠅となる、蠶蛆の蛾に化するが如し、水に溺れて死し灰を得て活く

うつゝにも團扇の効く蠅嫌ひ

見附番蠅をうつして代り合ひ

蠅は逃げたのに靜うかに手を開き

蠅叩き是れ幸ひと嫁の尻

ものさしで畫寢の蠅を追つてやり

たいどくの蠅を追てるかゝり人

田植

【紀事】凡そ五月の末より六月の初に至つて苗種生長するを民間にて苗代といふ、これをうゑんとして先づこれを拔くを早苗取といふ、農民男女混雜して再び苗を拂む是を田植と云ふ、女子の苗を植るものを早乙女といふ、各々音をあげ唄ふ是を田歌といふ云々

ひどい風田植の笠に指のあと

道問へば一度に動く田植笠

早乙女の笠ひぼ岡へ持つて來る

早乙女の仰向ひて見る大一座

五月女を見て居て禿叱られる

早乙女は子を寢かすにも田植唄

早乙女は他領の方へ草を投げ

田をうへる嫁でいちうのはちすなり

白ッぽく田植に嫁の目立なり

田植に出すをお見やれと村見合ひ

五月女をすゝいでは出す輕井澤

住吉の御田植

【紀事追加】泉州堺乳守の妓女のうち、約する所の、赤公年季明けたる、女三人來りてこれを植ゆ、今日神田を植てのちは妓院の暇を出すと云々、二十八日行レ之

神事まへ田植おしふる姉女郎

傾城の蛭にくわれるにぎやかさ

はりのなさ奴にも成り田をも植え

住吉はたいこはきらひ女郎好き

田植笠禿を呼んでほどかせる

心太印心大賣

【圖説】石花菜は海石上に生ず、性寒、夏月に之を煮て凍となす、【東都歳事記】此月より心太賣あるく、【近世風俗

志】心太、ところてんと訓ず、三都共夏月賣之、蓋京坂心太を晒したるを水飩と號く、心太一個一文水飩二文、買て後砂糖をかけ或は醤油をかけ食之、京坂は醤油を用ゐず、又之を晒し乾きたるを寒天と云ふ之を煮るを水飩と云ふ、江戸は乾物煮物ともに寒天と云ふ、因曰江戸にては温飩紛を團し味噌汁を以て煮たるを水飩と云、蓋二品ともに非なり本は水を以て粉を團して涼し食を水飩と云ふなり、今世冷し白玉と云ふ物水飩に近し云々、長方形の檜荷に杉の葉をさし涼しげに荷を作り、其棚の上に心太突き皿等を載せて市中を賣りあるくなり

心太ひよろ〳〵とかしこまり
夏來にけらし白妙のところてん
生き物のやうにとらへる心太
袷着て心太賣なぶるなり
立縞の箱でうつてる心太

枇杷

【俳諧歳時記楽草】一書に云、其木隆密婆娑として愛すべし、四時凋まず、葉蹠耳の形をなす、毛あり、盛冬白花を開き、三四月に至って實をなす、毬を爲して黄梅の如し、皮肉甚だ薄く、味甘く核小き栗の如し

枇杷一つくつたがうらのしるしなり

鰒

【大和本草】東南の海に生ずるもの形肥大なり、夏秋肉多く冬春瘠ならず云々、

夕鰒も天秤棒も上へ反り
夕鰒は丸提灯で擇つて取り

鰒の聲日も精進も落つる頃

柘榴の花

【潛確類書】石榴種甚だ多し、千葉深紅にして實を結ぶものを寶珠と名づく、單葉のものを火榴と名づく、甚だよく花を開く、亦千葉のもの一種白花を開く白榴と云ふ、黄花を開くを黄榴といふ

燃えたつたやうに柘榴の花は咲き

紙帳附紙帳賣

紙を以て作りたる蚊帳なり、又寒氣を防ぐにもよしといふ、

【柳亭雜記】文化十二年九十三歳なる老人の雜記、飛鳥川といふ寫本に、昔夏近くなれば紙帳賣冬になればてんとくじといふものを商ひたるが今は少し、とあり、こゝに記されし如く今も店にては商へどもその家おほからずましてやふり賣に來りしことは古るき册子にも見えざれども三句迄證あれば延賣の頃はもつぱら賣り來りしこと必せり云々

（證句省く）用捨箱にも此飛鳥川を引て證とせり、

紙帳では自業自得の屁の匂ひ
紙帳の裡へ重箱のさかづきの
紙帳でふいたのを下女はいきどほり

團扇附團扇賣

【蜘蛛の糸卷】かゝる世の中なりしかど猶古賀の殘りたる事もあり、此比は今の如く繪店にて錦繪の團扇は稀には賣るもありけれどもはしゝ〳〵には繪見世さへなければ團扇を物に入れて背負ひ竹に通したるをもかたげ、ほんしぶうちはうちは更紗うちは反古うちはと呼びて賣りあるく大方は若衆二さいなどなり、【後はむかし物語】我が十歳迄はさ

らさ團扇や奈良うちは木曲うちはならうちはとて賣りしなり、さらさ團扇といふは宵紙にてへりを取りうちは板行にて丹と雌黄の彩色なり、形は今の團扇形に似たり、ならうちはといふは（　）如し此形なり、ふちも白き紙にて繪は板行彩色は蘇黄なり、たま〳〵吹絵も有り更紗うちはよりは少し品のよきといふ取扱なり、團扇の繪も合せ板行よりは一年も遲かりしとおぼゆ、ならうちはといふは役者を書てせりふなど書たるあり、更紗團扇にはなきかと愛ゆ云々

團扇では思ふやうには叩かれず
團扇では憎らしい程たゝかれず
團扇賣り少し煽いで出して見せ
居眠りをしい〳〵團扇張つて居る
寢て居ても團扇の動く親心
絹張で追ひうちにする憎い口
うたゝ寢の團扇次第に虫の息
おく道者明キ手の方へしぶうちわ
てんかふん團扇へのせてなすりつけ

合羽（かっぱ）

もと衛齒牙語にして雨除けとして降雨の際に衣服の上に着用するものなり、坊主合羽、長合羽等あり、地質は羅紗、小倉、木綿、琥珀、魚子織等なり、婦人は寛延寶暦の頃は浴衣を雨合羽となせしといふ

きつい降り俗が坊主を着てあるき
羅紗合羽聞きもせねえにおいらかの
浴衣ではいやだと娘降ると出ず
雨合羽和蘭の名はフルトキル

扇附地紙賣（あふぎつきがみうり）

【甚陽漫錄】西土には我國の如き扇なく、明に至りて我國の扇に習ひて作ること、東西洋考に兩山墨談を引きてのす、其文左の如し

兩山墨談曰、宋前唯用團扇、元初東南使者持團樂頭扇、入々皆譏笑之、我朝永樂初治、有持者、及備充貢遂將進御臣內府、又倣其制、天下遂通用之、【和名抄】阿布岐、風を取る所以也云々、扇に種々あり、檜扇、箱扇杉目扇、中啓、軍扇、鍛扇、舞扇、摺扇、京扇、名古屋扇、張扇等あり、【座塵談】扇地紙賣の事は予若年の頃は夏に至れば地紙形の箱を五ツ六ツも重ね肩へかつぎ賣行ける、買人ありて直段極ればすぐに其座に折立て賣し也、又持歸り折立翌日持來るも有り、近歲は地紙賣一切來らず、皆人京鄕下りの折扇を持事になれり、近頃は扇に伊達を飾る人はさらに見へず、右の地紙賣は伊達衣服を着し役者の聲色或は浮世物眞似などをして買人へあいきやうをしてうれるが多く有しなり、刻多葉粉賣にも此類ありける、【蜘蛛の糸卷】扇賣といふものありけり、扇の形したる箱をいくらも重ねたるを肩におきあふぎ〳〵と呼びありく、其姿は染めゆかたに白き脚半じん〳〵ばしよりおほかたはなまめきたる男、あみがさをかぶり呼び入るれば地紙を見せ其座にてなりてうるなり、是正德頃の遺風なりしに寛政にいたりて絕えたり、初代市川門之助と云ひし色役者扇賣の狂言をしたる事ありき、【嘆のおだ卷】其頃は地紙賣とて四月半にもなれば綺麗なるひとへ物に（極暑といへども單物足袋を用）足袋雪踏をはき、地紙の形にこしらへたる箱を三ツ計、其間に骨を入れたる角に長き箱を組入、馬の胸がひにて中ゆひなして肩にかけ地紙〳〵と呼て賣歩行たり、屋敷〳〵の窪所へ呼び込て扇を物好にあつらへ又即席に折もあり、よき慰にて

下女はした迄此地紙賣の男つきによりて取廻していらぬ扇をあらするものもありけり云々、十二月の末に至りて扇賣來りし由證句甚だ多し、今は都て此項に收めたり扇賣は冬の部なるべし地紙賣は夏なり

よふ忘れる人と扇棚へ上げ
眞ン中の扇座頭の忘れたの
長話扇をひろげてはたゝみ
年玉の中から夏の風を取り
御扇子をヶト拜見と讃めぬなり
なまめいた聲で呼ばれる地紙賣
暮れかたに二人で通る地紙賣
地紙賣母に逢ふのも垣根越し
尻持に和尚を持て地紙賣
地紙賣くされる文もことづかり
地紙賣芝の屋敷でくどかれる
地紙賣油壺から出てあるき
地紙賣葭町已後はなどゝいひ
名を聞て隅々へ書く地紙賣
地紙賣一ト聲呼んぢや鬢を撫で
地紙賣おぞうが戀の敵なり
地紙賣我慢が過ぎて風邪をひき
地紙賣我慢が過ぎて地紙賣
專らにやけを旨として地紙賣
難産のうぶ聲といふ扇賣
紛れ扇をつかつてる玄關番
しこなしで門止めにあふ地紙賣
女房になぶられて出る地紙賣
盆過は袖をぬひこむ地帛賣
扇子うりまけて戻つて戸をたゝき
手拭のすみをくわへる地紙賣
我慢して中形を着る地紙賣
扇子にてひたいを叩く能ィ機嫌
うぬぼれて隔日に剃る地帛賣
地紙賣かゝみときをばくぼく見る
地紙賣しまい左の者どもになり
むねくそのわるいはなしを地紙する
たがあふぎだかつかつてるわたし守
商賣にさわる地帛屋のあばた
扇賣掛取の氣をよわくする
本性をたがへず扇二本差し

なまり節

生節又はなまり節といふ、鰹の肉を一回蒸籠にて蒸したるものにて煮或は醬油などを附けて食ふ

なまり節よと金持の格子から

忍冬花

【時珍】木に附て蔓延す、莖少し紫色なり、節に對ひて葉を生ず、葉薜荔に似て皆く濃毛あり、三四月花をひらく、長さ寸ばかり、一蔕に兩花二瓣、一つは大に一つは小なり半邊の狀の如し、長蕊、花始て開くものは蕊瓣共に白色なり、二三日を經れば色黄に變じ、新舊相交り相映す故に金銀花と呼ぶ、氣甚だ芳し云々、昔時は此粘汁を毛髮に染り

しといふ、すいかつら賣とて五月頃市中をすいかつら〳〵と呼びて賣りあるきしといふ

すいかつらみんなにすると馬ふんかき

菅笠へあそがつて居るすいかつら

腹掛

腹當ともいふ、胸より腹に掛けて纏ふ被服なり、防寒又は勞働服とす、夏時小兒に多く着せしむ

腹掛になると子供はあたまがち

曾我祭

【紙屑籠】寶暦六年の名題に、梅若榮二樂曾我のとき、はじめて市村羽左衛門座にて曾我祭をとり行ふ、後に天明元丑年五月二十八日に、同座にて二度目相勤る、今三座にて祭禮あり、

有がたや橘さかふ曾我祭　邑洲亭古家橘

神まつる皐月を曾我の世界哉　狂言作者左文

曾我祭は近年の物にして、天明の頃、寶暦を始めとすれば、初代櫻田の時代にて考ふべし、文化のはじめまでは、年々狂言に番加へて、今は其例を失ふとぞ、諸書に其祭禮の盛況記しあれども略す

曾我祭するから芝居金がなし

石燈籠

社頭又は庭園に据えて裝飾とす、夏夜殊に趣あり

石燈籠ある夜賣れたる夢を見る

石燈籠買人があれば賣る氣なり

青苔衣に似て燈籠賣れず

値切つても人間のよい石灯籠

女房にせがまれて賣る石灯籠

胡瓜

【時珍】胡瓜張騫西域に使して種を得、故に胡瓜と名づく

初物のうちから胡瓜馬鹿にされ

めづらしい内はきうりも皿へもり

日傘

【俳諧歳時記栞草】夏日、日を防ぐに用ふ、白紙或は青紙を以て之を張る、荏の油を用ゐす、これを日傘といふ云々今用ふる人稀なり、【足薪余記】日傘ふるくは、日でりがさといへり、中略、さて婦人の用ふる青傘は寶暦八年の寫本愚痴拾遺物語に、右衛門といふ躍子にはじまり其時の町奉行水野備前守制禁したる由を記し云々

日がらかささして夫の内へ行き

納涼

【東都歳事記】二十八日、兩國橋の納涼今日より始り八月二十八日に終る、井に茶屋茅せ物夜店の始にして今夜より花火をともす亟夜貴賤群集す、此地は四時繁昌なるが中にも納涼の頃の賑はしさは餘國にたぐひすべき方はあらじ、東西の岸には箔子圍の茶店櫛の齒の如く比び、客を倡ふ手習女は眞白に粧ふ富士額雪の膚縞縮に透りて涼しさをそふるもいとおかしく、大路には假屋を構へ紅戲、揚戲、來絲傀儡、獼猴扮戲、其餘山野の珍禽異邦の奇獸に至る迄、種種の觀物看板をかゝげ喧鳴の聲かまびすしく、演史、土弓、影戲、笑話、篦頭舗、相工術者の床、生果、石花菜など物として有らずといふことなく橋上の往來は肩廉踵蹵轟々然

として雷の如し、漸々日も暮れゆけば茶店の橋の灯數千歩に映じて暗き國の心地し、樓船の挑灯は波上にきらめきて金龍影を曳し、絃歌一時に涌て行雲不動、忽疾雷の礫に驚きて首を擡れば烟花空中に爆發し如レ雲如レ霞如レ月如レ星麟の翔るが如く鳳の舞ふが如く千狀萬態神まどひ魂うばゝる、凡此に遊ぶ人貴となく賤となく一擲千金惜まざるも宜なり、實に宇宙最第一の壯觀とも謂つべし、鍵屋玉屋の花火は今にかはらず又小舟に乘じて果物など商ふを俗にうる〳〵船といふ天和の頃の草紙にも見えたり、其他大川通り、隅田川、不忍池邊、五月の半よりは黄昏より辻々廣場等に假の出茶屋を儲けならびに街の商人多く夜々の賑ひいふも更なり、神佛の緣日は夏を專として植木其餘商人わけて多し云々、

大汗でかへるは安い涼みなり

涼み客くさめ一つでいとまごひ

田樂へ吸付けに來る夕涼み

夕涼嫁の出るのは極暑なり

路次口を嬶でうめる夕涼み

粉のふいた子を抱いて來る夕涼

投げるなといふは涼みの相撲なり

所詮なく隣へ見舞ふ門涼み

夕涼ずしりと俵落す音

茲に居りやすと娘の門涼

此石は今にあついと門涼

あれさよしねえなと下女の門涼

門涼尻ッぺた叩き〳〵居る

逃足で嫁の出て居る門涼み

門涼おらが二階の戸がたゝぬ

五六度と覗ィて嫁の夕すゞみ

夕すゝみなげるなどと角力取

夕涼ミなんの氣もなく土手へ來る

門涼ミ宵ばりだのとあやすなり

稲光り男ばつかり涼むなり

うら口を〆て來やれと門すゝみ

涼臺（すゝみだい）

【開元遺事】長安の宮人暑伏の中ごとに、林亭の内に於て、畫柱を植て、錦を結びて涼棚とす、座具を設け、名妓を召て同じく座せしめ、遞に相避暑會をす云々、地方によりては別に涼臺を作りて夕暮より此に上りて納涼すれども專ら椽窓床机などを戸外に置きて納涼するもの多し

涼臺天は何うしたものといふ

涼臺ぎしり〳〵と人が殖え

涼臺又始つた星の論

さあ陣を引かふとはいる涼臺

船遊山（ふなゆさん）

【東都歳事記】兩國より淺草川を第一とす、花火の夜はことに多し、【柳亭雜記】柴の一本にいふ、船は東國丸淺草橋の船、大船のはじめなり、山市丸、日本橋の船なり屋形八間にしきるによつて山市丸といふ、熊市丸・屋形を九間にしきりし故にいふ、神田一丸、神田にて一番の大船なり、一トとせみな月炎暑の頃ふか川ちかくこぎよせたるに川邊涼しくよる波のよるとも知らず月の影熊一丸にはやり染ど

も若流したる女十二三人世當世はやる伊勢おどり、さすやうでさゝねは人待宵のから木戸まだもさすものは追手の風に水馴棹さすや汐時川一丸にうちのり云々、やがて遣伏が哀

淺草の川の面の船遊びこひになりつゝ身も踊るなり

延寶巳年より伊勢踊りはやり老たるも若きもよきもあしきも坊主も女もうきたつて踊る、ひきしほにまかせて流し船にて踊るもあり此屋形船のほかにおどり見物とて出る船もあり川武丸川一丸、大屋形船也、【むかしむかし物語】慶長の頃、夏日照暑氣強故、諸人納涼のためひらだ船に屋根を作りかけ是を借して人を乘せる、此船に乘淺草川を乘りまはし暑を忘れ慰むこれ船遊びの初なり、承應の頃涼船盛んにてありしが(中略)是に依て三四年の間は船遊びすきと止しに萬治の頃又布の船を作り出し(中略)しだいに大きく七八間の屋形を拵へ後は石川丸、關東丸、山一丸、熊一丸、十間あり、十間一丸は十一間あり、大船に乘て辨當善美を盡す也、其他諸書にくはしけれど略す

遊山船どせと座頭で安く見え

船遊山大隱居からおさへられ

うち川へはいつて嫁はちつと彈き

吉野だといへば藝子はよしといふ

吉野丸これは〳〵と晒落れて乘り腰元ですますは客い屋形船

供船へお玉の類は擇りだされ

船頭の足音を聞くいゝ涼み

屋形から何もかゝらぬ釣を垂れ

屋形にも捨假名のつく料理船

芳野丸火繩臭いが五六人あの船を寄せて見せうと三を下げたま〳〵の屋形にいとこはとこまで

船の藝向ふ三軒出來るなり

又施餓鬼うせたと藝子彈立てるあやかしがついて屋根船堀へこぎ

屋根船で行くのはどうかふせいなり

豈ばかりだと値をこぎる吉野丸

やねぶからはけさきいぢり〳〵出る

供船へ妾の用のその多さ

吉野からあがつて土手をおつぷさぎ

河の東でおとなしい吉野丸

吸物を出すで屋根船そのけぶさ

口と手とばかり屋根船さわぐなり

くりびきのやうに屋根船膳を出し

おつと來たなどゝ三味線船へ取り

とりかぢをしなと踊子聲をかけ

犬や馬ばかりでけちな船遊山

大きな納涼花の山をうかめ

吉野からひつきりもなく人が出る

船の酒體をかためててうと受け

屋根船の挑灯顔の中へさげ

大和廻り程にはかへる吉野丸

身を投げた上を屋形で三ッ下り

屋かた船袴着たのは京言葉

屋根船へよべばおどり子身にしみす

三味線をにぎつてのぞく土左衛門
猪牙をのむやうに吉野は堀へ付ヶ
ふり出すとやかたでにくい口をきゝ
やかたから人と思はぬ橋の上
人のすゞみをかわかしにひらだ舟
三味線をにぎつて通る船番所
れんくわんの中を花火の通ひ船
御番所をこすとひき出す今のあと
よしのから猿に西瓜を投てやり
下女小便に供舟へ手を合せ
跡ト付ヶを持せて藝者船へ來る
それあたま〳〵とけちな船ゆさん
見めぐつて來て船頭をおこすなり
いゝふりだなどゝやね舟にくいこと
めりやすの聲をしるべにふねいふね
通ひ船女に遣ひこころされる
元船にひかへろといふ御どうせい
大門にやかた一そうたつて居る
女房をよしのへ捨て堀へゆき
やね船でしやうを吹てるべらぼうさ
ばくちでも無いやね船が氣にかゝり
小船ンでおつとり廻す花の山
けちな舟ゆさんよし野をさかしてる
神棚にかるたのつてる屋かた船
十七八のたんと居る吉野丸

ぬけがらの屋根船のある鳥居下ゞ
惣勢は土手をおしてく吉野落
あがられやせんと秋葉で藝者いひ
吉野丸どたり〳〵と堀へつき
船おしぞ思ふ吉野の御延引
我舟へ船頭留守をさせらるゝ
屋根船に簾おろして歌とよみ
ませこせになつてお舟へ入ッしやり
やね船でまゝ事をした妾なり
かれ蘆の中にあやしいやねぶあり
船頭が多くやかたを土手へ上ヶ
堀の邪魔吉野一艘乘り放し

花火

【家庭百科字彙】娯樂の火技なり、火藥に種々の藥料を配合して張子の球匣の内に詰め、これを木筒に入れ、火藥に火を點じて空中に打揚ぐ、我國並に支那は、古來此術の巧妙を以て名あり、種類は蜚花火、夜花火、仕掛花火、鼠花火、瘡瘍花火、南京花火、線香花火等云々、昔は專ら夜花火なりしことゝ思ふ、江戸にては鍵屋玉屋兩家の花火名高し

また玉屋だとぬかすはと鍵屋いひ
不出來なはみんな鍵屋へおつかぶせ
花火を貰ひ日がくれろ〳〵
たてつめて線香花火を蜚とぼし
花火見るたびお妾は笑ふなり

昼時分おきて花火のはなしなり
人立は火なわをふると橋になり
すゞんでる足もとでちう〳〵といひ

四條磧納涼

京都四條磧の納涼なり、繁昌兩國の納涼にゆづらずといふ

御定メの通りを涼む京の町
一ト寢入しても四條のわらひ聲
都人僅かの水ですゞんでる

青梅（不及註）

なま梅をあづけて子もり叱られる
つき山の梅をおとしたむづかしさ
庭下駄でお庭の梅を盗むなり

昼寢附轉寢

夏の夜短く睡足らず、正午を過ぎて睡覺頻りに襲ひて假寢するないふ、轉寢も同じけれども夜寢床に入らずして假寢するないふこと多し

うたゝねの腰から下は女なり
うたゝねの書物は風が繰つて居る
うたゝねの枕四五冊引きぬかれ
みん〳〵が鳴くぞと息子おこされる
失とは向きをちがへて昼寢する
うたゝ寢は新手をかへて起すなり
よつぼどの間かと昼寢は眼をこすり
六月の昼寢も骨が折れるなり
涼しさは墨繪の松を敗て寢る
うたゝ寢は何か不足の姿なり
うたゝ寢のつらへ義太夫かぶつてる
おうたゝねぬすむが如く煙管取り
塗物師表だゝずにひるねをし
うたゝ寢も上ひんなのは本を持ち
うたゝねの顔へ一冊やねにふき
昼寢も人の目にかゝる其當座
かんどこがわるいで昼寢しそこない
不屆さ昼寢の顔へ論語當て
うたゝねの團扇の風が母の恩
添乳してつひせんたくが夢になり
うたゝねをくまどるやうに掃て行
うたゝねの謠は尻が皷なり
うたゝねに夫ト思ひをすそへかけ
お舟はぎつちらこと下女笑はれる

螢

【和漢三才圖會】大抵大さ三四分黑色にして兩額に赤點あり、臭氣あり其尻銀色の虫、夜光を發す、紙に裹ども亦光り外に徹る、麥稈を以て採碎けば銀砂の如し、【月令】腐草化して螢となる、【廣求】晉の車胤家貧しくして常に油を得ず、夏月には練の囊に數千の螢火を盛て書を照す夜を以て日に繼ぐ、【東都歳事記】王子邊、谷中螢澤、高田落合姿見橋邊、目白下通、目黑邊田畑、吾妻森邊、隅田川堤、其外

名所あり、都下の遊人黄昏より漫遊し籠中に入て家産とす、江州石山の逸楽の名所なり

一疋の螢でくづす門涼み
畫買つた螢を隅へ持て行き
反古張や似面で螢おつかける
反古張で遠卷をする螢狩
手軍のやうにこぼれる螢狩
船宿に禿螢をおがむなり
あつけない一歩が螢飛びしまひ
もちつとで螢へとゞく禿の手
畫螢籠へ振袖かぶせてる

水賣

【東都歳事記】此月より冷水賣りありく、【俳諧歳時記栞草】江戸の街路に手桶一荷をおろし炎暑に冷水を賣る云々、詞友可苗君曰く水賣は明治三四年頃迄賣りに來たそうだ、尤も昔の艧裁とは少しは異つて居るだろうけれども、風俗といへば大摸様の中形類を着て、尻をじん〳〵端折りにし荷の平桶に眞鍮の茶碗同じく七、及び白玉などを泳がせ、一寸杉の葉か何かを並べて涼しそうに見せかけ、七分は小兒を相手に商賣したものとか、白玉十ばかりに砂糖をふりかけ個は四文であつた、また白玉の代りに道明寺を入れるのもあつて茶碗も中には瀬戸物のも無いではなかつたそうだ、荷は各自思寄りなのを擔いで來たもので、丁度今の定斉屋の荷のやうな三方格子になつてるのを擔いで來たのもあれば、又しん粉屋のやうな荷の市松の屋根障子を張めたのを擔いで來たものもあつた、中には後天秤の方は手桶にしたものもあつた云々、【浮世風呂】「氷水あがらんか冷ッこい、彦「チ、能所へ水賣が來た、オイ水屋、雪女でも氷座頭でも入て、四文がくだつし、水うり「ハイ〳〵、道明寺を入れませうか、とび「道明寺といふ化物は越後にもあるめへス、作「お寺はある、おらアしかも塗つて來た、彦「よせ、最う倦た、面白くもねへ、作「サア御所をしくじつた、チョッおれも水でも飲べい、錢を忘れた、オイ番公、三十二文貸さつし、彦「水を飲に三十二文か、とび「四文が水で二十八文が髪結錢ス、作「馬鹿ア云や、そんな下直なお頭りぢやアねへ、一寸たばねが五十宛だ、オイ水屋、そこにある砂糖をおもふさまぶちこんで一盃くだつし、三十二文やるべい、水うり「ハイ〳〵、作「茶碗を七にてかきまはしながら中み見て、此砂糖は蜂でもまぜやアしねへが、水「本太白でござります、作「嘘をつくぜ、彦「此水屋も作が仲間だぜ、コリャ水屋さん、嘘をつくなら此男と、あすこに團扇ア持居る男と結交てみな、水「ヘヽヽヽヽと笑つて居る、彦「此砂糖が本太白ぢやア、水屋も下地があるはへ、直「能三幅對が出來ましたれ、ハハヽヽヽヽ、とび「作が茶碗の中は砂糖の中へ水を入て飲のだ、作「呑れへか、)とび「水は雖だ、作「腹にあたる風か、とび「こつちは雲の上人だ、直「猛の餓人ではござりませんか、とび「おそろしい、彦「ヤ直兵衛さんも、だまり〳〵して居て弓斷はならねえ、オイ四文、と水屋に渡す、番頭「そりや三十二文よ、アヽ高い砂糖だ、作「がうぎと儲けるぜ、おいらも水賣になるべい、水「ナニサおまへさんがた、是でも天氣都合が惡いと、休みが勝ますからオヽ、やつぱり引合ません、ホンノ輕子をするやうなものでございます、とび「其代に本錢は入られへス、荷は借荷で損料を出すばかり、水「さういふものもあるさうでございますが、私共は手前で盤へました、彦「さうだらう、眞鍮の瀧が規帳面にぶらさがつて、渦卷がおつりきに曲つたぜ、つむじだと餘ッ程意地

が强い、作「それでも此行燈は、錦絵を張つたのぢやアねへ、とび「硝子の竿張だ、作「大分大破に及んだ、葬を卷付ればいゝ、犬がくるゝ、とび「竟は夜爬が出る、彦「コリヤ水屋さん、早く持往れへ、此徒の口に過ちやア協れへ、番「三十二文て水屋さんのお荷物を棚下しだ、

水賣の一つか二つすゝ茶わん
ぬるま湯を辻々でうる暑い事
弓ン杖でやれ冷ッこい〳〵
樹下に居て冷ッこいのをあがらんか
六月は干飯をくらひ水をのみ
旅立の形で白玉賣つて來る

笠

夏日暑を避る爲に被る、竹、木、蔗、蘭、菅、等にて作り其製多くあり殆んど數ふるに堪えず

菅笠の邪魔に成るまで遊び過ぎ
菅笠を元直に賣つて書てやり
切ッ先キで麥藁笠の値を付る
こま犬にかぶせて拜ム三度笠
すげ笠に有ル名でとん死呼かへし
下馬先でばたら〳〵と笠をなげ
笠のじぎたがひにふちをなで〻行
若旦那ひたいに笠を張つたやう
竹笠へ御用はなおをすげて居る
すげ笠で內儀しんしを張つて居る
風に笠とられぬやうに口をあき
瑠璃殿の御門にたえず三度笠
三度笠あれだ〳〵とゆりおこし
笠縫ひの針は山又山めぐり
菅笠の紐があくびをちつとさせ
編笠を笑顏でかぶる柳橋
旅立は二度目のさらば笠でする
ぬけ參り笠をばかぶるものにせず
宿引はあたま數ほどさげて來る
としよりださうで編笠まで笑ひ

麥

【和漢三才圖絵】本綱、大小麥、秋種て冬長じ春秀で夏實る、四時中和の氣を具ふ云々下略、麥刈、麥飯、麥畑都て此項に收む

右々と麥から顏を出していひ
麥めしの馳走は和尙水かげん
麥畑ざわ〳〵〳〵と二人逃げ
麥めしできたへ直して嫁を取り
馬士唄に二人ひれふす麥の中
なびかぬと鎌でおどかす麥の中
麥めしを喰ッたかわりにもとめづか
もとめづかにて麥めしの禮をいひ
した跡でせなあは麥をおこしてく
麥めしにさいはいらぬとみなくらい
麥めしの後あやまつて改める
麥畑小一疊ほどおつたふし

こも僧のかい〳〵しきは麥もとり
麥めしと書いて板へ立てかける
麥めしの味も忘れた長い公事
麥秋に書出しをやる輕井澤
未だのびもせぬもふ來る麥ばたけ
これからはどこでしべいと麥を刈り
麥畑作大將が見あらはし
またくらをのげにさゝれる麥の中
背中から泣兒引出す麥の中
勘當を麥で直して内へ入れ

樋竹賣

【近世風俗志】樋竹なも賣り來る乃ち檐端にかけ雨滴を受る具也、俗にとゆたけ或はとひだけといふ、竿賣樋竹賣ともに肩にして巡る

とい竹はまけて來る時肩をかえ

梅漬

青梅を鹽にて漬けるなり、其梅酢を取りて夏大根越瓜などを短冊形花形に切りて漬るをも梅漬といふ

嫁の庖丁梅漬の大根なり
梅干に餅の戸板を染め直し
懷持のくせに大根を赤く染め
商人の道を梅干からおぼえ
寢すごして嫁梅干を顔へ當て

六月

氷室御祝儀

【東都歳事記】朔日、賜氷の節、加州藩邸に氷室ありて今日氷献上あり、町家にても稀年寒水を以て製したる餅を食して是になぞらふ

御献上御代も手あつき氷なり
御献上富士さへ青く見える頃
すめる民として氷まで豐かなり
手紙には氷器に水ばかり

富士詣

【記事】六月朔日より二十日に至りて諸國の民人富士山に攀登る

六月の布子は天へ最ふちつと
夜や寒き衣や薄き富士の室
六月上旬てつぺんへ旅をする
ふじどうしや下向よしはらどまりなり
頭寒足熱六月ふじの山

駒込富士

【東都歳事記】富士參詣日五月朔日より群集す、是富士禊定の心とて駿河國富士山は常に雪ありて登ることを得ず、故に表墓の時を待て登山す、是にならひて今日參詣するなり、駒込別當本郷江戸名所記に云ふ、此社は百年ばかりそのかみに本郷にありかの所に小さき山あり山の上に大なる木あり、其木のもとに六月朔日に大雪ふりつもる、諸人此木に

立よればかならずたゝりあり此故に人みな恐れて木の下に小祉を造り時ならぬ大雪の降りける故を以て富士權現を勸請申しけり、夫より年毎の六月朔日には富士參とて貴賤上下參詣いたせしを寛永の初めつかた此所を加州小松の中納言拜領ありて下屋敷となる、今も猶其社の跡殘りて毎年六月朔日に神事あり云々、今日境内にて麥稈にて蛇をつくり葉竹に付て商ふ、江戸塵拾といへる双紙に寛永のころ此わたりの百姓喜八と云へるものふと是を作りて祭禮の日市にうりける、諸人珍しく思ひて求めかへりしが其年七月江府疫病はやる時に此蛇を置たる家はかならずして是愛ひなし、是よりして富士詣の土産には必ずこれを求る事になれりと、今は富士淺間勸請の地には何れにても商ふ、又五色のあみ袋果物を售ふ麥稈にて作れる手遊の店うちは也に水氷餅燒豆腐をうりたる由惣鹿子江戸砂子等に記したれど今は此品なし、店うちは天明の頃迄もありしにや下略、富士詣所にあり

駒込の富士は二三も一所
麥藁が化けて蛇となる暑い事
お山よふ御座いとあふぎ〳〵おり
蛇だらけになつて賑ふ二十軒

江戸の富士六合目から横に切れ
清姫をひつさげて來る富士詣り
駒込に三合一歩山を築き
眞桑瓜富士で賣るのは月足らず
富士土産舌ッたらずのきり〳〵す
淺草の富士も拔穴一つあり
時は今不二へじやの出たあしたなり
人穴はふじ權現のうしろなり
じやを下々てお七のはか所聞あるき
ふじとよし原は江戸でも近所なり
じやの道をつか〳〵行くとおふじさま
麥わらの邪推を女房廻ゝなり
江戸の富士吉原宿ゝへすべり落ち
じやのひけものを朔日のばんにかひ
一日は蛇の道になり衣紋坂
蛇と蚊の出るのは駒込の六月

土用見舞

暑中見舞ともいふ、親族知己を訪問して消息を問ふことなり、蟲干の項參照すべし

仰ぎ願くは水をと暑氣見舞
暑氣見舞たつて裸にされるなり
暑氣見舞背中を向けて此通り
甚寒と立派に述べて汗を拭き
暑氣見舞馳走に肌を脱げといふ
戰場へ向ふが如く暑氣見舞
暑氣見舞嫁の手厚い事を知り
上下をつまんで坐る暑氣見舞
能い草を持つたと洒落る暑氣見舞
夏まけもせぬ武者振りと見舞いひ
甲冑をたいした所へ暑氣見舞
こはそうに膝へ手を置く精好平

金目貫見しやれと上るせいごひら

ゑり紙をさらつて通す暑氣見舞

暑氣見舞春中をつまみあふがれる

暑氣見舞まくらとうちわ持て逃げ

久しい文をよむ所へ暑氣見舞

井戸ばたでたてつけてのむ暑氣見舞

暑氣見舞行水をするごくこんゐ

こゝいらへすわりましよふと暑氣見舞

皿へ手を當てゝ時宜する暑氣見舞

寢冷

夏月に多し、就寢の時暑熱甚しく夜具を剥はずして眠り、夜半に至りて冷氣の迫るを知らず遂に風邪にかゝる

子の寢冷翌日夫婦喧嘩なり

巨蟒

熱帶動物なれども我國にも古來より大蛇少なからず、體長四五丈に達するものあり

うはゝみの大概をいふ醬油樽

鮨

【家庭百科事彙】喉鰾類の泥鮨科に屬す、鱗なく形鰻に似て短く六七寸を最長とす、口部に十乃至十二本の鬚あり、溝渠水田等に產し、時々水面に浮びて泡沫を吐く、これに普通鮨、鷺の羽鮨の二種あり、後者は體に黑點あり、京都地方より多く產す、また上野產の柳鮨あり、また信濃野澤邊より出づる緋鮨は色稍〻赤く、また一種稻の花と稱するは、稻花落ちて後水田に生ずるより此名あり、味頗る佳なり、捕獲後清水中に放ち、數日の間よく泥を吐かしめ、或は燒き或は煮て食す、味は鰻より劣れども、蛋白質及び脂肪分に富み頗る良好なる食品なり云々、俗多く土用中に食す

こわそふに鮨の桝を持つ女

さゝかして居りや二三疋跳て出る

鮨汁女房隣りへ行つて居る

もちやそびに四五疋殘す鮨汁

鮨汁内儀食つたら忘れるず

母の留守鮨を買つて知らん顏

念佛も四五へん入レるどじやう汁

鰻

【家庭百科事彙】喉鰾類に屬す、體は圓長にて長大なるものは二三尺に及ぶ、皮膚は厚く、頗る膠質の粘液に富む、鱗は頗る柔軟なり、口は濶くして其口角は眼下に達す、體色は平常棲息する地によりて差違あれども背部は概れ暗綠色、背黃色、茶褐色等にて、體側は稍〻淡く、腹部は純白又は微黃金を帶ぶ、其背部及び肛門の鰭は殆んど全身の三分の二に亘る、我が邦各地の河川沼湖に產す、中略、食膳には蒲燒を最とす、其味美なるを以て古來邦人の頗る嗜好する所なり云々、俗土用中丑の日に之を食す

又の日はのろ〳〵出來ぬ蒲燒屋

錐よ金槌よと素人のうなぎ

鰻屋はむごひと云へば腹を立て

辻番と思へば鰻燒いて居る

子供よく湯漬に鰻そへて食べ
素人にや横裂けのする鰻なり
四ッを打迄うなぎにてのんでいる
はんぎりの中に鰻はのび上り
鰻屋に閑レの下女けふも居る
向ふがわ無ィでうなぎがうれるなり
ぬかごから蒲焼までのうきくろう

振舞水

夏日市井の間に瓶を出して是に桐杓及び茶碗を添へて出し置き、往還炎暑に苦しむ人に之を飲ましむ、是を振舞水といふ

舌打で振舞水の禮は濟み
四人で振舞水をみんな飲み

蟲干

土用干ともいふ、土用中諸社諸寺寶寶の蟲拂を爲し諸人に拜觀せしむ、又家々にても衣服書畫其他調度を天日に曝す

用心に壺寢して居る土用干
土用干隣の嫁はうつくしき
一日は春めいて來る土用干
御具足へ枝を鳴らさぬ風を入れ
暑い筈花嫁小袖幕を打ち
居所にまごついて居る土用干
蟲干をつひに他人の手にかけす
蟲干の中に花嫁しのびごま

土用干とは傾城に無い圖なり
土用干下女がはふくれあがるなり
土用干せッつく内が娘なり
蟲干にくすんで見える男もの
大汗で殿上人を相手どり
蟲干にへろ〳〵武者が二三人
二年目の土用干には雛ばかり
上用干疊の上の廻り道
土用干いつちしまひは生のもの
一日は娘まかせの土用干
蟲干の前夜閨男つれて逃げ
紅絹裏の無いは笑止な土用干
武者一騎蟲干の座で叱られる
面白がつて子のくゞる土用干
大笑ひ座頭へ鎧着せて逃げ
土用干淋しいかはりいゝきりやう
三六の通ひだと雛干して居る
御蟲干見ぬ御先祖の物語り
武者一人叱られて居る土用干
土用干留主と答へて眞ッ裸
土用干下女下されば着る氣なり
蟲干に小袖着たがるぐわんぜなき
土用干下女にもしろとなぶるなり
又盥さも出すはとだます土用干
振袖の次ゃにいくさの土用干

細引へ横にかけるは數がなし
むし干をなげにわたしてさせるやう
土用干下女あれがゐゝ是がゐゝ
武者一騎まごつくを見る暑氣見舞
おきやあがれ下女蟲干をいたしやす
土用干女郎の宗旨に無い事
盗人の目に花の咲く土用干
酒呑ミのきうあくの出る土用干
土用干みすぼらしいが嫁のよさ
一日は衣服の中へ雛をたて
嫁の雛見直しに來る暑い事
ひや麥を紗綾や綸子の下で喰ひ

六月芝居休み

【我衣】享保六壯年春、市川團十郎(二代目三升)大あたりなり依之褒美として此後他の芝居へつとめず勘三郎後見して可勤給金千兩にきはめ、毎年六月可休申ときはめたり、今に是を定めとす(昔の芝居と今とは都て大に異なり)云々、【劇場新話】六月中旬より土用休みなり、古來は役者一ケ年極の事ゆゑ六月休といふ事なし、勿論古人市川柏莚に限り土用中休みしが今は一體の休となる、近來又土用芝居といふことあり重立し役者は休みて若手中立もの小詰交り興行す、尤も直段を安札にして殊の外はやることなり云々

入りは落ちたかと柏莚土用干

蛸

頭足類に屬す、いひだこ、おようだこ等あり　蛸を抽ふるには多く壺を用ゆ、これを蛸壺といふ

酢てんがいなどこしらへて園と待ち
吟味して買はぬと蛸は七本なり
料理人小指ほど章魚切つて呉れ

夕すゞ

夏の日傾きて涼氣生ずるをいふ

夕すゞになつて出やうとなまけもの

雲の峰

陶淵明が詩に曰、夏雲多二奇峰一、雲の層々として聳えて峰の如きをいふ

雲の峰これぞ暑さの峠なり
夕立の樂屋と見える雲の峰

夏の月(不及註)

取前の湖夏渡るのは月ばかり
腰掛へ櫛の斑のすく夏の月

南天

小喬科の常綠の灌木にて六七月の頃小白花を開く、雜部の意に取りて嘉祝の物とす、盆栽として愛翫す

南天の下へ捨てゝるいゝ茶殼

雷電

大氣中には、主に水蒸氣の蒸發及び收縮等によりて、多量の電氣を起すことあり、此際一方陽電氣にて、他方陰電氣なる時は、其異種の電氣互に相牽引して、遂に其中間の空

氣を突破り、火花を發して中和す、此火花に依り空氣に激動を受け鳴動すべし、これを雷といひ、又其時の火花を電光といふ

たゝまれた蚊は雷に逃り
雷も雀が啼けばしまひなり
雷は鳴る時ばかり樣をつけ
鳴りやんで折目をたゝむ普門品
雷のえてはねのける額の手
來ずといゝ人迄雷の見舞なり
水論を分くいかづちの中直し
雷はいつかけのある雲を出し
稲光り禿を二人ぶつちがい

夕立

【月令】此月土潤溽暑、大雨時行、俄雨の句甚だ多し、中に就て夏月に關するものを此項に收む

夕立を四角に逃げる丸の内
夕立に蛇の目を廻す茅場町
ひどい夕立こし屋にも二三人
夕立に五ッ所紋をみなくはれ
夕立のあとでどふつと人通り
夕立にあつて褌すきになり
夕立に馬を半分濡らすなり
夕立は急がぬ人の先を降り
夕立の盛替を食ふ長ッ尻
夕立の戸はいろ〳〵にたてゝ見る
夕立のあした鰹と傘を下ゲ
どふくやの庭で帷子しぼつてる
夕立は十七屋から京へ知れ
夕立にあふと女はすたるなり
夕立のむかひはだかで傘をさし
夕立で一斗七升河岸がたれ
夕立のたんびに仁者かしなくし
夕立や草履で行ける所まで

暑い事

暑は三夏に通ずといへども就中六月を以て堪えがたしと爲す、此故に題にかゝはらず都て此項に收む、或は重出の句あるべしと雖も亦止むを得ざるに因る

暑い事菅笠垢離の聲ばかり
風鈴もだんまりで居る暑い事
晩に寢ることを苦にする強い暑氣
暑い事隣でも未だ話聲
富士山に初雪の降る暑い事
暑い事酒の相手にやつこ出る
暑い事かさねだんすで蟬が鳴き
我がうちに腰かけて居る暑い事
暑い事羊羹箱の外へ出る
眞直くな柳見て居る暑い事
暑い事嫁袷元をくつろがせ
寢ざあなるまいと苦にする暑い事

暑い事　金覆輪の雲が出る
足元を鼠のあるく暑い事
暑い事蛇籠の中へ芋を入れ
暑い事鼠に庭をかけさせる
暑い事あたまのかけた鳥が出る
たから比べを嫁がする暑い事
柳さへ亜れたまゝ居る暑い事
車引牛てんかぶるつよい暑氣
暑い事隣りの寶かぞへたり
花嫁の人目にかゝる暑い事
めしびつへ顔をつッこむつよい暑氣
えゝ聲でぶら〳〵と出る暑い事
ふんどしをせひなく〳〵る暑い事
暑い事嫁あごばかりあふぐなり
ねころんで論語見て居る暑い事

蟬

【格物論】蟬雨翼喙長くして腋下に在り、或は以爲口なし脣を以て鳴るものなり云々、數種類あり

通町うろたへて來た蟬の聲
俄雨遙か向ふで蟬の聲
弔ひの供は墓所で蟬を取り
靈棚へ蟬を放して叱られる
みん〳〵とないても月と花は見ず
蟬をしばつてと仕事のそばへ來る

ころも蟬大序のやうにうなり出し
三めぐりで日ぐらしのなくいゝ時分
ひまな事蟬のぬけるに二三人
たてかけた長持へ來てせみがなき

皷子花

【和漢三才圖絵】此花來牛花の如にして紛紅色、日午に盛んにして旦暮に萎む、故に俗來牛花を朝顔と稱するに對し此を晝顔と名づく

晝顔の花は式部が筆に漏れ

蓮花

【東都歳事記】不忍池、東都第一の蓮池なり、荷葉しげりて水面を覆ひ、蓮蕚碗々として鮮に潔く芳香又他に勝れり、是を賣する賤人翌明より此地に逍遙し、妙音天の祠堂柏尸多く、毎家荷葉飯を售ふ當所の名産とす

清らかな花水鳥の留主に咲き
水無月の池に寶珠を盛上げる
蓮の茶屋客に蜘蛛の巣掃はせる
蓮を見にかこつけて餘所の顔で來る
蓮池をこいつと思ふ二人連れ
蓮を見に息子を誘ふいやな後家
どの宗旨にも仲の宜い蓮の花
蓮池をぐるふり廻る安いきやく
蓮池で〇〇〇くはへて引こまれ
蓮の茶屋今朝から半座明けて待ち
はちす葉のにごりに後家はしみて來る

しろ水の流れた所へ蓮が咲き

夕顔

【和漢三才圖絵】彼岸の中に種を下し立夏前後に苗を移し五六月白花を開く、日午は萎み暮に盛んなり、故に夕顔と稱す、實を結ぶ早晩の二種あり

夕顔の夜露でてゝら二布濡れ

夕顔は大工の建てぬ家に咲き

甜瓜

【時珍】甜瓜の味、諸瓜より甜し、故に獨り甘瓜の稱を得たり、【俳諧歳事記栞草】美濃本巣郡眞桑村、これ甜瓜の樹與なり、故に眞桑瓜といふ

風呂敷を解くとかけ出す眞桑賣

眞桑瓜一つよぢ〳〵持つて來る

たゝ持つて居る約束の眞桑瓜

瓶の中立泳ぎする眞桑瓜

這ひつくと四五寸のける眞桑瓜

瓜（雜）

初瓜、姫瓜、越瓜等種類多し、早に瓜といひて其名を指示せざるものを茲に收む

水桶の瓜やう〳〵ととらまへる

木の下にむぎすてゝある瓜の皮

炎天にすべるを見れば瓜の皮

瓜喰ふた所に忘れる柄袋

夕立にふんぞりかへる瓜の皮

瓜一つぬすめばはたけ中うごき

くらべッこして白瓜を一つかひ

筒井筒ひやした瓜をのぞいてる

瓜畑

瓜を多く作れる所には畠の中に番小屋を建て番人を置きて盜難を防ぐ、瓜田に蹈を入れずとは嫌疑を避くる所以なり

畫の内夢を見て置く瓜の番

瓜畑わるい鼻緒の切れ所

瓜畑出てから鼻緒すげて履き

雨乞

【記事】六月旱する時は民間祈雨の法を修す、是を雨乞といふ、民人鉦を打ち太鼓を鳴らして踊躍す、或は笠を戴き簑を着て雨中の粧ひをなして是を祝し諸神を祈る云々、小町の雨乞の和歌、其角の雨乞の俳句は名高く川柳に多し

いなづまを拜借に行くあつい事

雨請の利益すべつたりころんたり

謎請東方どつとゝふつて來る

三園の雨は小町を十四引き

三園の雨はゆたかの折句なり

上の句で曇り下の句ぶんまける

雨乞も女はたんと口をきき

宗匠へ裝よ笠よと土手の雨

句をほめるやうに蛙は鳴き出だし

夕立の一句稲荷もはだしなり

裝束は其角此方出來るなり
雨乞の歌もくどきがまじつて居
夕立や十二字たすと降つて來る

祭前

此月は祭り月とて江府所在の神社祭禮を執行す、就中鳥越明神、氷川明神、牛頭天王、山王權現等の祭禮盛儀を極めたりといふ、此故に江戸市民は此前日より其準備に日も之れ足らざる有樣なりしといふ

借金をいさぎよくする祭前
祭前洗粉持つて湯屋へ來る
祭前二日の店しゆやたら二歩
おみ樣のきゝあきをする祭前
祭前伊勢屋の内でもめるなり
仕立屋にけだものゝある祭前
おめへさんお聞なんしと祭前

山王權現祭禮

【東都歳事記】十五日、永田馬場日吉山王權現社御祭禮、干寅辰午申戌の年隔年なり　往古は年々六月十五日神輿龍の別當勧理院神主樹下氏口より乘船にて船祭ありしが元和年中より御城内へ入ることゝなり、又寛永十一戌年より大祭となり、天和の頃より隔年に行はせらるゝとぞ、當社御祭禮は東都第一の大祭禮なり、當日往來を止めて猥りに通行を免さず、脇小路は柵を結ひ棧敷は二階を禁ぜらる、諸侯よりは長柄槍幟を出して警固せしめられ又神馬等を牽せらる、警固の壯士行列を揃へて嚴重なり、産子の町、南は芝を限り西は麴町、東は霞岸島小網町堺町の邊を限り、北は神田に至る、祭禮番組四十五番町數凡そ百六十餘、各々花出しを出して牛車にて是を曳く、大傳馬町の鶴、南傳馬町の猿、麴町の猿女さると隔年騎射人形、四番の鯱に水車、七番の辨才天、八番の春日龍神、九番の靜御前人形、十番の加茂能人形、十一番の淨妙一來法師、十七番の鵜船、二十一番の龍神、二十二番の熊坂人形、二十三番の分銅槌の鉾、二十四番の神功皇后人形、二十八番の大鋸、二十九番の茶釜、三十番の鯨船、三十六番の狩に鎌、三十八番の寶船、三十九番の茶臼挽人形、四十番の八乙女人形、四十三番の幣に槌、四十四番の僧正坊牛若人形等の出しは祭禮の年毎にたがはず出る、其餘例年出る出しあり、附祭と名づけて左の町々より出しに添へて踊りゐり物曳ものを出す、年々趣向あらたにして各花美を盡くし江府の繁昌此時と知らる、大傳馬町鶴諫鼓の出しはいにしへさるとりとて一番に猿、二番に鶴の出しを渡しけるが元和の頃かたじけなくも産命ありしより鶴を一番に渡すことゝなりぬ、此大傳馬町南傳馬町の二町は慶長以前よりの町屋にして最初以來より付祭りを出す事なし、此鶴山王祭には五形に色どりたるを出し神田祭には白鶴を出す事古しへよりしかり、中略、麴町より朝鮮人來朝のれりものにて大なる象の造りものを出しける事世に名高し今は年々に出さずして付祭の番に當り〻時之を出す云々、尚行列の順序、神輿渡御の道順を記しあれど繁ければ略す、又川柳にある法師武者は衆徒十騎列中に在りて神輿を警固せるものにて是も當時名高きものゝ一なりしなり、而して出し、屋臺等を曳く牛車は芝の牛町より雇ひしといふ

うしろから追はれるやうな榊舁
迷惑な顔は祭に牛ばかり
ほう〳〵で角をもがれて行く屋臺
滝團扇かぶつたやうな神輿かき